

有年原・クルミ遺跡

赤穂市

有年原・クルミ遺跡

－一般国道2号相生有年道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

兵庫県文化財調査報告
第457冊

兵庫県教育委員会

平成26（2014）年2月

兵庫県教育委員会

有年原・クルミ遺跡

赤穂市

有年原・クルミ遺跡

－一般国道2号相生有年道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

兵庫県文化財調査報告
第457冊

兵庫県教育委員会

平成26（2014）年2月

兵庫県教育委員会

赤穂市

有年原・クルミ遺跡

－一般国道2号相生有年道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成26（2014）年2月

兵庫県教育委員会



遺跡遠景（東から）



遺跡全景（北東から）



A 2地区 祭祀遺構（西から）



A 2地区 S D22 出土絵画土器



A 2 地区 S X01 出土遺物



A 2 地区 S D06 出土遺物



A 2 地区 S D22 出土遺物



B 地区 S D03 出土遺物

例　言

- 1 本書は、兵庫県赤穂市有年原に所在する有年原・クルミ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、一般国道2号相生有年道路事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 調査の推移
(発操作業)
本発掘調査 平成21年6月24日～平成21年10月14日
実施機関：兵庫県立考古博物館
工事請負：千種建設株式会社
(出土品整理作業)
平成25年6月21日～平成26年2月26日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 調査成果の測量は、座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 5 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 渡辺界と長濱誠司が担当した。編集は長濱が行った。
- 6 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 7 発掘調査にあたっては立命館大学青木哲哉氏に現地指導を受け、本報告書に玉稿を賜った。お礼を申し上げます。

本文目次

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 有年原・クルミ遺跡	1
第3節 発掘調査の経過	1
第4節 出土品整理作業の経過と体制	5
第2章 遺跡をとりまく環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の結果	
第1節 A 1 地区の調査	10
第2節 A 2 地区の調査	11
第3節 B 地区の調査	16
第4章 有年原・クルミ遺跡の地形環境	(青木哲哉) 21
第5章 まとめ	30
報告書抄録	32

挿図目次

第1図 遺跡の位置	v
第2図 調査地点位置図	2
第3図 周辺の遺跡	9
第4図 出土石器・金属器	19
第5図 調査区断面トレンチ位置図	20
第6図 調査区周辺の地形面区分図	22
第7図 調査区付近における微地形の分布	23
第8図 A 1 地区におけるトレンチ断面図（南北方向）	25
第9図 A 1 地区におけるトレンチ断面図（東西方向）	26
第10図 A 1 地区と A 2 地区間の大畦畔断面図	27
第11図 溝・畦畔の方向	31

表目次

第1表 出土土器法量表.....	18
第2表 出土金属器法量表.....	19
第3表 出土石器法量表.....	19

図版目次

図版1 調査区全体図
図版2 検出遺構と周辺地割
図版3 A1地区 全体図
図版4 A1地区 北壁断面図
図版5 A1地区 土坑
図版6 A1地区 溝（1）
図版7 A1地区 溝（2）
図版8 A2地区 全体図
図版9 A2地区 北壁断面図
図版10 A2地区 壁穴住居跡
図版11 A2地区 祭祀遺構
図版12 A2地区 祭祀遺構断面図（1）
図版13 A2地区 祭祀遺構断面図（2）
図版14 A2地区 土坑
図版15 A2地区 水田・畦畔
図版16 A2地区 溝（1）
図版17 A2地区 溝（2）
図版18 A2地区 溝（3）
図版19 B地区 全体図・東壁断面図
図版20 B地区 遺構
図版21 出土遺物（1）
図版22 出土遺物（2）
図版23 出土遺物（3）
図版24 出土遺物（4）

巻頭写真図版目次

巻頭図版1 遺跡遠景 遺跡全景
巻頭図版2 A2地区 祭祀遺構 A2地区 SD22出土絵画土器
巻頭図版3 A2地区 SX01出土遺物 A2地区 SD06出土遺物
巻頭図版4 A2地区 SD22出土遺物 B地区 SD03出土遺物

写真図版目次

- 写真図版1 遺跡周辺空中写真
- 写真図版2 A1地区全景 A1地区SK01・02断面 A1地区SK03断面 A1地区SK04断面
- 写真図版3 A1地区SK05断面 A1地区SK06 A1地区SK06断面 A1地区SX02断面 A1地区溝と現況畦畔
- 写真図版4 A1地区大畦畔 A1地区大畦畔と現況畦畔 A1地区大畦畔付近断面
- 写真図版5 A1地区SD11・12・13断面 A1地区SX01・SD27断面 A1地区SX03・SD27断面 A1地区SD29・30断面 A1地区SD66・67・82断面 A1地区SD120断面
- 写真図版6 A1地区SD121断面 A1地区SD129断面 A1地区SD174・176断面 A1地区SD184・186断面 A1地区西壁断面
- 写真図版7 A1地区東西断割トレンチ A1地区東西断割トレンチ断面① A1地区東西断割トレンチ断面②
- 写真図版8 A1地区南北断割トレンチ A1地区南北断割トレンチ断面① A1地区南北断割トレンチ断面②
- 写真図版9 A2地区全景① A2地区全景②
- 写真図版10 A2地区西半部① A2地区西半部② A2地区東半部
- 写真図版11 A2地区SH01検出状況 A2地区SH01断面 A2地区SH01完掘状況
- 写真図版12 A2地区SH01炭化物検出状況 A2地区SH01炉 A2地区SH02炭化物検出状況 A2地区SH02断割断面
- 写真図版13 A2地区祭祀遺構遠景 A2地区祭祀遺構① A2地区祭祀遺構②
- 写真図版14 A2地区祭祀遺構③ A2地区祭祀遺構検出状況 A2地区祭祀遺構断面① A2地区祭祀遺構②
- 写真図版15 A2地区祭祀遺構遺物出土状況 A2地区祭祀遺構柱穴断面 A2地区祭祀遺構P2断面
- 写真図版16 A2地区SE01 A2地区SE01断面 A2地区SD08断面 A2地区SD09断面 A2地区SD10断面
- 写真図版17 A2地区SK03断面 A2地区SK04断面 A2地区SK07断面 A2地区SK08断面 A2地区SK09断面
- 写真図版18 A2地区SD05 A2地区SD05断面① A2地区SD05断面② A2地区SD05遺物出土状況
- 写真図版19 A2地区SD06 A2地区SD06東西断面 A2地区SD06南北断面
- 写真図版20 A2地区SD06遺物出土状況
- 写真図版21 A2地区SD22 A2地区SD22断面 A2地区SD22遺物出土状況 A2地区SD22断割断面
- 写真図版22 A2地区SD01断面 A2地区SD02断面 A2地区SD03断面 A2地区SD13断面① A2地区SD13断面② A2地区SD14断面 A2地区SD15断面
- 写真図版23 A2地区SD16断面① A2地区SD16断面② A2地区SD16断面③ A2地区SD16断面④ A2地区SD16断面⑤ A2地区SD17断面

- 写真図版24 A 2 地区 S D18断面 A 2 地区 S D20断面 A 2 地区水田① A 2 地区水田②
- 写真図版25 A 2 地区水田畦畔断割断面 A 2 地区水田断面 A 1・A 2 地区間畦畔断割断面① A 1・
A 2 地区間畦畔断割断面② A 2・B 地区间畦畔断割断面
- 写真図版26 B 地区全景① B 地区全景② B 地区東壁断面① B 地区東壁断面②
- 写真図版27 B 地区 S B01 B 地区 S B01 P1断割断面 B 地区 S B01 P2断割断面 B 地区 S B01 P3
断割断面 B 地区 S B01 P4断割断面 B 地区 S B01 P5断割断面 B 地区 S B01 P6断割
断面
- 写真図版28 B 地区 S D01・02 B 地区 S D01断面・遺物出土状況 B 地区 S D02断面 B 地区 S D04
断面
- 写真図版29 B 地区 S D03・04 B 地区 S D03 B 地区 S D03断面 B 地区 S D03遺物出土状況
- 写真図版30 A 1 地区 出土遺物（1）
- 写真図版31 A 1 地区 出土遺物（2）
- 写真図版32 A 2 地区 出土遺物（1）
- 写真図版33 A 2 地区 出土遺物（2）
- 写真図版34 A 2 地区 出土遺物（3）
- 写真図版35 A 2 地区 出土遺物（4）
- 写真図版36 A 2 地区 出土遺物（5）
- 写真図版37 A 2 地区 出土遺物（6）
- 写真図版38 B 地区 出土遺物



第1図 遺跡の位置

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道2号は大阪市を起点に福岡県北九州市にいたる、近畿と中国・九州を結ぶ西日本の基幹道路である。兵庫県内は大阪湾・瀬戸内海の沿岸部を東西に通過し、明石市から岡山県境までの播磨地域は国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所が管理している。戦後この区間の沿線は市街地の拡大や産業発展により通行車両が急増し、渋滞や周辺の環境悪化が問題となり、車線拡幅やバイパスなどの整備が順次進められた。バイパスの終点となるたつの市以西は4車線拡幅が行われ、相生市までの区間が供用開始し、平成9年には国道に並行して高規格幹線道路である山陽自動車道が全通したが、大型車両の国道通行はなお多く、渋滞や騒音問題の解消には至っていない。

本報告に起因する一般国道2号相生有年道路は、国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所によって昭和60年度に相生市若狭野町若狭野～赤穂市東有年までの4.9kmが有年道路として事業化されたことに始まる。平成12年度には事業区間が相生市若狭野町鶴龜～若狭野町若狭野間3.7kmが追加され、相生有年道路として計8.6kmが事業化された。東側の相生市域より順次事業が進捗し、車道の4車線化、バイパス新設により円滑な交通の確保とともに歩道、遮音壁などの整備も行われ周辺の環境改善も図られる。事業の大半は現道の車線拡幅だが、赤穂市有年横尾付近は現道が集落内を通過していることから、現道西側に延長2.8kmのバイパスを新設する。平成21年には相生市内の区間の一部が供用開始し、さらに事業が西へ進捗することから、それに対応して埋蔵文化財の調査を行うことになった。

第2節 有年原・クルミ遺跡

有年原・クルミ遺跡は、赤穂市有年原、有年牟礼と有年横尾地区の境界付近にあたる有年原字クルミに位置する周知の遺跡である。遺跡付近の水田には条里地割が遺存している。

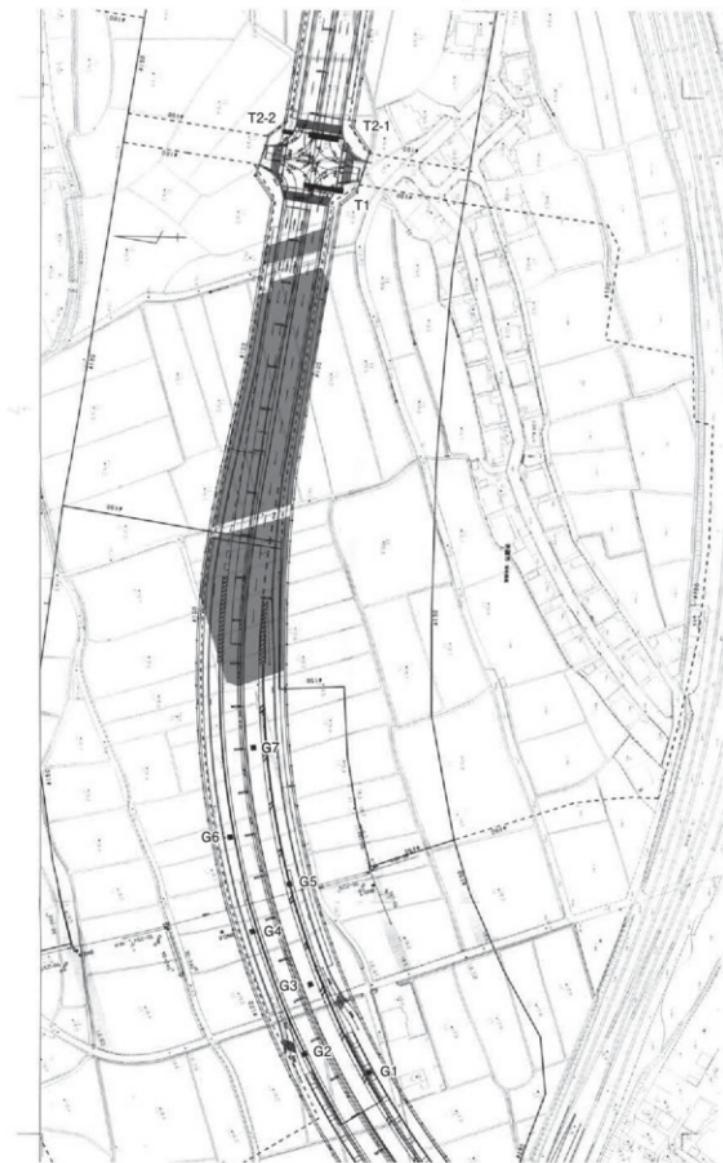
バイパス新設に関連してJR有年駅周辺の区画整理も行われ、これに伴う埋蔵文化財の調査は赤穂市教育委員会が行っている。矢野川南岸の平野部は遺跡の空白地帯であったが、区画整理事業の具体化に合わせて赤穂市教委が平成7年度に事業地内の分布調査を行い、対象地の広域に遺物が散布することが確認された。遺跡に対する範囲確認のための確認調査は、赤穂市教育委員会により平成9・10・15年度に実施した。

平成17年度にJR有年駅周辺の区画整理事業が具体化したことから、平成18年度に市道敷設箇所について、確認調査により調査範囲を絞り込んだ後2,600m²を対象に本発掘調査を開始し、以後継続的に調査を行っている。その結果、縄文時代後期、古墳時代初頭、中世の遺構を検出しているが、遺跡の大部分は生産域であったと推定される。また奈良時代の「奥津家」と書かれた墨書き器が出土し付近に古代役所の存在が推定される。近世以降は遺跡周辺は完全に水田となる。

第3節 発掘調査の経過

1. 分布調査

一般国道2号相生有年道路の埋蔵文化財の対応は、平成12年度に事業が具体化したことに始まる。平成12・13年度に用地取得などに合わせて相生市内における事業地内の分布調査を部分的に実施したが、事業地全域を対象とした分布調査は平成14年度に実施し、事業対象地の遺物の散布状況や地形観察など



第2図 調査地点位置図

を行った。この結果、相生市域では地形観察などから集落の存在を想定した（No.1 地点）。赤穂市域では事業対象地が千種川東岸は有年牟礼・井田、クルミ遺跡（No.2 地点）、西岸は東有年・沖田、西有年遠古殿遺跡（No.3 地点）の周知の遺跡に重複することが判明した。

平成14年度

遺跡調査番号：2002183

調査期間：平成14年12月11日

調査機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者：甲斐昭光・高瀬一嘉

調査面積：239,400m²

相生市域については、No.1 地点について平成18・19年度に確認調査を実施し、遺構・遺物を検出した。平成20年度に若狭野町所在の西柄遺跡、宮ノ前遺跡の本発掘調査を実施し、本報告書と同時進行で出土品整理作業を行った。

赤穂市域のうち、千種川東岸（No.2 地点）については、相生有年道路に伴う分布調査の時点では有年原・クルミ遺跡、有年牟礼・井田遺跡として周知され、赤穂市教育委員会が本事業地を含め区画整理に伴う確認調査を行っている。その後隣接地で市道部分の本発掘調査が行われ、本事業対象地内も遺構が広がる可能性が高いことから、両遺跡ともに市教委の調査成果をもとに本発掘調査を行うこととなった。東側に隣接する有年牟礼・井田遺跡は、平成21～23年度に4次にわたって本発掘調査を実施した。

有年原・クルミ遺跡についての確認調査は、西側について、遺跡の範囲を確認する調査を本発掘調査前に実施した。また本発掘調査の結果、東側に遺構が広がる可能性があったため、遺構の広がりを確認するため平成23年度に有年牟礼・井田遺跡の本発掘調査と並行してトレンチによる調査を実施した。

1. 確認調査

平成20年度

遺跡調査番号：2008182

調査期間：平成21年2月2日～3日

調査機関：兵庫県立考古博物館

調査担当者：別府洋二

調査面積：70m²

概要

本発掘調査対象範囲の西側について、遺構面の広がりを確認するため、グリッドによる調査を行った。G 1・3・4・5・7では、地表下約0.7mで旧地表面が検出されたが、面は安定せず遺構も確認できなかった。その下層は粘土・シルト・細砂となり、後背湿地状の堆積となる。G 4では流木などが含まれる有機質層が検出された。

G 2・6では、地表下約0.7mで基盤層である黄褐色粘土層が検出されたが、遺構は検出できなかった。G 2では基盤層が南側へ落ち込む境界部を検出し、落ち込みに堆積した上層から加工木材が出土してい

る。土器は出土していないが、中世の耕作土あるいは流路の一部と推定される。遺物の出土は多くは旧耕作土内やその直下の整地層からで、明瞭な遺物包含層は存在していない。

調査の結果、調査範囲内では北端の一部にのみ微高地が残存し、遺跡本体はさらに北側、あるいは東側に立地し、本調査範囲までは広がっていないことが明らかとなった。

平成23年度

遺跡調査番号：2011317

調査面積：80m²

調査機関：兵庫県立考古博物館

調査担当者：岸本一宏・仁尾一人

調査期間：平成24年1月18日～3月5日

概要

本発掘調査B地区の東側20～50mの範囲についてトレンチにより、遺構および遺構面の有無を確認するための調査を行った。

T 1 では耕土・盛土・床土直下でオリーブ灰色層を検出した。この層は粘質で軟質であり、上面で遺構は検出できなかった。また南端に近い位置で明黄褐色の基盤層が北側に深く落ち込んでいることが確認できた。基盤層が高位で残存する範囲は幅1.5m足らずで、その南側も深く落ち込んでいる。

T 2 - 1 もトレンチ 1 同様に床土下部にオリーブ灰色層が堆積する。さらにその下層は砂層や砂礫層となり、遺構面となりうる土層は認められず遺構・遺物も検出できなかった。これらの堆積層は矢野川旧河道部分の堆積層にあたると判断され、トレンチ 1 の深掘りでも同様の堆積状況が確認できた。T 2 - 2 も同様の堆積をみせ、矢野川旧河道堆積層がさらに深く堆積し、遺構・遺物は検出されなかった。

調査結果から、今回確認調査を行った範囲は、B地区で存在した遺構面となる基盤層は矢野川の氾濫によって削り取られたものと判断した。したがって確認調査を行った範囲以東については、遺構面は統かないことが明らかとなった。

2. 本発掘調査

赤穂市教育委員会による確認調査、および隣接地での本発掘調査の成果に基づいて本事業地内の調査対象地を決定した。また、平成20年度実施の確認調査により西側の調査対象範囲を絞り込んだ。

発掘調査工事は千種建設株式会社、空中写真測量は株式会社エイト日本技術開発に委託した。本発掘調査にあたっては、国土交通省のほか区画整理を行う赤穂市とも調整を行い進めた。

調査は残土仮置きの都合でA 1 地区、B 地区、A 2 地区の順で進めた。水田耕作土を除去したのち、遺物包含層まで機械で掘削し、その後入力により遺構面までの掘削と精査を行った。遺構削除終了後に空中写真測量により調査区の図化を行った。なお空中写真測量は2回実施した。

調査の最後に立命館大学青木哲哉氏により地形形成の調査指導をうけたほか、現況畦畔の断割り調査を行い土地利用の一端の解明に努めた。

また調査終盤の10月3日には地元住民を対象とした現地説明会を行い、多くの参加を得た。

遺跡調査番号 2009147

調査期間 平成21年6月24日～10月14日

調査機関 兵庫県立考古博物館

調査担当者 渡辺 昇・長濱誠司

調査面積 6,816m²

第4節 出土品整理作業の経過と体制

有年原・クルミ遺跡についての出土品整理作業は、本発掘調査時に現地において、水洗、ネーミングを行ったことに始まる。

本格的な作業は、平成25年度に実施した。兵庫県立考古博物館魚住分館にて水洗、ネーミング作業を行った後、出土遺物を兵庫県立考古博物館に搬入し、接合・補強、実測、復元、写真撮影、図補正、トレース、レイアウトを経て報告書刊行まで諸作業を単年度で実施した。

遺物写真撮影は株式会社クレアチオに委託して行った。また遺跡出土の炭化物について、株式会社加速器分析研究所に委託して放射性炭素年代（AMS測定）を行い、その成果は遺構原稿に反映した。

工程管理担当：長濱誠司・深江英憲

保存処理担当：岡本一秀

非常勤嘱託員等

水洗・ネーミング

今村直子・小野潤子・藤尾裕子・松本恵梨子

接合・補強 復元

荻野麻衣・島村順子・佐々木愛・菅生真理子・上田紗耶香

実測 図補正 トレース 写真整理 レイアウト

友久伸子・古谷章子・川村由紀・坂東知奈

保存処理

桂 昭子・梶原奈津子

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

赤穂市は兵庫県南西端にあたり、西は岡山県に接する。南は瀬戸内海（播磨灘）に面し、その海岸線は瀬戸内海国立公園の一部に指定された景勝地である。人口は50,702人（平成25年1月末現在）を数える。製塩と赤穂義士で全国的に知られる。

かつては北の赤穂郡上郡町、東の相生市とともに赤穂郡を構成していたが、1951年に赤穂町・坂越町、高雄村が合併し市制を施行、1955年に有年原・クルミ遺跡が所在する有年村を編入し、市域北部が形成される。さらに1963年には旧備前国の一である岡山県福河村福浦地区を編入してほぼ現在の市域が形成される。市域は千種川の下流域にあたり南北に貫流する。市街地は河口の三角州上に所在するが、河口付近の陸地化は中世以降に進み近世の赤穂城城下町から発達したものである。

千種川は鳥取・岡山県境江浪峠に源を発し、岡山県境に沿って播磨灘まで約72kmを南流する。流域は谷幅が狭く下流域を除くと平野がほとんど発達していない。

有年地区は千種川をはさんで東西にのびる谷であり、東から矢野川、西から長谷川が合流し、千種川と両支流沿いに谷平野が形成される。東西に開けた谷地形から、有年は中世以降の山陽道が通過し、現在の国道2号に継続される。近世には宿駅が営まれる。海岸部の市街地とは山塊によって隔絶され、峰道、千種川を介して結ばれている。相生駅を起点とする国鉄赤穂線が開通するまでは有年と市街地を赤穂鉄道が結んでいた。また千種川を介して内陸部や日本海側の因幡国との南北の交通も発達する。近代に入ると播磨国境の山岳越えの必要から山陽鉄道が有年を東西に通過することとなり、有年駅が開設される。その後山陽鉄道は国有化され山陽本線となる。また市域を山陽自動車道が通過し、市街地西側に赤穂インターチェンジが設置される。

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代

旧石器時代まで確実にさかのぼる遺跡は不明である。縄文時代に入ると千種川西岸に所在する遺跡で生活の痕跡が認められる。馬路池遺跡で縄文時代早期の石礫、ナイフ形石器が採集される。上音生遺跡では縄文後期の土器が出土し、東有年・沖田遺跡では縄文晚期の土坑を検出している。これら遺跡の付近に生活の跡があると推定される。その後弥生時代前期までは遺跡の空白期間となっている。

弥生時代

この時期の遺跡は有年付近に顕著である。有年原・田中遺跡は有年地区では最古の集落であり中期前葉以降の土器が出土する。東有年・沖田遺跡は市内最大の弥生集落であり中期中葉の円形周溝墓、後期の大型住居を検出する。両遺跡は千種川を挟んで位置し、拠点的な集落として後期まで存続する。

弥生時代中期後半になると遺跡増加し、上記遺跡のほかに有年牛込・山田、西有年・垣内田遺跡など有年地区各所で集落が形成される。これらの中には規模が縮小しつつも後期まで存続するものがある。東有年・沖田遺跡は住居数棟に1つ大型住居で構成される集落構成であり後期後半から古墳時代初頭にかけて讃岐、山陰、吉備地方の土器が出土している。

塚山古墳群付近では弥生時代中期の土器出土し、千種川西岸の野田遺跡でも中期後葉の遺物が散布す

る。付近では山裾などで中期の遺物が採集されており集落の存在が推定される。また野田遺跡の背後の尾根上の所在する精谷山遺跡からは土器棺と考えられる大型の壺が出土しており、山裾に展開する集落の墓域の可能性がある。若狭野地区的奥ノ山遺跡、野々宮山遺跡、下土井城山遺跡でも丘陵頂部や南斜面で弥生中期後半の土器を採集されている。調査例はないものの、遺跡の立地からいわゆる高地性集落が存在するかもしれない。

後期に入ると大型の墳丘墓がこの地域にみられる。有原・田中遺跡では2基の円形周溝墓を検出し、装飾器台などが出土する。このうち1号墳丘墓は突出部と陸橋部、貼石をもつ。有年牟礼・山田遺跡では弥生末～古墳初頭の方形周溝墓を検出している。周溝内から出土した土器は他地域からの搬入品。奥山遺跡では小形彷彿円行花文鏡が出土し、木虎谷古墳群の中に当該期とみられる箱式石棺がある。

古墳時代

初期の前方後円墳は正福寺北谷田古墳、中山13号墳がある。三角縁神獣鏡などの副葬品が出土した西野山3号墳は前方後方墳の可能性が指摘される。これらはいずれも上郡町高田地区に所在し、当時の政治的中心がこの地域であったと考えられる。矢野川流域では前方後円墳の大瀧山1号墳があるものの、有年地区では箱式石棺を埋葬施設とし、鉄鎌が出土した津村古墳が知られるのみで前期の前方後円墳は確認されていない。

中期古墳としては蟻無山古墳群があり3基の古墳で構成される。1号墳は丘陵頂部の自然地形を利用して築造された造出し付帆立貝形古墳で、全長52mの千種川流域最大の中期古墳である。初期須恵器や円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が採集される。この時期に入って有年地区に所在した氏族の台頭がうかがえる。奥山古墳群は中期古墳4基が山頂から斜面にかけて分布し、円筒埴輪のほか銅留短甲が出土している。上郡町高田地区では前期に引き続いて中期に入っても造墓活動が続く。この時期の古墳として円筒埴輪、楕形埴輪が採集された中山1号墳、円筒埴輪が採集された西野山7号墳がある。

有年地区北側の山裾には後期古墳が密集する。3支群51基で構成される塚山古墳群など100基以上の古墳が確認されている。その大半は横穴式石室であるが、石棚を有する木虎谷2号墳、玄室内に間仕切りをもつ塚山1～6号墳、奥門、玄門部をもつ野田2号墳など特異な形態をもつ横穴式石室があり、これらは県指定史跡となる。若狭野古墳は古墳時代末の方墳である。墳丘は3段築かれ、上・中段には外護列石が巡る。上郡町与井1号墳は大型の石室を埋葬施設とする。東有年・沖田遺跡では削平された円墳3基が集落に隣接して検出される。

揖保郡から赤穂郡にかけて古墳時代から平安時代の須恵器窯跡が200基程度分布し、相生窯址群を構成する。相生窯址群では5世紀末～6世紀初頭には東部の揖保郡を中心に須恵器生産が開始される。しかし実態不明ながら有年付近には、正福寺窯跡や奥山田窯跡があり、6世紀以降須恵器生産を行っている可能性がある。また有原・田中遺跡では旧河道内から韓式系土器や初期須恵器が出土しており、その中には焼けひずみのある須恵器があることから付近に未知の須恵器窯跡が所在している可能性が指摘されている。

集落遺跡としては、有年牟礼・山田遺跡では古墳時代の掘立柱建物、有年牟礼・井田遺跡で鍛冶工房跡が検出される。

古代

有年原・クルミ遺跡の所在する赤穂郡は播磨国に属するが『播磨国風土記』は赤穂郡の記載を欠き、郡内の状況は明らかにしえない。平城宮出土木簡にある「赤穂郡大原郷」は有年地区に比定する説が有力であり、この木簡に記された人名、有年牛札・山田遺跡出土の「秦」と刻書された須恵器片と関連づけて有年地域に渡来系氏族の存在を物語る。

古代山陽道は北側の上郡町域を通過し、山陽道に沿う上郡町高田地区には与位庵寺、赤穂郡衙推定地である与位遺跡があり、交通の要衝であるとともに赤穂郡の中心であった。与位庵寺は7世紀後葉創建で塔基壇が調査される。寺院に隣接して瓦を供給した与位瓦窯跡ある。古代山陽道沿いに所在する神明寺遺跡は高田駅家の有力な推定地であるが、塔心礎や礎石が検出されたことから寺院跡の可能性が高く、その東側の高田宿遺跡を高田駅家跡とする指摘もある。

相生窯址群は奈良時代までは生産の主体が東部にあるが、西部の西後明地区にも範囲が拡大する。平安時代に入ると生産は入野地区、さらに緑ヶ丘地区などの西部に移り最盛期をむかえる。奥山田窯跡でも奈良・平安時代まで須恵器生産を行なっている可能性がある。

中近世

律令体制の崩壊とともに山陽道は荒廃するが、中世以降も畿内と中国・九州を結ぶ主要街道として整備され、近世には有年地区を近世山陽道（西国街道）が通過し、有年に宿駅が設置される。

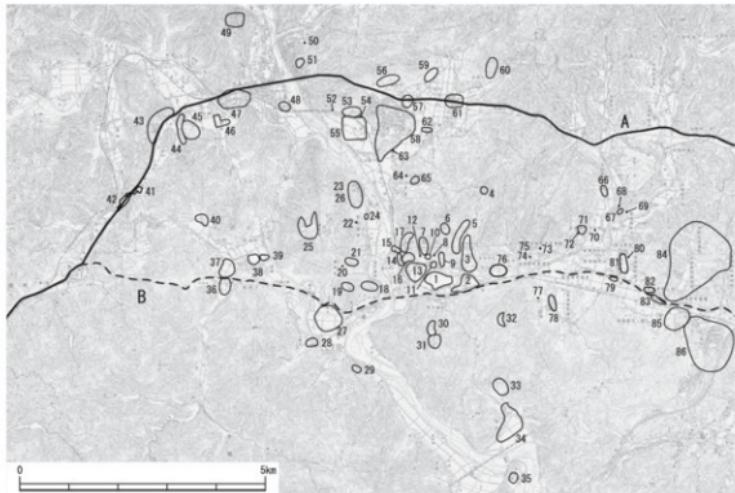
街道や千種川を見下ろす山頂に有年山城、鍋子城、鶴ヶ堂城、高野須城、後藤陣山城などの山城が築かれる。有年牛札・山田遺跡では発掘調査により中世城館が確認される。山岳寺院は黒沢山光明寺、医王山駿行寺などがある。黒沢山光明寺は調査で塔跡を検出している。

この時期の集落はいくつかの遺跡で検出されるが、特記すべきものとして、東有年・沖田遺跡では大型建物、西有年往来南遺跡では鍛冶遺構を検出している。

参考文献

赤穂市教育委員会『有年原・クルミ遺跡発掘調査報告書－有年土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1－』赤穂市文化財調査報告書69 2008年

赤穂市教育委員会『有年原・クルミ遺跡発掘調査報告書－有年土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3－』赤穂市文化財調査報告書76 2013年



1. 有年原・クルミ遺跡
2. 有年半礼・井田遺跡
3. 有年半礼・山田遺跡
4. 山田奥窓跡
5. 砧山古墳群
6. 奥山田古墳群
7. 懸針谷古墳群
8. 藤村古墳
9. ハトカ古墳群
10. 有年原・北山遺跡
11. 有年原・北岳遺跡
12. 木虎谷古墳群
13. 有年原・田中遺跡
14. 蟻ヶ山古墳群
15. 玉掘古墳群
16. 奥山古墳群
17. 北原古墳群
18. 放生山古墳群
19. 有年山城跡
20. 三軒家遺跡
21. 後藤陣山城跡
22. 稲谷山遺跡
23. 舞田古墳群
24. 上所山田遺跡
25. 黒沢山光明寺
26. 野田遺跡
27. 東有年・沖田遺跡
28. 上曾生遺跡
29. 鍋子城跡
30. 桶ヶ堂城跡
31. 医王山駿行寺跡
32. 高野須城跡
33. 周世宮裏山古墳群
34. 周世入相遺跡
35. 高雄・根木遺跡
36. 西有年・往来南遺跡
37. 西有年・長根遺跡
38. 西有年・垣内田遺跡
39. 西有年・畠田遺跡
40. 馬路池遺跡
41. 落地板坂遺跡
42. 落地八反坪遺跡
43. 飯坂古墳群
44. 井の端古墳群
45. 大酒古墳群
46. 山野里大塚遺跡
47. 山野里宿遺跡
48. 竹万宮ノ前遺跡
49. 跃山城跡
50. 丸尾古墳
51. 柏原城
52. 舞井ノ井塚
53. 舞井魔寺
54. 舞井瓦窑址
55. 舞井遺跡
56. 神明寺古墳群
57. 神明寺遺跡
58. 西野山・中山古墳群
59. 宇治山古墳群
60. 佐用谷古墳群
61. 高田宿遺跡
62. 梶ノ木遺跡
63. 中山真窓跡
64. 正福寺北谷田古墳
65. 正福寺窓跡
66. 下土井山崎山古墳群
67. 下土井坡
68. 下土井城山古墳・寺田城の下古墳
69. 下土井城山遺跡
70. 下土井遺跡
71. 大避山古墳群
72. 奥の山遺跡
73. 若狭野古墳
74. 若狭野陣屋
75. 若狭野廢寺遺跡
76. 荒神山古墳群
77. 松崎瓦窯址
78. 雨内古墳群
79. 宮ノ前遺跡
80. 野々宮山古墳群
81. 野々宮山古墳群
82. 上松古墳群
83. 西柄遺跡
84. 相生窓跡群 西後明地区
85. 相生窓跡群 入野地区
86. 相生窓跡群 緑ヶ丘地区
- A . 古代山陽道
B . 近世山陽道

第3章 調査の結果

第1節 A 1 地区の調査

1. 概要

A 1 地区は調査区の西半部にあたり、東側に A 2 地区が所在する。A 2 地区とは里道によって隔てられる。調査区は長さ約70m、幅約40m、面積約2,400m²を測り、A 2 地区に次ぐ面積である。

本調査区の基本層序は、現耕土以下旧耕土層と鉄分が沈着した旧底土層が互層となり、複数面の水田面が確認できる。基盤層は東端付近で検出したのみであり、それ以西では全く確認していない。したがって基盤層は本調査区東端付近から西、あるいは北西方向に急激に落ち込んでいることが考えられ、水田化される以前は、ほぼ調査区全域が隣接地や A 2 地区で検出された旧河道にあたっていたものと考えられる。

検出した遺構は、畦畔、耕作痕など水田に伴うもののみであり、豊穴住居跡や掘立柱建物跡などの生活の痕跡は全く認められなかった。したがって本調査区は隣接する集落の生産域として利用されていたものと考えている。

2. 遺構

土坑（図版5 写真図版2・3）

S K01

平面形は東西方向に主軸をもつ長楕円形。長さ2.5m、幅70cm、検出面からの深さ10cmである。断面形は皿状を呈する。

S K02

平面形は東西方向に主軸をもつ長楕円形。長さ2.5m、幅90cm、検出面からの深さ10cmである。断面形は皿状を呈する。

S K03

平面形は南北方向に主軸をもつ長楕円形。長さ80cm、幅40cm、検出面からの深さは30cmである。断面形はU字状を呈する。

S K04

平面形は南北方向に主軸をもつ不整な楕円形を呈する。長さ2.6m、幅1.4m、検出面からの深さ15cmである。断面形は皿状を呈する。

S K05

平面形は南北方向に主軸をもつ長楕円形。長さ2.6m、幅1.1m、検出面からの深さ10cmである。断面形は皿状を呈する。

S K06

調査区東端で検出した。大畦畔と重複し、本遺構が後出す。平面形は南北方向に主軸をもつ長楕円形を呈する。長さ3.0m、幅65cm、検出面からの深さ15cmである。断面形は逆台形を呈する。

大畦畔（写真図版4）

調査区東端で検出した。南北方向にのびる。現大畦畔と平行する。その方向はN15°W前後を示す。

溝（図版6・7 写真図版5・6）

南東半部を除く調査区のはば全域で検出した。形状などから耕作痕と考える。直線的に南北方向にのび、N17°Wの偏りを示す。これは大畦畔や現水田に伴う暗渠の方向に近似している。なおこの溝に対応する水田畦畔は検出していない。

3. 出土遺物（図版21 写真図版30・31）

大畦畔出土遺物

1は土師器小皿である。2、3は瓦器碗である。2は口縁部のみ残存し横方向の暗文がみられる。3は底部のみ残存する。低い断面三角形の高台がつく。

包含層出土遺物

4は土師質の有孔土錐である。5は青磁碗底部である。6は白磁碗底部で底部を輪状に釉ハギする。M8は施釉陶器皿である。内面に施釉し、底部を輪状に釉ハギする。

M1～3は鉄釘で断面は4～6mmの方形を呈する。M4は鉄砲玉で径約1.1cm、重さ8.1g。M5は煙管吸口である。M6・7は銅錢で「寛永通寶」である。M6は完存するが、M7は左部を欠く。

第2節 A2地区の調査

1. 概要

調査面積は幅約35m、長さ120mの4,100m²と広い調査区である。他地区同様に調査前の地目は水田で矢野川の氾濫原・低地である。農作業に必要な里道があることから、A1地区・B地区と分かれている。

基本層序は、A1地区と同様に現耕土以下旧耕土層と鉄分が沈着した旧床土層が互層となり、ほぼ全面にわたり複数面の水田面であったことが確認できる。A1地区東端で確認できた黄褐色を呈する基盤層はほぼ全域で確認できた。基盤層は南東側に高まり、南東隅付近ではほぼ現耕土直下で基盤層を検出している。

調査区西半の遺構はA1地区と同じ水田に限られている。東半では堅穴住居跡・旧河道・溝・祭祀遺構が水田とともに検出されている。

検出した遺構は堅穴住居跡1棟、堅穴住居跡の可能性のある焼土面1基、井戸1基、祭祀遺構と溝・土坑・畦畔・ピットを検出した。水田面も洪水に遭っており、複数時期あることは確実である。同一面で調査したが、堅穴住居跡が水田面の下で確認していることから明らかかなように、遺構の時期差は当然ある。

2. 遺構

堅穴住居跡（図版10 写真図版11）

S H01

調査区東側の旧河道に近い部分で検出した。焼土が認められたことから精査したところ、南北4.1m、東西2.6mの長方形プランを検出した。中央部分に円形ピットとU字形の焼土塊があり、炉跡と思われる。主軸はほぼ南北に長軸を有している。全体に焼土・炭が広がっており、焼失住居である。肩部分にも広がりが僅かに認められたので高床部を持って西側に広がる可能性が残されている。床面までの深さは5cm前後で焼土面によった検出可能となった遺構である。その下の層は変色を蒙ったもので床面では

ない。時期は古墳時代初頭（庄内新段階期）と思われる。

S H02

S H01同様な焼土面を S H02として南壁沿いで調査したが、明瞭なプランを検出することが出来なかった。焼土・炭の状況から堅穴住居跡の可能性が残されるが、明確ではない。

なお、床面で採取した炭化物を株式会社加速器分析研究所にて放射性炭素年代（AMS測定）を依頼した。その結果、 $2,860 \pm 30$ yrBPの数値を得たことを記しておく。

井戸・祭祀遺構（図版11～13 写真図版13～16）

S E01

旧河道と溝が合流する内側で検出している。最大径150cm、最小径120cm、深さ55cmの素掘りの井戸である。西側に寄って2段掘りされており、東西90cm、南北60cmの不定方形が深掘部分で底はまた円形になる。深くはないが、現在でも湧水している。上径より中央部分が広く、断面形状は僅かに袋状になっている。

祭祀遺構

井戸周辺の溝・土坑などを祭祀遺構と呼称する。井戸を中心とした遺構群で、井戸に向かう道（通路）と考えられる。小土坑群（小溝含む）はいわゆる波板状遺構などと呼ばれる水田遺構に伴って検出例が多い遺構である。これが2基南北に並んでいる。井戸の南西部に1.8×1.6mの楕円形の高まりがあり、そこから南東に4段のステップがある。細長い溝状の土坑で、その両側に杭列（各7基）が設けられている。径40～60cmと大形のもので、柱痕跡を確認出来なかつたので杭列としている。両側に太い杭列を打設したと考えており、目隠しを目的にしたと想定している。この遺構の平面形は台形になり南東部が広がっている。下のステップで長さ2.4mを測り、その杭列端部（南東部）の距離は心々間で3mを測る。高まりから北側は浅い溝状になり、その中に7基の細長い土坑（溝状）が築かれており、溝状の北側にもう1基合わせて8基の土坑が存在する。井戸北側にはオーバーフローした水を流すSD11が掘られ、旧河道へ達している。これら遺構が一体のものと考え、祭祀遺構とする。当然水に対する祭祀で古墳時代後期の所産である。

土坑（図版14 写真図版17）

8基検出しているが、性格のわかる土坑はない。楕円形・不定形のものが大半である。祭祀遺構南側に浅い溜まりがあった。SX01としたが、祭祀遺構の一部かもしれない。

S K02

調査区北東部で検出した。北西～南東方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長さ80cm、幅35cm、検出面からの深さ9cmを測る。断面形はU字状を呈する。

S K03

調査区南東部で検出した。不整形の土坑である。長さ、幅とも1.65m、検出面からの深さ10cmを測り、底部は凹凸がある。埋土には基盤層土とともに炭・焼土が少量混じる。

S K04

調査区中央付近で検出した。北東～南西方向に主軸をもつ長楕円形を呈する。長さ2.8m、幅75cm、検出面からの深さ4cmを測る。断面形は皿状を呈する。

S K07

調査区北西部で検出した。ほぼ東西方向に主軸をもつ隅丸長方形を呈する。長さ1.8m、幅65cm、検出面からの深さ14cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

S K08

調査区南西部で検出した。平面形は円形を呈する。径60cm、検出面からの深さ5cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土に炭粒が少量混じる。

S K09

調査区南西隅のS D22南側で検出した。東西方向に主軸をもつ隅丸長方形を呈する。長さ2.05m、幅1.05m、検出面からの深さ5cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土には基盤層土が多く混じる。

溝（図版16・18 写真図版18~21）

22条検出しているが、祭祀遺構に伴うものが含まれ、逆にスキ溝は番号を与えていない。旧河道から分流するための溝群と水田内で検出した小溝がある。分流する水路機能を有する溝調査区東側と南西部で検出されている。調査区東側で検出されている一群はB地区方向から延びてくる溝である。S D02・03・05と井戸から溢れた水を流すS D11である。S D11は祭祀遺構の一部と考えられる。S D02は東壁から12mまで残存している幅0.3mを測る直線の溝である。切り合い関係から最も新しい溝で古代であろう。S D03は蛇行しており、東壁から32mのところで消失している。水田の南東コーナーであることから、この部分が水田の水口であろうと思われる。幅1.2~2.1mを測り最大深度は0.65mである。S D05は幅1.8~2.9mの、一部屈曲するが概ね直線となる溝で旧河道の可能性が高く、S D06に繋がる溝（河道）であろう。底には板材などの木製品があり、須恵器杯などが出土している。最大深度は0.85mで断面形状は不定の逆台形である。S D11はS E01からS D06までの5.5mの間で幅1.2m、深さ0.4mで西側を内側に弧を描く。断面形はU字形である。出土遺物は土師器小片だけであるが、時期は井戸などと同じ古墳時代後期と思われる。調査区南西で検出された溝はS D22である。幅2.5~3.2mで直線的に延びる。古墳時代初頭の絵画土器を出土している。溝そのものの埋没時期は古墳時代後期である。調査区内20mを調査しており、深さは1.2mである。

それ以外の溝は水田耕作に伴うスキ溝である。A1地区同様に南北方向のスキ溝を検出している。下層の不定形小区画水田以降のスキ溝である。

水田跡（図版15・17・18 写真図版22~24）

東側を除いてほぼ全面で検出している。畦畔を確認したもので、最も狭い一筆は 2×3 mの6mである。1辺4~5mのものが多いようであるが、洪水堆積が多数あり切り合いもある。検出した水田すべて同時期ではないと思われる。現況では 10×5 mの50mが最大である。地形は東から西に向かって低くなるが、必ずしも水口が東側に設けられているわけではない。

3. 出土遺物（第4図・図版22・23 写真図版32~37）

竪穴住居跡出土遺物

8はS H01出土の土師器壺底部である。焼失住居であることから土器も強く被熱し赤変している。尖り底から外傾する体部になる。明褐色砂粒多く含む。内面ケズリで庄内並行期と思われる。

9はS H02出土須恵器瓦泉口縁部である。端部を欠くが長い外反する頭部に沈線2条とカキメが施される。口縁部は屈曲して外傾しロクロナデである。内外とも灰である。TK-10前後であろうか。

祭祀遺構出土遺物

10は須恵器椀で端部の丸い内傾する口縁部で平底はロクロケズリを施す。変化点に沈線があり、灰～灰白で長石を含む。祭祀遺構のピット・土坑から分かれて出土している。大きく歪んでいる。

溝出土遺物

11・12はS D05出土の土師器である。11は甕で内湾する体部から外反する口縁部になり端部丸く納める。内面ヘラケズリ、外面ハケ整形で、内外ともにぶい黄橙を呈する。長石・石英などの砂粒含み磨滅顕著である。12は高杯筒部で外傾し掘も食線的に開く。中実で外面ハケ整形からミガキを施し、内面ナデ調整ある。内外ともにぶい黄橙を呈する。

S D06からは多くの土器が出土している。13～23は上層の土器である。13～19は土師器で13～17は甕である。13は球形の体部から外傾する口縁部で端部丸い。口縁部はユビ成形によって作り出し、指圧痕が残りその後口縁部全体を強いヨコナデで仕上げる。内面にはぶい黄橙～灰白・橙でヘラケズリからナデ仕上げ。外面は褐灰～灰でハケ整形を行い黒斑が認められる。14はやや長めの球形体部から外反する口縁部で端部丸い。口縁部と外面はハケ整形で、内面は板ナデである。粘土紐残り、煤付着している。灰白～黒で砂粒含み、口縁部歪んでいる。15は大形壺か二重口縁壺である。残存部が擬口縁部から外れた状態に見えるので、壺の可能性が高い。浅黄～ぶい黄橙で外面はタタキ成形である。17は小さな平底から外傾する体部に続く。内面は浅黄、外面は黄灰でユビ成形からナデ仕上げ。上層の土師器のなかでは古相を示している。18・19は高杯部である。18はナデ整形からヨコナデを行う。外傾し端部丸く中実の筒部となる。19は平坦な底から甘い接線を持って外傾する杯部で端部は尖りぎみ。筒部をソケット状に接合しており、接合面で割れている。内外面ともにハケ整形からヘラミガキで仕上げている。20～23は須恵器杯である。20だけ杯蓋で内湾する天井部から体部で端部は尖りぎみに薄く仕上げる。内面には同心円文の痕跡があり、外面にはヘラ記号が認められる。21は平底気味から扁平な内湾する体部になり、立ち上がりは内傾し端部尖る。受部は短く端部丸い。灰～灰白出長石含む。22は平底で体部直線的に開き、受部まで延びる。立ち上がりは外反し端部尖る。23は丸底から内傾する立ち上がりになる。受部は短く上方に延び丸く納める。ヘラ切りののちナデ仕上げ。

24～40はS D06下層の遺物である。24～31は土師器、32～40は須恵器である。24は外反する甕口縁部で、口径31cmと大形である。ハケ整形のうち内面はヘラミガキ、端部周辺はヨコナデ。にぶい黄橙～灰黄褐である。25は小形壺口縁部で外傾し端部尖る。にぶい黄橙でヨコナデ仕上げ。26は外傾する甕で端部角張る。ハケ整形からヨコナデで金雲母などの砂粒含む。27も甕で外反ぎみで端部丸い。内面灰黄褐、外面にぶい橙で、ハケ整形からヨコナデである。28は上げ底の甕底部で外反ぎみの体部で褐灰をしている。内面はくもの果状ハケである。29は内湾する口縁部で端部丸い皿で、ヨコナデ仕上げ。30は高杯部下半で、色調はにぶい橙～灰白で砂粒含む。内面はナデ調整を加える。31は掘が広がる高杯脚部で、灰黄褐～にぶい黄橙を示す。内面には絞り目が残り、外面はハケ整形からナデ仕上げで、中実である。32・33は杯蓋である。32は天井部丸く内湾して直立する口縁部になる。端部は外側に薄く尖らせている。天井部はロクロケズリから仕上げナデで口縁部はロクロナデである。灰～灰白でロクロ方向は逆時計回り。33は天井部緩やかに内湾しロクロケズリ、扁平で口径大きい。口縁部内湾し端部丸い。灰で内面は

一方向の仕上げナデ。34~40は杯身である。34は口径の割に扁平である。上げ底ぎみの平底から外反する体部が受部に延び、端部は丸い。立ち上がりは外反し器壁薄く仕上げる。灰~灰白で内面不定方向のナデ仕上げ。35は底部を欠く。内湾する体部から外反する立ち上がりになり端部尖る。受部はやや上がり端部丸く短い。底部はロクロケズリで他はロクロナデ。36も底部残存しておらず、体部内湾ぎみで立ち上がり低く外反する。受部は水平に短く端部丸い。ロクロナデで灰~灰白である。37は不安定な平底から屈曲しつつ外傾し水平に開く受部になる。端部は丸く短い。立ち上がりは外反し端部丸く、器壁薄い。底面はヘラ状工具痕が見られ未調整である。内面は一方向の仕上げナデ。色調は、内面は灰~暗灰だが、外面特に口縁部側は酸化状態で赤灰を呈している。38は丸底から内湾する体部になり、立ち上がりは内傾し端部尖る。受部は短く水平になり端部丸い。受部周辺には自然釉がかかっている。灰~暗灰を示し、内面は一方向の仕上げナデでロクロ回転方向は逆時計回りである。39は不安定な平底から体部内湾し、立ち上がりも内湾する。受部短く端部丸い。内面は不定方向の仕上げナデが見られる。ロクロケズリで一部未調整となる。40は上げ底となっているが底面は欠く。体部外傾し水平に短く開き端部丸い受部となる。立ち上がりは短く外反し端部丸い。灰白を呈し、自然釉付着している。須恵器はTK10型式を主とするが時期幅が認められる。

41はSD08出土の須恵器杯身である。底面未調整と思われ上げ底ぎみに延びるが残存していない。体部は内湾し立ち上がりは僅かに外反し端部尖る。受部は短く水平で端部丸い。灰白を呈し砂粒含む。

42・43はSD11出土である。42は土師器高杯部である。外傾する杯部下半から外傾し端部尖る。ナデ仕上げ・ヨコナデ調整で2次焼成を受けている。内面灰黄褐~黒褐、外面赤である。43は丸底から内湾する球形の体部を有する須恵器壺である。内面は灰白~灰で同心円タタキが認められ、外面は灰黄褐~にぶい黄褐で格子状のタタキが施される。2次焼成を受けており砂粒含む。

44~47はSD22出土すべて土師器である。44は壺で底部を欠くが丸底と思われる。球形の体部内面はヘラケズリで有機質(コゲ)が底に付着している。外面はユビ成形からハケ整形しナデ仕上げを行う。現況で確認出来ないが、頭部にタタキが残ることからタタキ成形を行ったと思われる。色調は灰白~にぶい黄橙~橙で砂粒含む。口縁部は外傾し端部丸い。口縁中央部が厚くなっている。45は壺口縁部で外傾し端部丸い。ハケ整形からヨコナデを行う。にぶい黄橙~黒褐をする。46は底部を欠くやや扁平な球形の壺である。丸底と思われ、口縁部は外反する。ハケ整形から板ナデ・ナデ整形を施す。器壁は厚めで褐灰~にぶい黄橙をしている。47は壺体部破片と思われる。内湾しており、灰白~にぶい黄橙を呈する。ハケ整形が施され、その後ヘラによる絵画が描かれている。鳥の頭部かと思われるが断定出来ず、スッポンなどの頭部かもしれない。

包含層出土遺物

48・49は土師器で、それ以外は須恵器である。49~53は古墳時代、それ以外は奈良~平安時代の遺物である。固化していないが、75・76は中世後半、77~79は近世の遺物である。

2点の石器が包含層から出土している。S1はサスカイト製の石匙である。両面から刃部を作り出している。長さ4.05cmで40.8gである。S2は先端を欠く石鏃である。僅かに凹基となるものでサスカイト製である。0.4gと軽量である。

第3節 B地区の調査

1. 概要

幅30mで長さ10m余りの280mと小面積の調査区である。有年原クルミ遺跡では東端に位置している。里道が調査出来ないことから、調査区を別にした。地形的には僅かながらA2地区より高くなっている。東でも南東方向に向かってやや高くなってしまい、その方向に微高地があり、集落があるのではと推測される。検出した溝などは繋がっており、当然A2地区へ同じ遺構が延びている。

基本層序は、現水田面直下に黄褐色シルト質極細砂層が堆積し、その直下が基盤層となる。基盤層上面が遺構面となるが調査区北東隅は遺構面が北東側に落ち込みをみせる。A2地区SD06あるいはB地区の東側に畦畔に痕跡を残す旧河道を続くものであろう。

検出した遺構は、掘立柱建物1棟、旧河道1条、溝4条とスキ溝・ピットである。

2. 遺構

掘立柱建物跡（図版 写真図版）

S B01

調査区北側で確認しており、1×2間の規模な建物である。東西1間で3.0mを測る。南北は1間1.6mの3.2mを測る。柱痕跡は20cm前後で、柱穴の最大深度は44cmである。調査区北側に延びている可能性もあるが、調査区北東隅に旧河道肩部があることから、延びないように思われる。主軸方向はN20°Wで僅かに西側に振っている。柱穴出土遺物から時期は古墳時代初頭と思われる。

旧河道

S R01

肩部を調査区コーナーで検出している。調査したのは肩部付近だけで、北東に向かって落ち込みかかった状況である。河道本体は調査区北側に存在する。A2地区北東隅部の河道が続いているものと思われる。

溝（図版20 写真図版28・29）

4条調査している。南からSD01・02・03・04と付けている。SD01は東壁から調査区南辺の中央に延びる溝である。SD01は幅1.4~1.8mで最大の深さ0.4mを測る。検出した部分では東西に直線的に延びている。水平堆積を示しており、埋没時期は他の溝より早かったと思われる。SD02は調査区を東西に貫いており、A2地区SD03に続いている。調査区内での切り合いはないが、SD01を調査区東側で切っているものと思われる。溝は直線ではなく南側を内側とする緩やかな弧を描いている。幅0.4~0.55mで深さ0.3mを測る。断面U字形で人為的な溝である。SD03は調査区を東西に貫いており、幅2.3~2.6m、最大の深さ0.6mを測る。堆積はレンズ状を示し、一気に埋没したのではなく徐々に埋まつたと思われる。SD04は調査区中央をやはり東西に貫流している。南側にSD03が約2m離れて存在しており平行している。A1地区では検出されておらず、里道部分で合流するか切られているかと思われる。幅0.4~0.5mで深さは0.2m前後である。断面は逆三角形に近い形状である。

溝はそれ以外にも複数ある。東西方向と南北方向があるが、いずれもSD01~04埋没後に設けられた溝でスキ溝と考えている。

ピット

S B01以外に11基確認している。柱痕跡を確認したものも1基あり、他にも掘立柱建物・柵などの可能性が残されている。

3. 出土遺物（図版24 写真図版38）

出土遺物量は面積的にはB地区はやや多い。

掘立柱建物跡出土遺物

63~66はS B01出土遺物で、すべて土師器である。63は壺で内傾する肩部から僅かに外反する口縁部で端部角張る。ヨコナデで仕上げている。端部に刻み目があった可能性が残る。64・65は据広がりとなる高杯脚部である。64は内湾し端部尖りぎみである。暗灰~黒を呈し、内面はハケ整形からナデ、外面はヘラミガキが施され、端部周辺はヨコナデである。透孔が1ヶ所残っており、4方透孔かと思われる。黒斑が認められる。65は外面ハケ整形、内面ナデ、端部ヨコナデである。にぶい黄橙~橙で1ヶ所透孔が残存している。66は壺底部で不安定な平底である。外面はタタキ成形からナデ、全体に板ナデで調整している。にぶい掲~黒掲で砂粒含む。

溝出土遺物

67は土師器壺でS D01出土である。内湾する体部から外反する口縁部になり端部丸い。口縁部中央の器壁が厚くなっている。にぶい黄橙で粗いハケ原体による整形から板ナデを行う。

68~71はS D03出土で須恵器杯である。68は蓋で丸みを持つ天井部でロクロケズリだが一部未調整である。稜線を持ってから口縁部に向けて外傾し端部外側につまみ出し尖る。灰~灰白で内面に有機質付着している。69も蓋で天井部丸く体部外傾し口縁端部は外側に尖らす。内面には同心円文が残り、成形時の当て具痕であろう。天井部には2本のヘラ記号が記されている。灰~灰白を示す。70は身で器壁が厚く丸底から内湾し受部上方に丸く納める。立ち上がりは外反し端部丸い。灰白~暗オリーブ灰を呈し、内面は1方向の仕上げナデが施される。受部には別個体の破片（蓋片）と自然釉が付着している。71も身、丸底で器壁は厚めである。体部は内湾し受部短く端部丸い。立ち上がりは内傾し端部尖る。内面に同心円文が認められる。2点ずつの蓋身であるがセット関係はない。

旧河道出土遺物

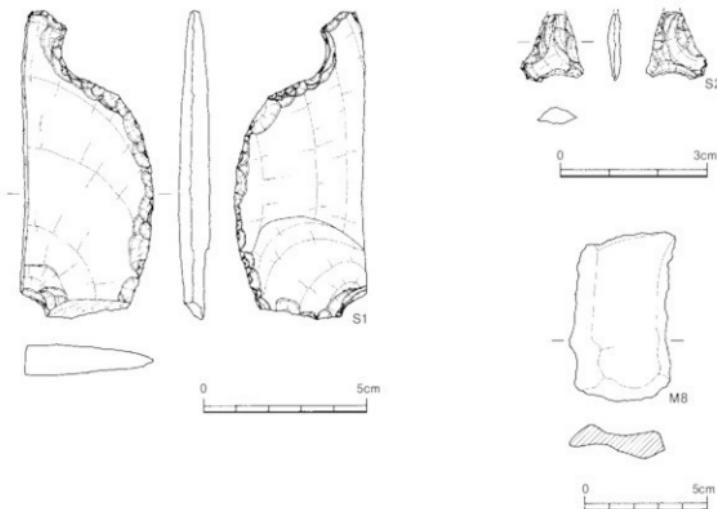
72は調査区北落ち込みから出土している。S R01肩部と考えられる遺構である。須恵器杯身で、平底から内湾する体部になり端部丸い。灰~灰白を示す。

包含層出土遺物

73は土師器高杯筒部で包含層出土である。中実で杯部・裾部とともに内湾する。にぶい橙~橙で外面はハケ整形である。内面はナデ整形である。74は土師質土錘で包含層出土で中央が膨らんでいる。1方から穿孔しており、灰白~暗灰黄で20.4gを測る。

第1表 出土土器法量表

報告番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量(cm)				残存	備考
						口縁	器高	底径	重量		
1	土師器	瓶	A1 東端	大昭明		(7.1)	1.35	(5.4)		1/6	
2	瓦質土器	瓶	A1 東端	大昭明		—	(3.1)	—		若干	
3	瓦質土器	瓶	A1 東端	大昭明		—	(1.0)	(5.0)		1/6	
4	土師質	土鍋	A1		P01.1	401.6	991.6		15.8g	はぼ定形	
5	青磁	碗	A1		—	(2.0)	(6.4)			1/4	
6	白磁	碗	A1		—	(2.9)	(4.4)			1/4	
7	施釉陶器	瓶	A1		(11.6)	3.7	(4.4)			1/5	
8	土師器	壺(底部)	A2	S1H8	—	(3.2)	1.05			1/1	
9	須志器	瓶	A2	S1H2	床面	—	(7.9)	—		断1/3	
10	須志器	碗	A2	S1X01		9.6	6.9	5.7	11.85	3/4 5/6 体4.4	
11	土師器	壺	A2	S1D05		(12.8)	—	(6.2)	(11.8)	1/12 断1/8 体1.6	
12	土師器	高杯	A2	S1D05		—	(7.8)	—		断3/4	
13	土師器	壺	A2	S1D06	砂利上	38.0	(23.5)	—	(25.4)	2/3	
14	土師器	壺	A2	S1D06	上層	(14.4)	(17.3)	—	(17.0)		
15	土師器	壺	A2	S1D06		(26.2)	(5.5)	—		1/10	
16	土師器	壺	A2	S1D06		(13.4)	(4.2)	—		1/5 断1.5	
17	土師器	壺(底部)	A2	S1D06	上層	—	(2.0)	3.25		のみ	
18	土師器	高杯	A2	S1D06	底、灰シルト	14.4	(5.4)	—		2/3 断部1/1	
19	土師器	高杯	A2	S1D06		37.1	(5.3)	—		2/3 体2.3	
20	須志器	杯垂	A2	S1D06		15.3	4.65	—		2/3 断2.3	
21	須志器	杯身	A2	S1D06	上層	(12.0)	—			1/5 体4.3	
22	須志器	杯身	A2	S1D06	上層	(12.2)	(4.05)	—		1/4	
23	須志器	杯身	A2	S1D06		11.4	5.1	9.0	14.1		近形
24	土師器	壺	A2	S1D06	下層	(30.0)	(4.5)	—		1/3	
25	土師器	小型壺	A2	S1D06W手	下層か?	(58.4)	(2.8)	—		若干	
26	土師器	壺	A2	S1D06W手	下層か?	(36.6)	(4.7)	—		1/14	
27	土師器	壺	A2	S1D06W手	下層か?	(15.0)	(5.5)	—		1/12	
28	土師器	壺(底部)	A2	S1D06	下層	—	(2.5)	3.65		1/1	
29	土師器	瓶	A2	S1D06W手	下層か?	(9.0)	1.8	—		若干	
30	土師器	高杯	A2	S1D06W手	下層か?	—	(1.5)	—		1/3	
31	土師器	高杯	A2	S1D06W手	下層か?	—	(7.1)	(10.0)		1/4 体2.3	
32	須志器	杯垂	A2	S1D06	下層	12.3	4.8	—		4/5 体1.3	
33	須志器	杯垂	A2	S1D06W手	下層か?	(15.6)	4.05	—		2/5 体2.5	
34	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(14.3)	3.55	—		1/6	
35	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(13.1)	(3.2)	—		若干	
36	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(14.0)	(2.2)	—		若干	
37	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(13.6)	4.9	—		1/3 体1.3	
38	須志器	杯身	A2	S1D06		33.0	4.35	—		1/4 体3.5	
39	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(13.5)	4.4	—		1/4 体1.4	
40	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(14.7)	3.8	—		1/4	
41	須志器	杯身	A2	S1D08		(13.9)	3.8	—		1/12	
42	土師器	高杯	A2	S1D11		(18.0)	(5.7)	—		1/14	
43	須志器	壺	A2	S1D11		—	(21.8)	—	(30.3)	1/1 体約3.5	
44	土師器	壺	A2	S1D22		(14.8)	(18.5)	—	19.1	若干	体9.10
45	土師器	壺	A2	S1D22		(17.8)	5.7	—		1/3	
46	土師器	壺	A2	S1D22		(18.0)	(21.5)	—		1/7	
47	土師器	壺	A2	S1D22		長(4.8)	80(7.5)	厚1.1		体のみ若干	繪画土器
48	土師器	瓶	A2 南東部			(1.3)	(5.0)	—		1/4	
49	土師器	高杯	A2 南東部			(3.2)	(12.0)	—		1/18	
50	須志器	瓶?	A2 中央			(6.2)	(4.1)	—		1/6	
51	須志器	杯垂	A2 西半			(13.8)	(2.9)	—		1/6	
52	須志器	杯身	A2 中央			(12.6)	(1.95)	—		若干	
53	須志器	杯身	A2 東半			(15.0)	(2.5)	—		若干	
54	須志器	杯垂	A2 中央			(15.3)	(1.3)	—		1/24	
55	須志器	蓋	A2 西半			(15.0)	(1.2)	—		1/10	
56	須志器	瓶	A2 東半			(14.0)	2.7	(10.6)		1/6 1/3	
57	須志器	瓶	A2 中央			(15.1)	(3.5)	(11.6)		1/10	
58	須志器	瓶	A2 中央			(15.0)	(3.6)	—		1/7	
59	須志器	瓶	A2 中央			—	(2.1)	6.25		1/1	
60	須志器	瓶	A2 東半			—	(1.9)	(5.4)			
61	須志器	瓶	A2 東半			—	(2.0)	(4.0)		1/4	
62	須志器	瓶	A2 南東部			—	(1.0)	5.5		8/9	
63	土師器	壺	B	S1B01-P1		(14.0)	(4.8)	—		1/6	
64	土師器	高杯	B	S1B01-P4		(13.6)	(2.5)	—		1/5	
65	土師器	高杯	B	S1B01-P1		(13.4)	(1.95)	—		1/6	
66	土師器	壺(底部)	B	P01		—	(2.9)	(7.0)		1/3	
67	土師器	壺	B	S1D01		(33.8)	(6.8)	—		若干	
68	須志器	杯垂	B	S1D03東半		35.2	4.3	—		3/4 体1.3	
69	須志器	杯垂	B	S1D03東半		(15.0)	4.55	—		1/4	
70	須志器	杯身	B	S1D03W手		11.0	4.1	—		はぼ定形	
71	須志器	杯身	B	S1D03		(12.2)	5.3	—		1/3	
72	須志器	杯身	B	S1R01	1.層	(10.0)	3.7	(5.3)		1/7 1/6	
73	土師器	高杯	B	—		(5.1)	—			脚・体のみ	
74	土師質	土鍋	B	P05.5	壺1.95	厚1.7			(20.4)g	14/15	
75	白磁	碗	A2							写真のみ	
76	無釉陶器	縹緲	A2							写真のみ	
77	施釉陶器	縹緲	A2							写真のみ	
78	施釉陶器	碗	A2							写真のみ	
79	施釉陶器	瓶	A2							写真のみ	



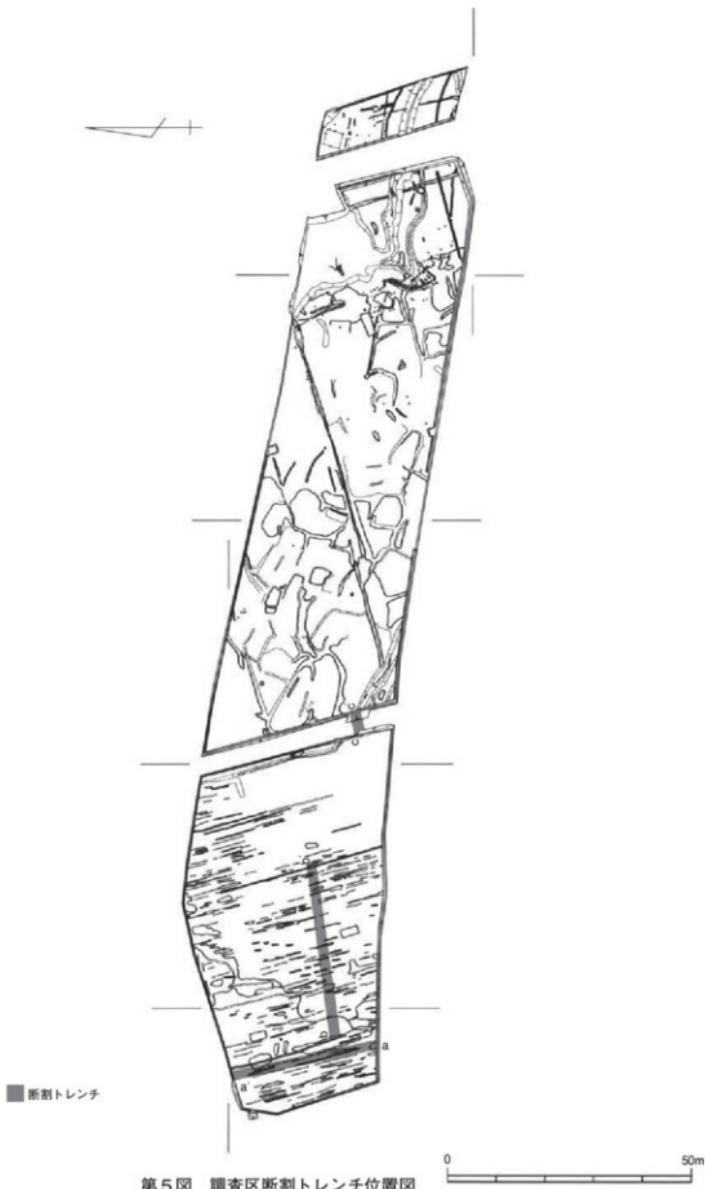
第4図 出土石器・金属器

第2表 出土石器法量表

報告番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量(cm)				残存	備考
						長さ	幅	厚さ	重量		
S 1	石器?	サヌカイト	A 2			(4.05)	(9.4)	0.9	(40.8) g		
S 2	石器	サヌカイト	A 2			(1.35)	(1.25)	0.3	0.4 g		

第3表 出土金属器法量表

報告番号	器種	地区	遺構	層位	法量(cm)				残存	備考
					長さ	幅	厚さ	重量		
M 1	鉄釘	A 1 北半			長6.0	幅0.5	厚0.65			
M 2	鉄釘	A 1			長(4.1)	幅0.4	厚0.4		上端部欠損	
M 3	鉄釘	A 1 北半			長(3.4)	幅0.35	厚0.4		下端部欠損	
M 4	鉛玉(鉛碇玉)	A 1			長1.15	幅1.2	厚1.05	8.1 g		
M 5	錐管				長(5.6)	幅1.05	厚0.05		端部一部欠損	
M 6	銅錢	A 1 南半							完存	寛永通宝
M 7	銅錢	A 1 南半							約1/2	寛永通宝
M 8	不明	A 2 中央			長6.95	幅3.95	厚1.05			



第4章 有年原・クルミ遺跡の地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や數千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査地区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査地区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通して明確にすることが可能となる。同時に調査地区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも考察できるのである。

本稿では、有年原・クルミ遺跡における地形環境を明らかにし、それと人間活動との関係について考察したい。調査では、本遺跡の調査地区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、5,000分の1空中写真の判読と現地踏査によって調査地区周辺の地形面を区分するとともに、調査地区付近における微地形の分類を行った。堆積物に関しては、主に調査地区での地質断面を詳細に観察した。これは、遺構検出面より上位だけでなく、その面から掘削したトレーナー断面で遺構検出面以深についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査地区付近における地形環境およびそれと人間活動との係わりを考察した。

2. 調査地区付近の地形分布

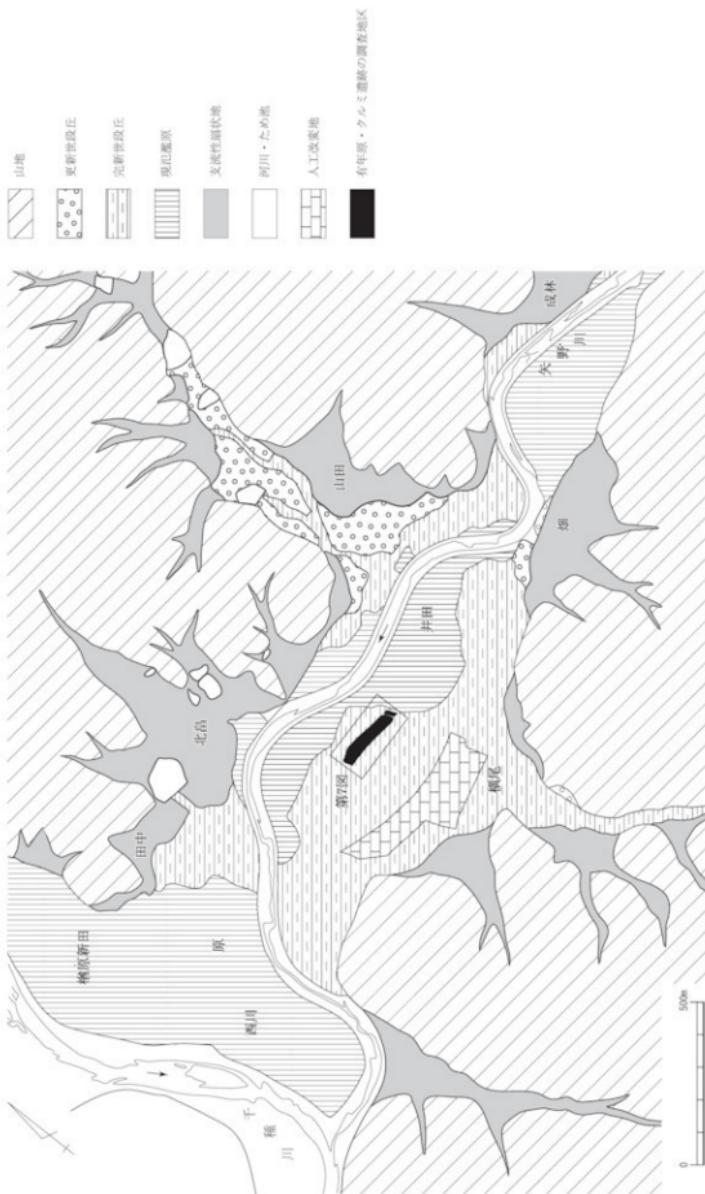
(1) 調査地区周辺の地形面について

本遺跡の調査地区は千種川の支流である矢野川の沖積低地に位置する。矢野川は、山地に刻まれた幅600~700mの谷中を西へ流れ、千種川の中流部でそれに流れ込む。合流点に近い矢野川下流部の調査地区周辺には、標高150~300mの山地がみられ、それらは主に花崗岩や流紋岩からなる。矢野川が流下する谷中には、狭長な平野がほぼ東西に延びる。矢野川下流部の平野には、更新世段丘、沖積低地、及び支流水扇状地が認められ（第6図）、沖積低地はさらに完新世段丘と現氾濫原に細分される。こうした地形のうち、調査地区は完新世段丘に位置する。調査地区周辺に分布する各地形の特色は次のとおりである。

〔更新世段丘〕 調査地区周辺の平野では、更新世段丘が1面しか認められず、それは比高1~2mの段丘崖をもつ。この段丘は、山田の集落が位置する矢野川支流の谷中によく発達し、他では畑の集落付近や横尾の南にみられる小谷の中に断続的に分布するだけである。有年半礼・山田遺跡は山田の集落付近にみられるこの段丘面を中心に立地する。

〔完新世段丘〕 この段丘は、調査地区的周辺にみられる地形の中で最もよく発達し、多くが矢野川に

第6図 調査地区周辺の地形分類図



よって形成されたものである。段丘崖は、数十cmの比高を有するものの、ところどころで不明瞭になり、そこでは段丘面と現氾濫原の地表がほぼ同じ高さで観察される。段丘面は比較的平坦で、条里型土地割（条里地割）が認められる場所もある。この段丘には、本遺跡のほか有年原・田中遺跡が立地する。

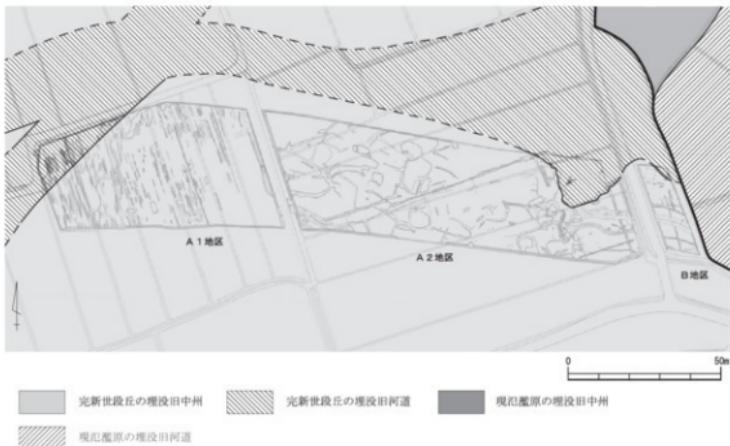
〔現氾濫原〕 この地形面は主に矢野川と千種川に沿ってみられる。これは、最も低い地形面で、河川の氾濫時に冠水する危険性が最も高い。そこでは、完新世段丘面と比べて地割の乱れが激しく、地表の起伏がやや大きい。

〔支流性扇状地〕 この地形は山地を刻む開析谷中から山麓にかけて発達する。これらは、洪水や土石流が発生した際、背後の山地から堆積物が供給されてできたもので、地表傾斜は平均13.5%と急である。この扇状地は、更新世段丘や完新世段丘と傾斜変換線で接し、現氾濫原とは比高1m前後の崖で境される。これらは北畠や山田、畠などに点々と分布する。

(2) 調査地区付近における微地形の分布

調査地区は矢野川南岸の完新世段丘に位置し、東側には現氾濫原が広がる。この付近では、完新世段丘と現氾濫原との境界に明確な比高をもつ段丘崖がみられず、両地形面はほぼ同じ高度の地表をなす。完新世段丘面には条里型土地割が認められ、現氾濫原での地割は乱れている。A1地区とA2地区ならびにA2地区とB地区の境界には、それぞれ条里型土地割の大畦畔が北北西～南南東の方向に延びる。

調査地区が位置する完新世段丘は埋没した扇状地が段丘化したものである。そのため、調査地区付近には扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で分布する（第7図）。調査地区の大半は東西に長く延びる埋没旧中州上に位置し、それはA1地区の北西部、A2地区の北東部、及びB地区の北東端を除く範囲に広がる。埋没旧中州上では、A1地区で中世以降の水田跡が検出され、A2地区では古墳時代初頭と後期の堅穴住居跡が1棟ずつ、井戸をはじめとする古墳時代後期の祭祀遺構、ならびに古墳時代や古代以降の水田跡などが認められる。またB地区の埋没旧中州上では、主に古墳時代初頭の掘立柱建物跡が1棟検出されている。



第7図 調査地区付近における微地形の分布

埋没旧河道はA1地区の北西部、A2地区の北東部、及びB地区的北東端に分布し、いずれも矢野川の流路跡に該当する。これらのうちA2地区北東部の埋没旧河道は、古墳時代初頭に形成された流路跡で、A2地区とA1地区の北側をおおむね西へ延びると推定される。また、A1地区的埋没旧河道は、それより古い時期のもので、同地区的北西部を北東から南西へ横切る。この埋没旧河道上では、南東側の埋没旧中州上から連続する中世以降の水田跡が検出されている。

3. 調査地区における堆積物の特徴

(1) 遺構検出面以深の堆積物について

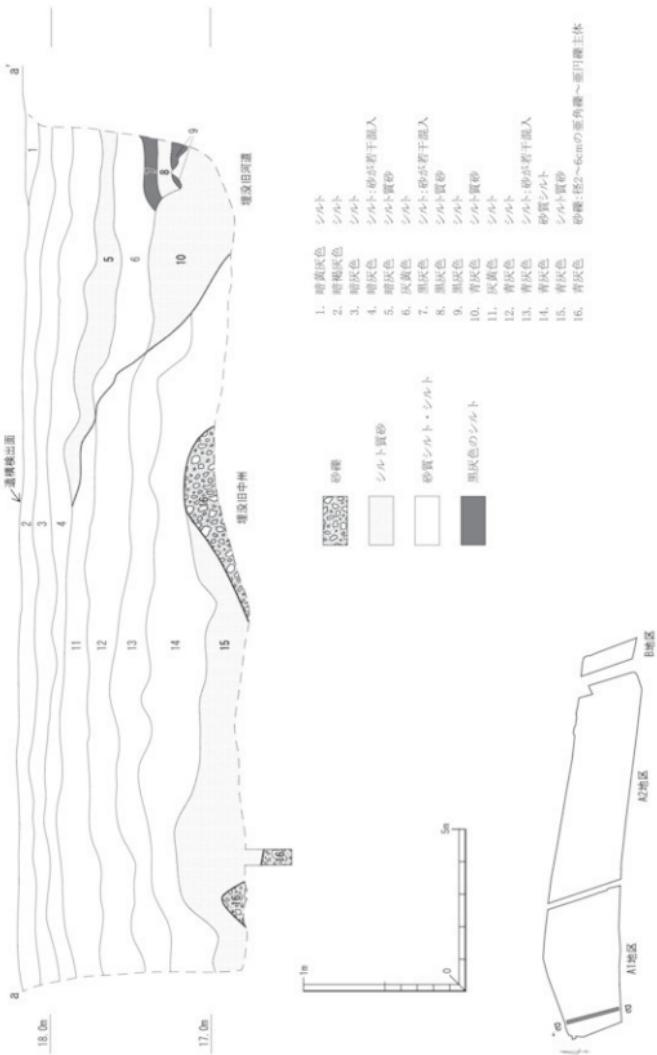
遺構検出面から掘削したA1地区的トレンチ断面では、調査地区に分布する埋没旧中州と古い時期に形成された埋没旧河道の堆積物が観察される（第8図・第9図）。埋没旧中州の分布域では、基本的に9つの堆積物が認められる。これらは、下位から青灰色～灰色の砂礫（第8図の堆積物16、第9図の堆積物10）、青灰色～灰色のシルト質砂（第8図の堆積物15、第9図の堆積物9）、青灰色～灰色の砂質シルト（第8図の堆積物14、第9図の堆積物7・8）、青灰色のシルト（第8図の堆積物13、第9図の堆積物6）、青灰色～黄灰色のシルト（第8図の堆積物12、第9図の堆積物5）、灰黄色のシルト（第8図の堆積物11、第9図の堆積物4）、暗灰色～灰色のシルト（第8図の堆積物4、第9図の堆積物3）、暗灰色～灰色のシルト（第8図の堆積物3、第9図の堆積物2）、及び暗褐色～灰色のシルト（第8図の堆積物2、第9図の堆積物1）である。

最下位にみられる青灰色～灰色の砂礫（第8図の堆積物16、第9図の堆積物10）は旧中州堆積物に相当する。砂礫に含まれる礫は径1～6cmの亜角礫～亜円礫を主体とし、最大で径10cmの礫がみられる。砂礫の上面は、トレンチ底の深さ前後に認められ、数十cmの起伏をもつ。これは比較的深く埋もれており、現地表下1.7m以深に堆積している。砂礫の上位に位置する青灰色～灰色のシルト質砂（第8図の堆積物15、第9図の堆積物9）は、下位の砂礫上面が低い箇所に断続的に分布する。堆積物中の砂は主に細砂で、厚さが50cm以上に及ぶ箇所もみられる。

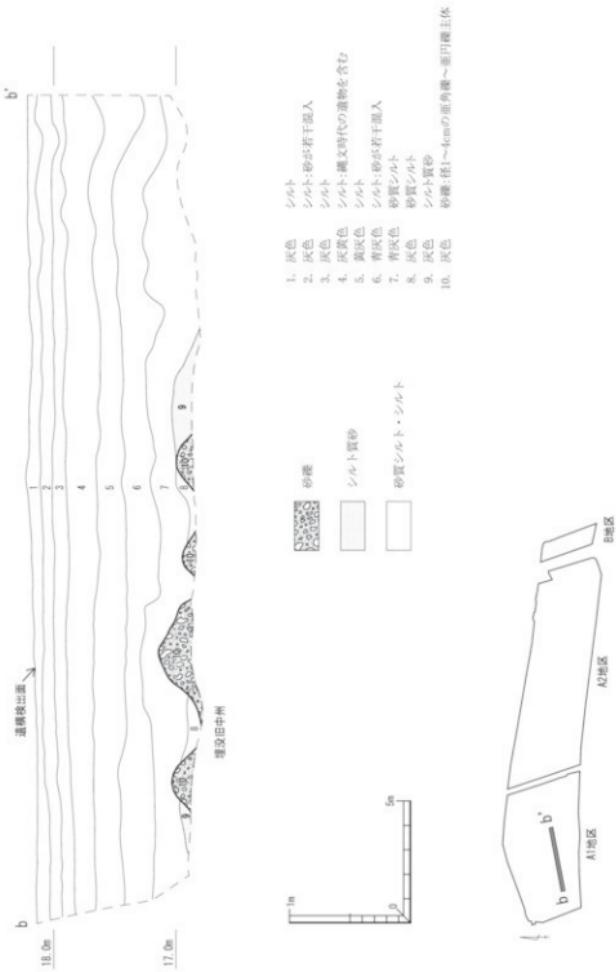
その上位にみられる7つの砂質シルトとシルトは、1.0～1.4mの厚さで認められる。砂質シルトは最も下位に存在し、上位に位置する6つのシルトにはところどころで砂が若干混入する。各堆積物は10～40cmの厚さをもち、ほぼ水平に連続してみられる。これらのうち、灰黄色のシルト（第8図の堆積物11、第9図の堆積物4）には縄文時代の遺物がわずかに含まれる。調査地区的約100m南方では、縄文時代後期初頭の遺物と同時期の土坑2基がこのシルトとほぼ同じ層位から検出されており¹¹⁾、灰黄色のシルトに混入する遺物はこれと同じ時期のものである可能性が高い。

A1地区的北西部に分布する埋没旧河道は、このような灰黄色のシルトを切るもので、A1地区的南北トレンチ断面（第8図）ではその南半部が幅およそ12mにわたって観察される。旧河道の深さは1m以上に及び、その堆積物は下位から青灰色のシルト質砂（第8図の堆積物10）、黒灰色のシルト（第8図の堆積物9）、黒灰色のシルト質砂（第8図の堆積物8）、黒灰色のシルト（第8図の堆積物7）、灰黄色のシルト（第8図の堆積物6）、ならびに暗灰色のシルト質砂（第8図の堆積物5）である。これらのうち、黒灰色を呈するシルト（第8図の堆積物7・9）とシルト質砂（第8図の堆積物8）は下位の青灰色シルト質砂の上面が低い箇所に局所的にみられる。とくに黒灰色のシルトは、流路の埋積過程でできた低湿な凹地で生成された土壤にあたる。

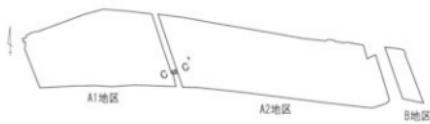
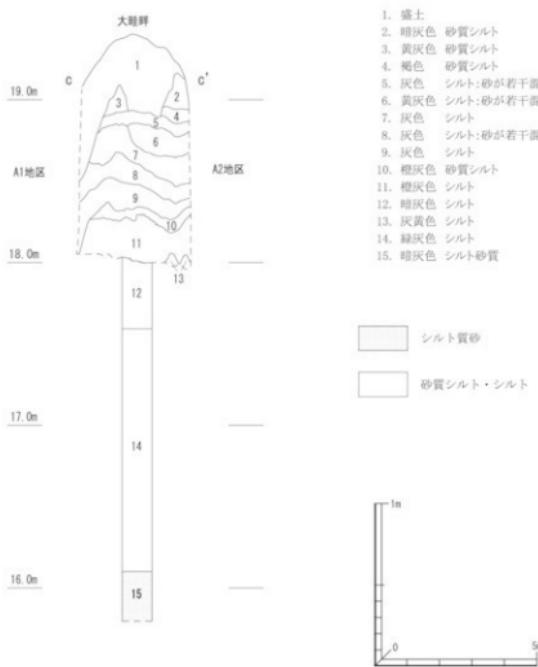
A1地区とA2地区の境界における地質断面では、条里型土地割の大畦畔堆積物とそれより下位の堆



第8図 A1地区におけるトレーンチ断面図（南北方向）



第9図 A1地区におけるトレンチ断面図（東西方向）



第10図 A 1 地区と A 2 地区間の大畦畔たちわり断面図

植物が観察される（第10図）。大畦畔下にみられる堆積物は、下位から暗灰色のシルト質砂（第10図の堆積物15）、緑灰色のシルト（第10図の堆積物14）、灰黄色のシルト（第10図の堆積物13）、ならびに暗灰色のシルト（第10図の堆積物12）である。これらのうち、灰黄色のシルト（第10図の堆積物13）上面は遺構検出面に相当し、その上位に位置する暗灰色のシルト（第10図の堆積物12）はA2地区の南西端をほぼ東西に延びる小規模な流路の堆積物にあたる。この地点では、遺構検出面から約2.2mの深さまで砂礫がみられず、砂礫の上面はA1地区と比べて1m以上深い。これは深く埋没している旧河道の存在を示唆するものの、詳細は明らかでない。

大畦畔の堆積物は灰色や黄灰色、橙灰色などを呈する砂質シルトとシルト（第10図の堆積物1~11）である。これらは基本的に盛土に該当する。中でも、下部にみられる橙灰色のシルト（第10図の堆積物11）と砂質シルト（第10図の堆積物10）の上面は幅約4mにわたって20~30cm盛り上がっており、これは条里型土地割の施行期における大畦畔の可能性が高い。

（2）遺構検出面より上位の堆積物について

遺構検出面より上位には、主にシルトからなる堆積物が認められる。A1地区では、基本的に下位から褐灰色のシルト、灰黄色のシルト、灰色のシルト（近年の耕土）、及び耕土がみられる。またA2地区での基本層序は、下位から暗灰色のシルト、灰色のシルト、黄灰色のシルト、褐灰色のシルト、ならびに耕土である。これらのうち、それぞれ最下位にみられる褐灰色と暗灰色のシルト下面が遺構検出面に相当し、A2地区ではこの層位で古墳時代初頭と後期の堅穴住居跡や古墳時代後期の祭祀遺構などが検出されている。

A2地区の北東部に分布する埋没旧河道も、この層位で検出され、遺構検出面下の堆積物を切って存在する。この旧河道堆積物は主に灰色の砂質シルトとその上位に位置する灰色や暗褐灰色のシルトである。これらの堆積物には、植物遺体が混入し、また古墳時代初頭、前期、及び後期を中心とする遺物が含まれる。こうした旧河道堆積物は埋没旧中州上から連続する遺構検出面以浅の堆積物に覆われる。

4. 調査地区付近における地形環境の変遷

調査地区付近の地形環境は、これまで述べてきた事柄から次のように考察される。

〔ステージ1〕 調査地区付近では、縄文時代後期初頭以前に矢野川によって砂礫が堆積した。それに伴って、扇状地が発達し、調査地区付近には中州が形成された。

〔ステージ2〕 旧中州は矢野川の洪水がもたらした細粒堆積物によって埋没した。まず旧中州上面の低い箇所にシルト質砂が堆積し、ついで砂質シルトがそれを覆った。さらに数度の洪水によってシルトが次々と堆積し、旧中州は次第に深く埋もれていった。

〔ステージ3〕 旧中州がある程度埋没した後、A1地区の北西部を南西に向かって矢野川が流下した。この流路はその後シルト質砂やシルトに埋積され、その過程で局所的にできた低湿な凹地では黒灰色のシルトが生成された。A1地区の埋没旧中州上では、こうした流路の形成前後（おそらく縄文時代後期初頭ころ）に人間活動がみられた。

〔ステージ4〕 埋没旧中州上とA1地区北西部の旧河道上には、再びシルトが数度の洪水に伴って堆積した。そのため埋没旧中州は1.2m以上の深さに埋もれた。

〔ステージ5〕 古墳時代初頭になると、矢野川がA2地区の北東部をかすめておむね西へ流れた。同じころ埋没旧中州上では、A2地区で堅穴住居、B地区で掘立柱建物が建てられた。

〔ステージ6〕 古墳時代初頭以降、A 2 地区北東部に形成された流路には砂質シルトやシルトが堆積した。その結果、この流路は古墳時代後期には埋積された。A 2 地区の埋没旧中州上では、その過程で水田稲作が営まれ、また古墳時代後期には堅穴住居が建てられるとともに祭祀遺構がつくられた。

〔ステージ7〕 古墳時代の終了後、主として中世ころに A 1 地区や A 2 地区では水田がつくられ、そこは生産域となった。その後、調査地区のほぼ全域では洪水に伴うシルトの堆積がみられた。

〔ステージ8〕 矢野川下流部の沖積低地は河川の下方段食によって段丘化した。こうしてできた完新世段丘の崖下には河川に沿って現氾濫原が形成され、洪水は主にそこで発生するようになった。

5. おわりに

本遺跡の調査地区は、千種川の支流である矢野川下流部の完新世段丘に位置する。この段丘は埋没した扇状地が段丘化したもので、段丘化の時期は古墳時代後期以降おそらく中世ころであったと考えられる。調査地区の大半は埋没旧中州上に位置する。これは、縄文時代後期初頭以前の扇状地形成期につくられた旧中州がその後現地表下1.7m以深に埋没したものである。また、A 1 地区の北西部、A 2 地区の北東部、及びB地区の北東端には埋没旧河道が認められる。A 1 地区の旧河道は縄文時代、A 2 地区とB地区的ものは古墳時代初頭から後期にかけて形成・埋積された流路跡にある。

調査地区付近では、旧中州が比較的深く埋没しているため埋没旧中州上が平坦に近く、排水の便があまりよくなかった。これは典型的な埋没旧中州上の環境と異なる。このような埋没旧中州の北側には古墳時代初頭に流路が形成され、その河床より高い埋没旧中州上では排水機能がやや向上した。これが一因となって、A 2 地区やB地区の埋没旧中州上では古墳時代初頭と後期に堅穴住居や掘立柱建物がわずかながら建てられた。ただし、そこでは元来の環境が影響して古墳時代に水田もつくられた。こうした埋没旧中州上では、北側に存在する流路が古墳時代後期には埋積された後、排水機能が低下した。その結果、古墳時代が終わった後の埋没旧中州上は主に水田稲作が営まれる生産域として利用されるようになった。本遺跡の調査地区では、以上のような地形環境と人間活動の関係が認められるのである。

注

- 1) 兵庫県赤穂市教育委員会『有年原・クルミ遺跡発掘調査報告書－有年土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1－』 2008年

第5章　まとめ

水田について

今回の調査では、A 2 地区から A 1 地区にかけて水田跡を検出している。本遺跡で面的に水田遺構を調査したのは初めてであり大きな成果といえる。A 1 地区で検出した遺構は單一方向を示すのみであったが、A 2 区で検出した水田は、少なくとも 2 方向を示す。この方向の違いは時期差を示すものと考え、少なくとも 2 時期の水田を同一遺構面で検出したものと判断する。それぞれの水田について述べる。

1期

N75°E を示し現畦畔とはほぼ同方向である。この方向は、A 1・B 地区検出の耕作痕（スキ溝）にも見られ、溝、畦畔ともに直線的にのびる。完存する水田はないが、遺構の形態などから東西方向に長い短冊状を呈すると考える。残存する畦畔の状況から南北の長さは 20~25m を測る。水田は断面観察から少なくとも A 2 地区 S D06 埋没以降に開発されたと考えられ、古くみると古代、新しくみると、中世以降に開発されたと考える。A 2 地区では水田に伴う遺物が出土していないが、A 1 区からは中近世の遺物が出土する。A 2 地区では S D01・14・16・17・20 がこの時期の水田に伴う溝と考える。

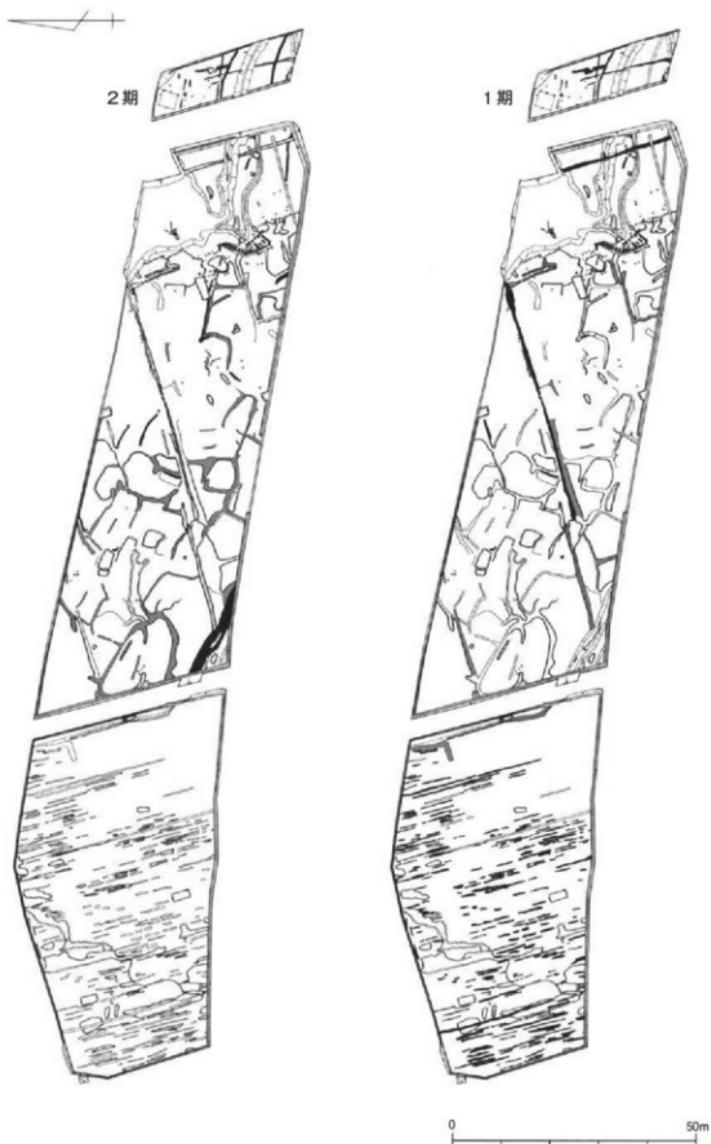
2期

1 期の遺構よりも東側に偏り N100~110°E を示す。完存する水田はないが、南東-北西に主軸をもつ不整長方形を呈すると考える。良好に残存した畦畔の高さは約 20cm あり、A 2 地区東半部では水田土壤層が残る。また西端付近では当該時期の水田が 2 面検出できた。水田土壤層はいずれも浅黄を呈するシルト質極細砂であるが、畦畔は下層から上層まで存続するものと、洪水により埋没後に再度構築されたものがある。2 期の水田の時期は、水田と同方向の溝から出土した遺物が古墳時代初頭以降であることから古墳時代に属すると考える。A 2 地区 S D02・03・12・13・15・18・19・21 がこの時期の水田に伴う溝と考える。

A 1 区は本報告や隣接地での調査成果から、水田化以前は大部分が旧河道にあたると推定される。遺構検出面から出土した土器は中近世に属するもののみである。一帯が旧河道埋没後に安定し、生産域として土地開発が進み、本格的に利用されたのは中世以降であろう。東端で検出した大畦畔は、基盤層が高位で検出できるほぼ西端に位置することから、A 2 地区以東で検出した 1 期の水田の西を限るものであろう。したがって A 1 地区と A 2 地区は水田の地割こそ同じであるものの、時期差をもつ可能性があり、旧河道の埋没に合わせて段階的に西へ開発が進んでいった可能性がある。

生活域について

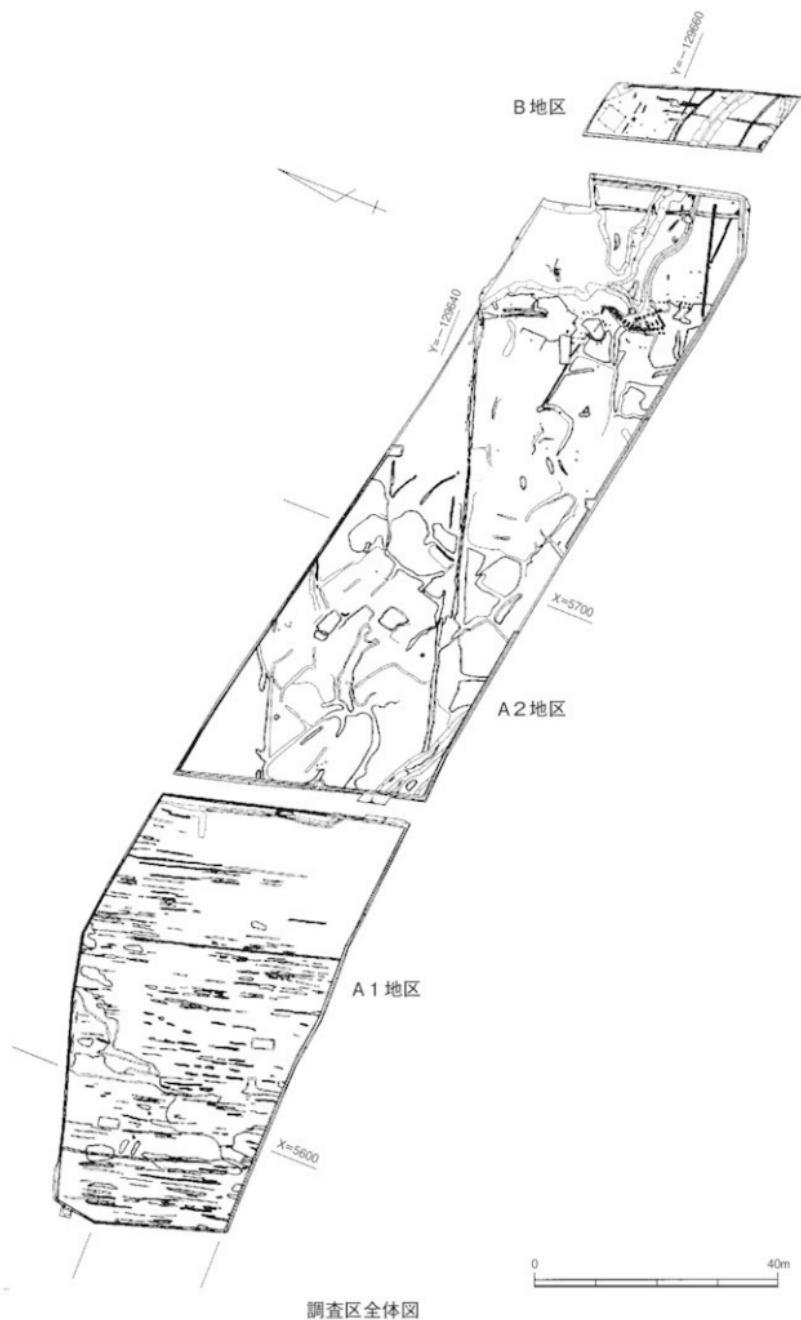
A 2 地区東半部から B 地区では安定した基盤層が認められ、その上面で堅穴住居跡、掘立柱建物跡などの遺構を検出した。この範囲は生活域として利用され、今回の調査ではその一端を検出したものと考える。周辺の調査結果や微地形復元などによると、本調査区南側に東西に細長い微高地が所在し、生活域の主体はそこにあると考える。微高地上にあたる箇所では、縄文時代以降の遺構が検出される。A 2 地区南東部および B 地区はその西端付近にあたるのであろう。今回調査では古墳時代後期の生活域の一端も検出し、住居跡の他に川岸付近で水際の祭祀が行われていた。この時期も集落の中心は本調査区南側にあることが考えられ、有年原・クルミ遺跡の中では継続的な生活域として利用されていたものと推定される。

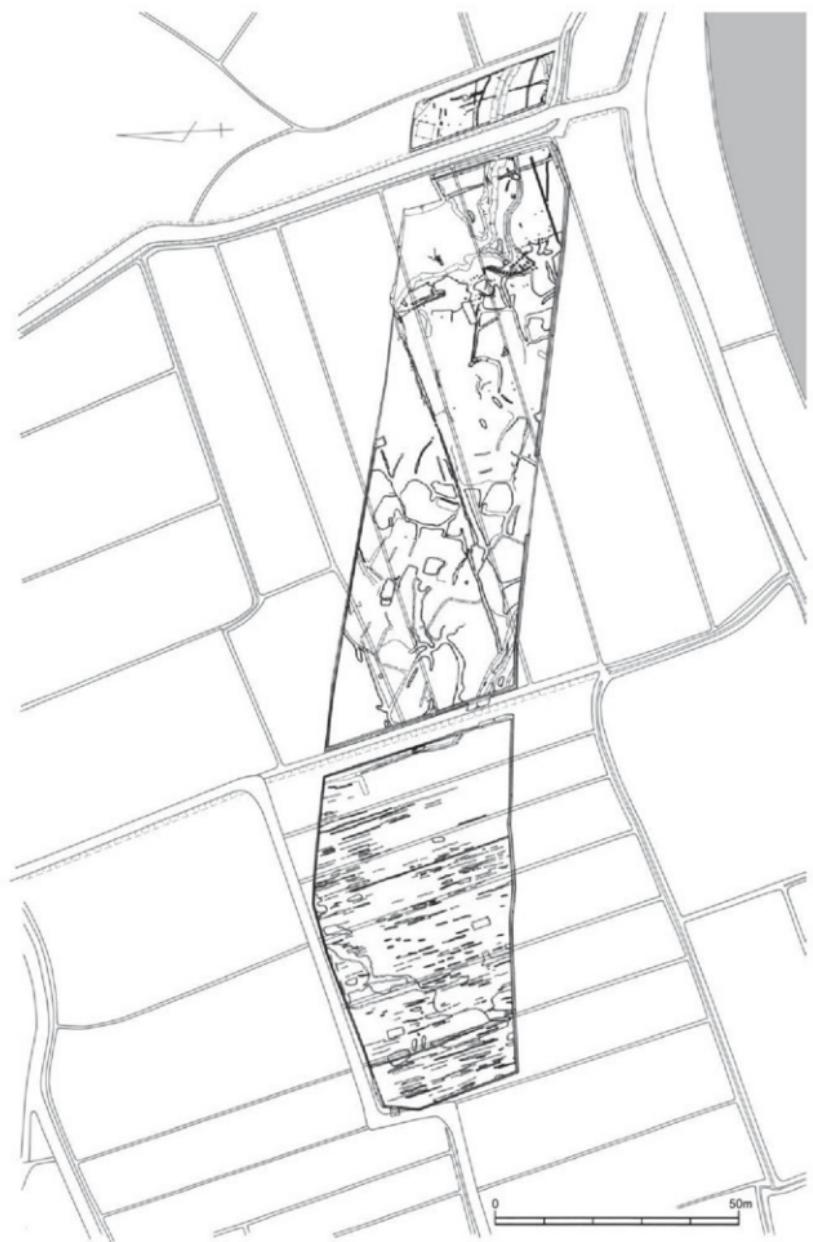


第11図 溝・畦畔の方向

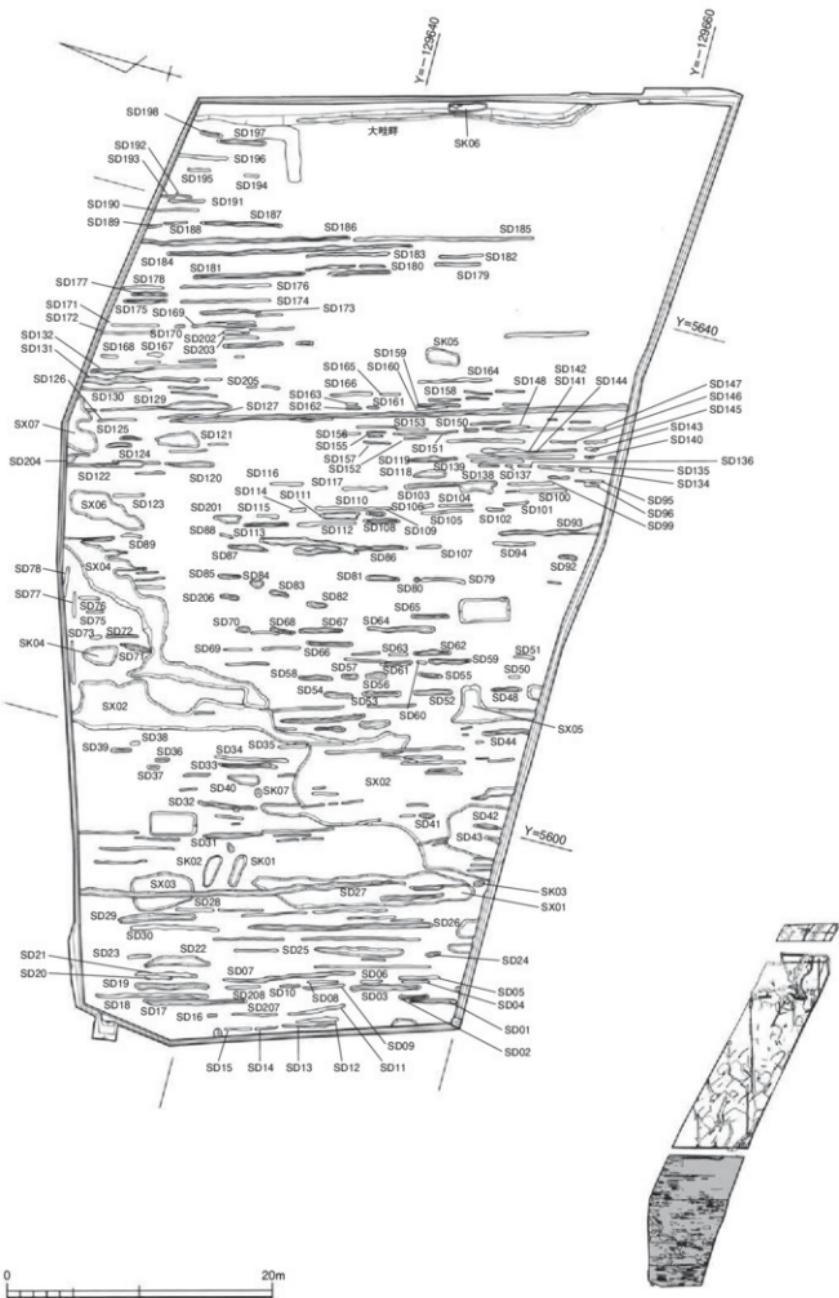
報告書抄録

ふりがな	うねはら・くるみいせき						
書名	有年原・クルミ遺跡						
副書名	一般国道2号相生有年道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第457冊						
編著者名	長濱 誠司・渡辺 昇・青木 哲哉						
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部						
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内） TEL 079-437-5561						
発行機関	兵庫県教育委員会						
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel078-362-3784						
発行年月日	平成26(2014)年2月28日						
資料保管機関	兵庫県立考古博物館						
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (m ²)	発掘原因
うねはら 有年原・ク ルミ遺跡	市町村 赤穂市有年原	遺跡番号 28212	130318	34°49'52"	134°23'42" 20090624 ~20091014 (2009147)	6,816m ²	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
有年原・ク ルミ遺跡	集落跡	弥生時代		弥生土器・石器			
		古墳時代	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・祭祀遺構・溝・水田	須恵器・土師器	井戸を中心とした水際祭祀が行われる		
		中世	水田	土師器・陶磁器・金属器			
要約	<p>有年原・クルミ遺跡は千種川支流の矢野川南岸に位置する。遺構は東半部で古墳時代初頭の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝、古墳時代後期の井戸を中心とした祭祀遺構などを検出したが、生活域の中心は調査区南側にあるものと考える。西半部では水田とそれに伴う溝などを検出した。水田は少なくとも新旧2時期のものが重複している。出土遺物から古い段階の水田は古墳時代初頭以降、新しい段階の水田は古代以降と考えている。古い段階の水田は同じ方向を示す畦畔が重複しており、洪水の被害を受けながらも継続的に生産が行われていたと推定する。遺跡周辺には条里地割が残存するが、新しい段階の水田は条里形地割と同じ方向を示す。西端付近で検出した水田については、出土遺物から矢野川旧河道が埋没した中世以降に形成されたものと思われる。</p>						

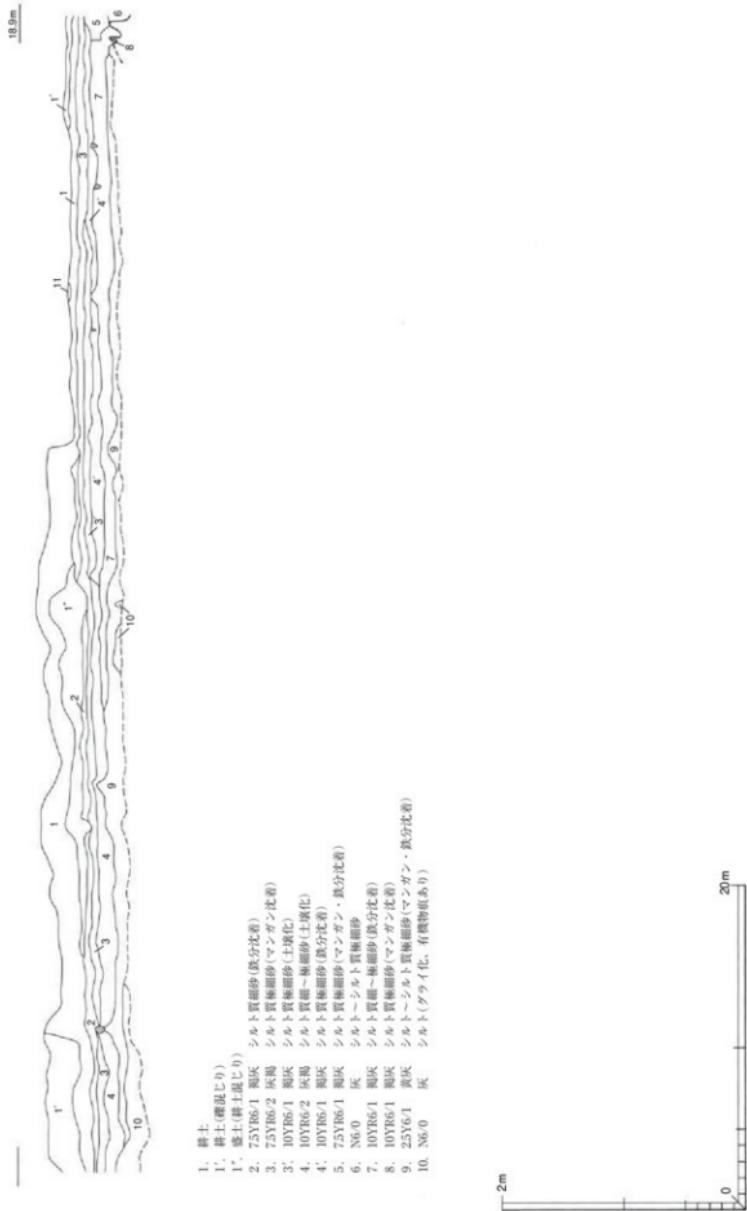




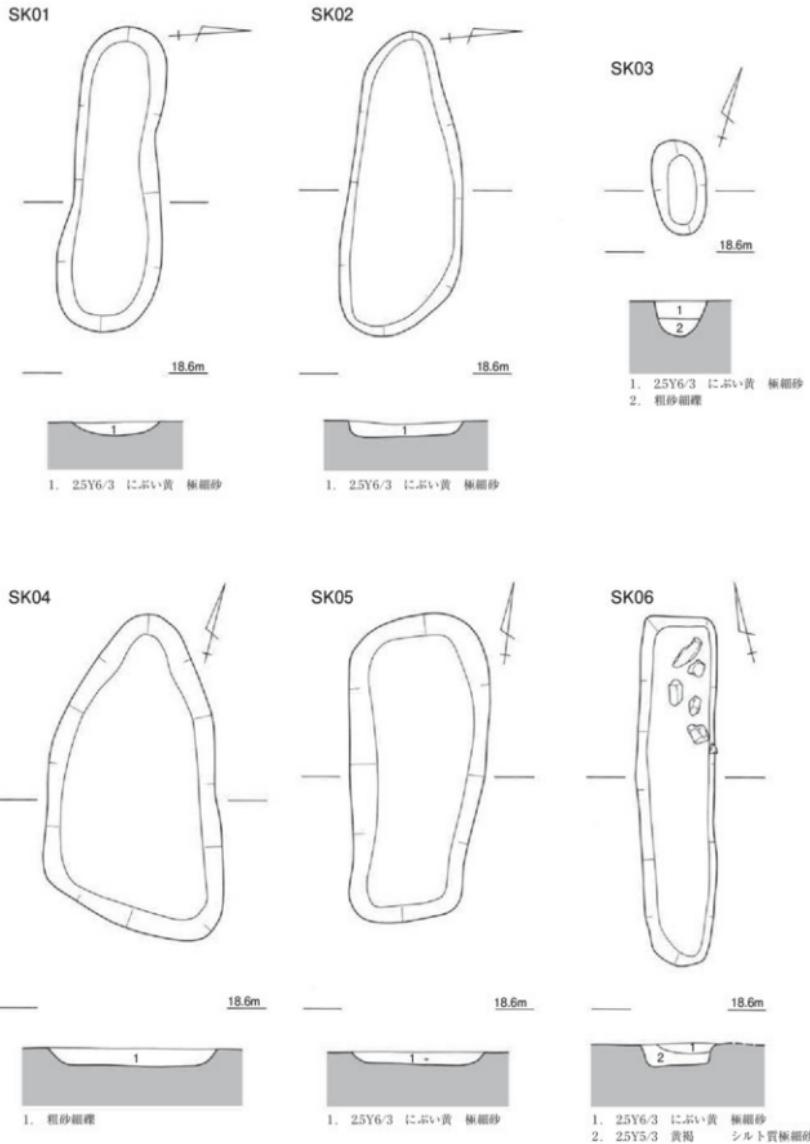
検出遺構と周辺地割



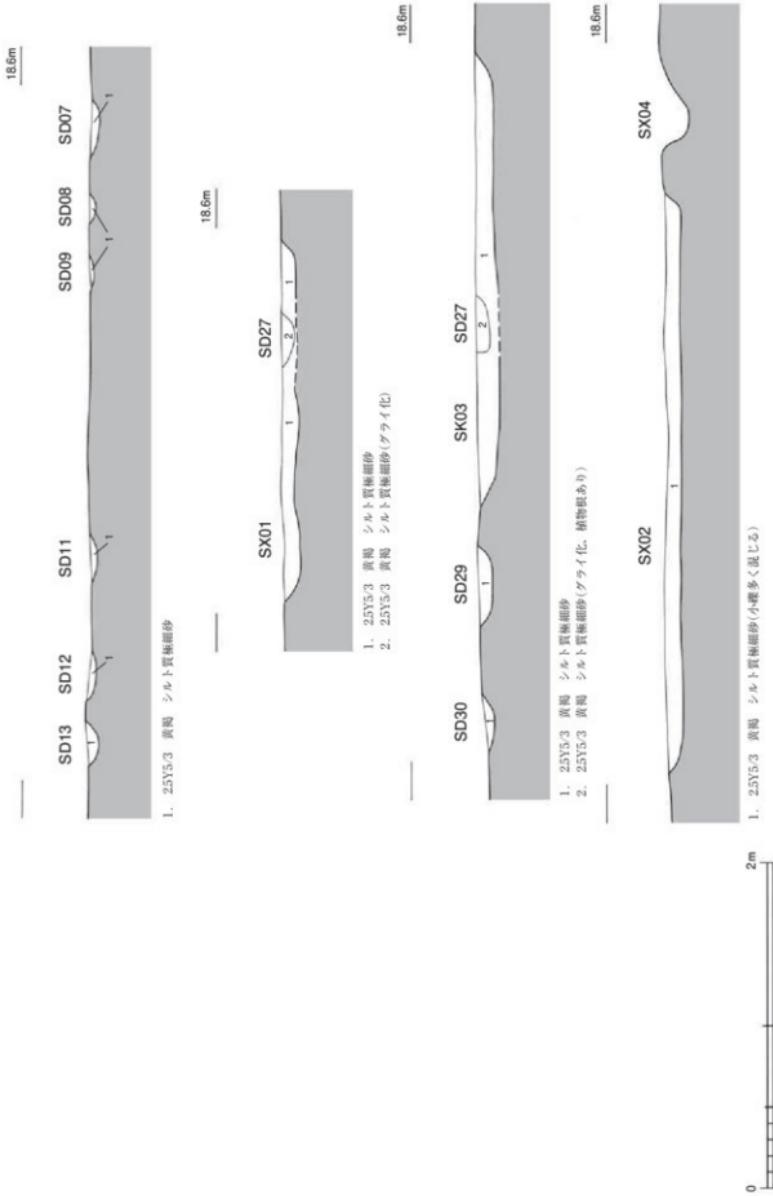
A1 地区 全体図



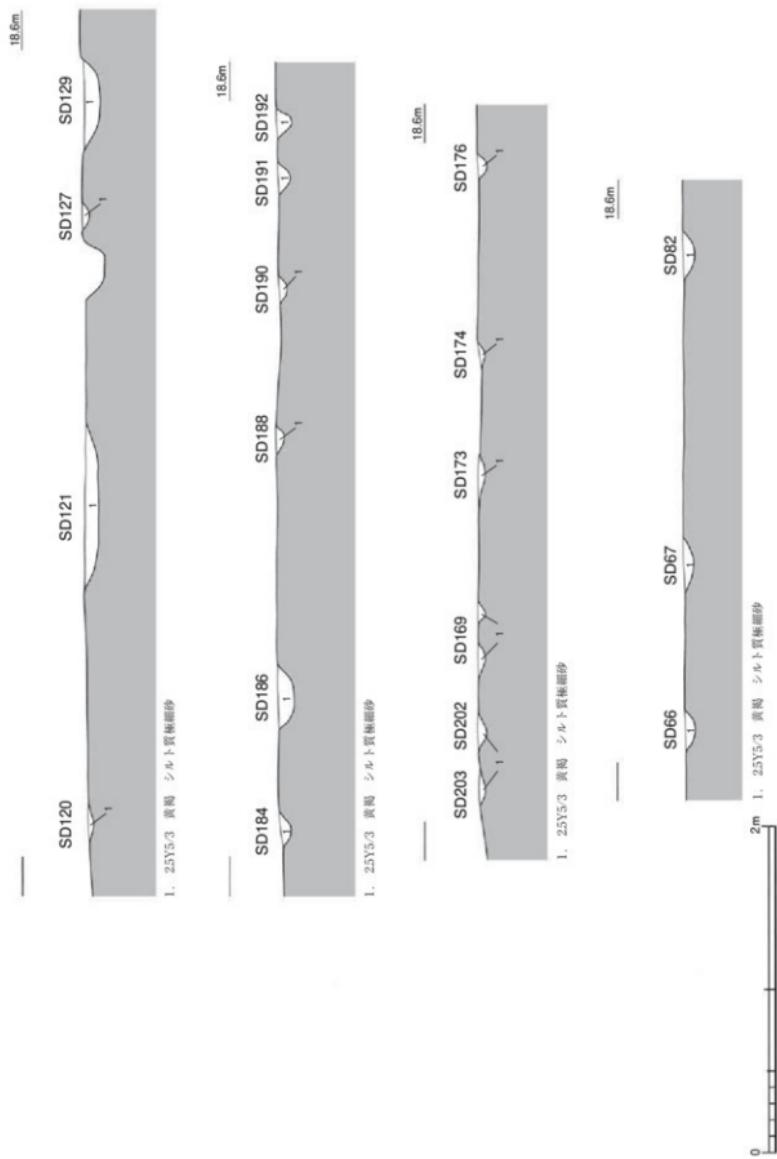
A1 地区 北壁断面図



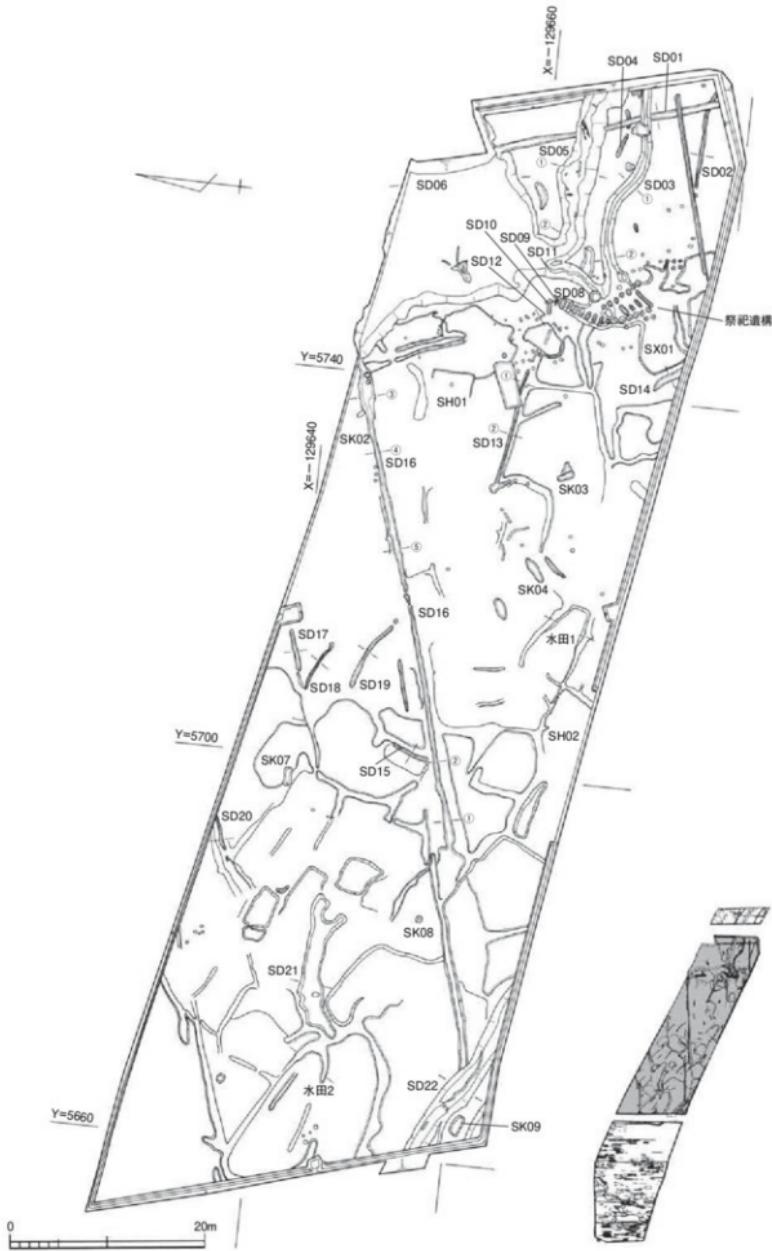
A1 地区 土坑



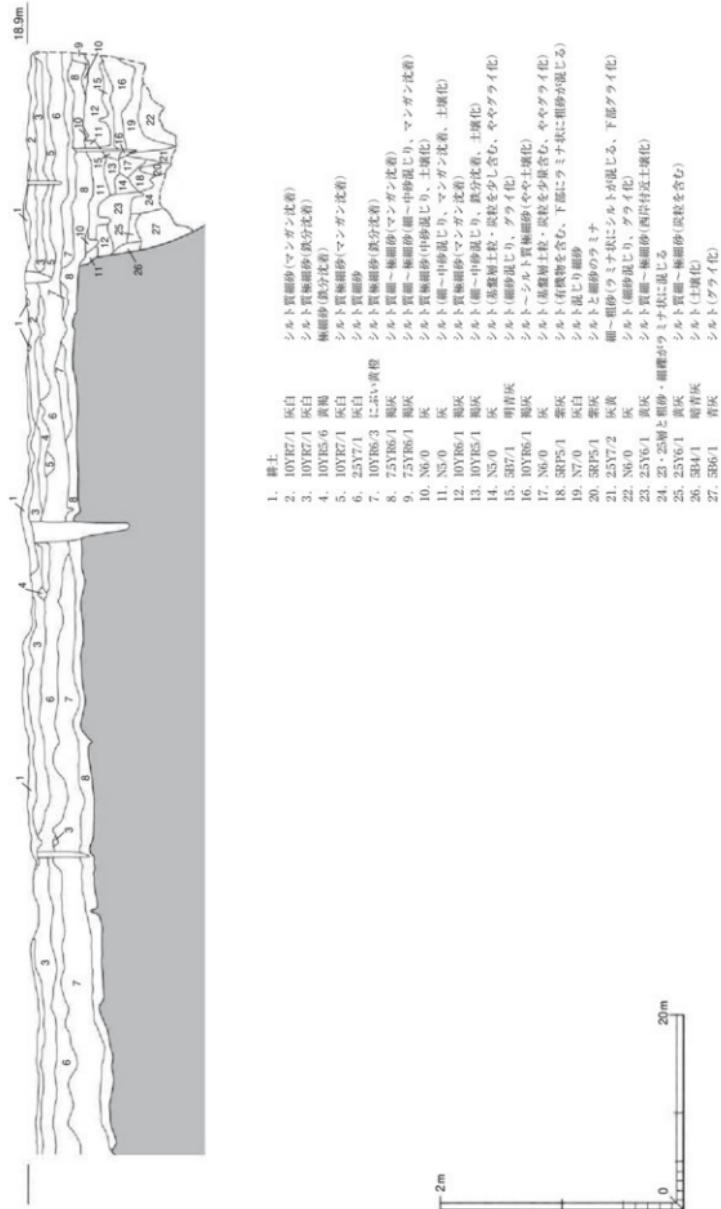
A1 地区 满(1)



A1地区溝(2)

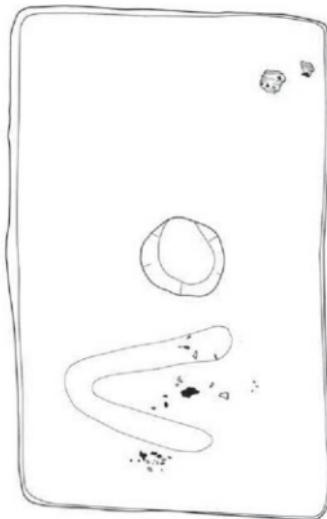


A2 地区 全体図

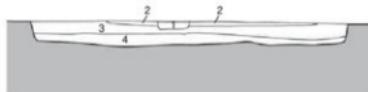


A2地区 北壁断面図

SH01



19.0m



1. 25Y7/3 淡黄 シルト質極細砂
2. 25Y6/2 灰黄 シルト質極細砂
3. 10Y63/4 暗褐 極細砂(焼土・炭が混じる)
4. 5YR3/4 暗褐 極細砂

SH02

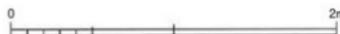


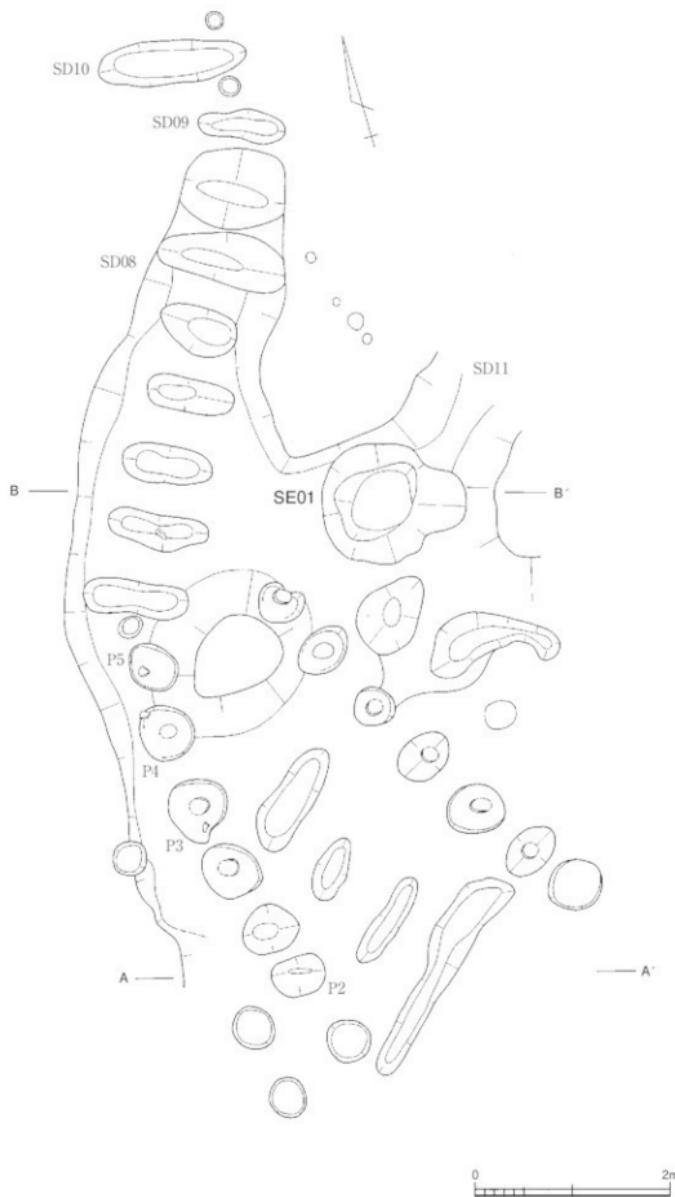
2m



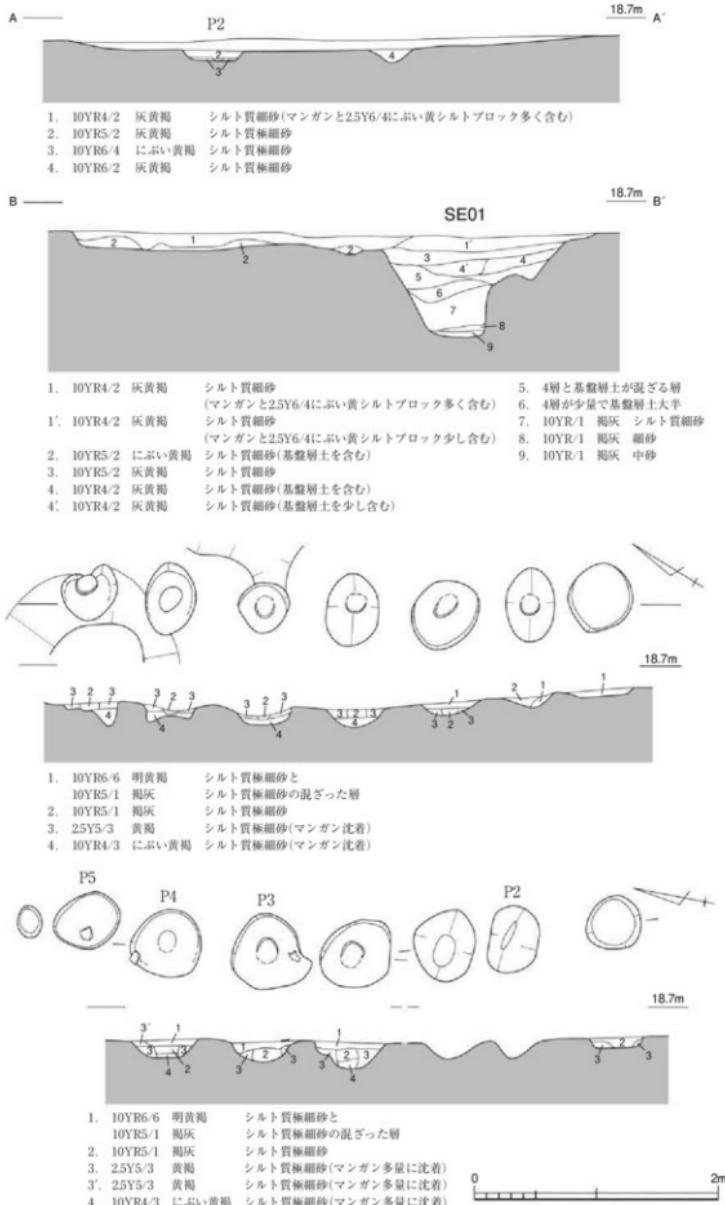
19.0m

A2地区 壇穴住居跡

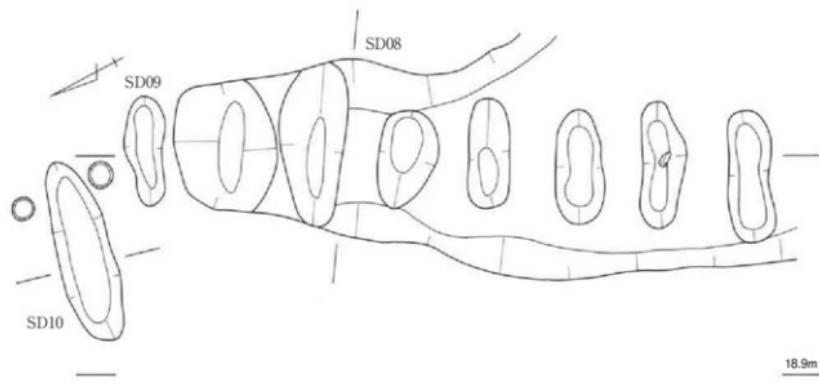




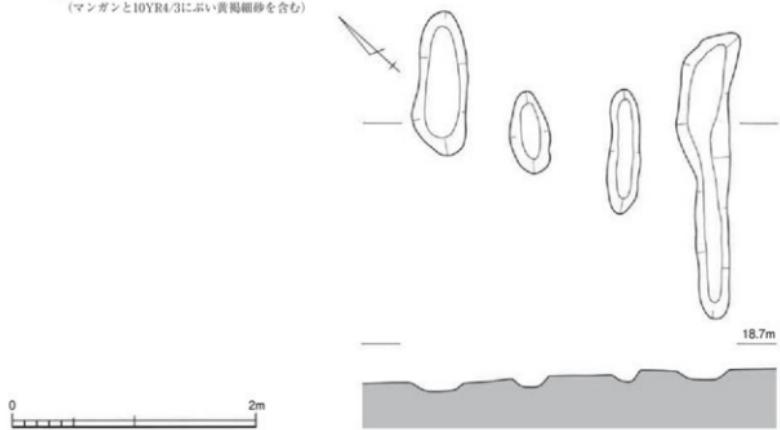
A2地区 祭祀遺構



A2地区 祭祀遺構断面図(1)



1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘細砂
(マンガンと10YR4/3にぶい黄褐細砂を含む)



SD10
18.7m



1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘細砂
(マンガンと10YR4/3にぶい黄褐細砂を含む)

SD08
18.7m

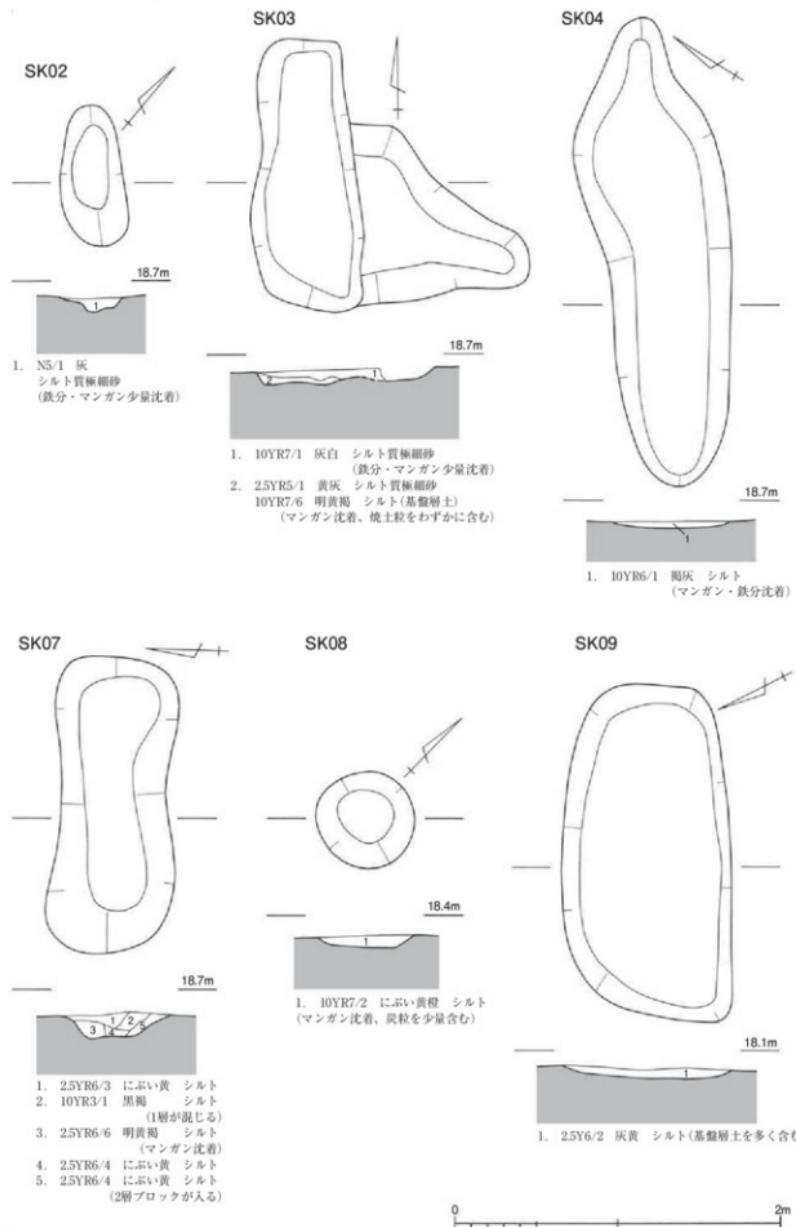


1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘細砂 (マンガンと10YR4/3にぶい黄褐細砂を含む)

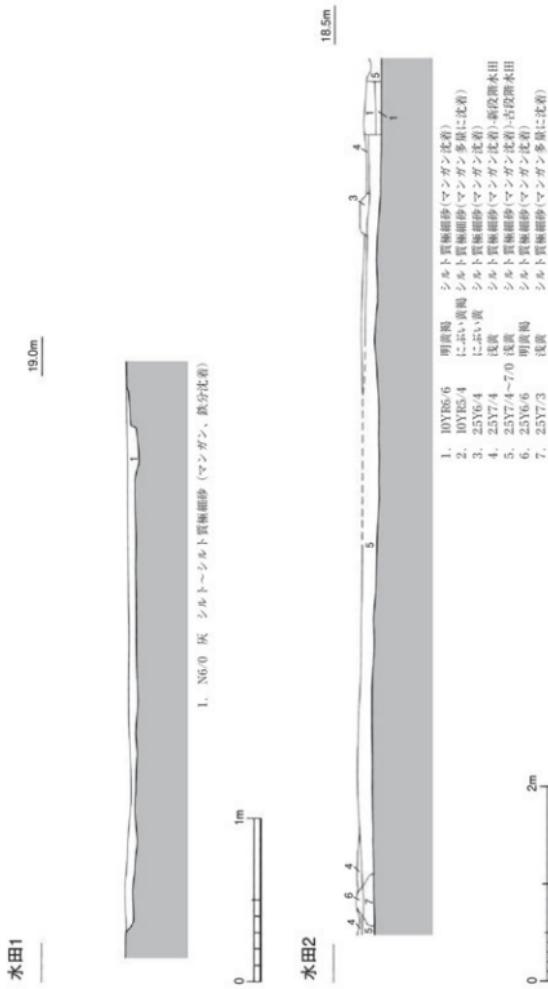


A2地区 祭祀遺構断面図(2)

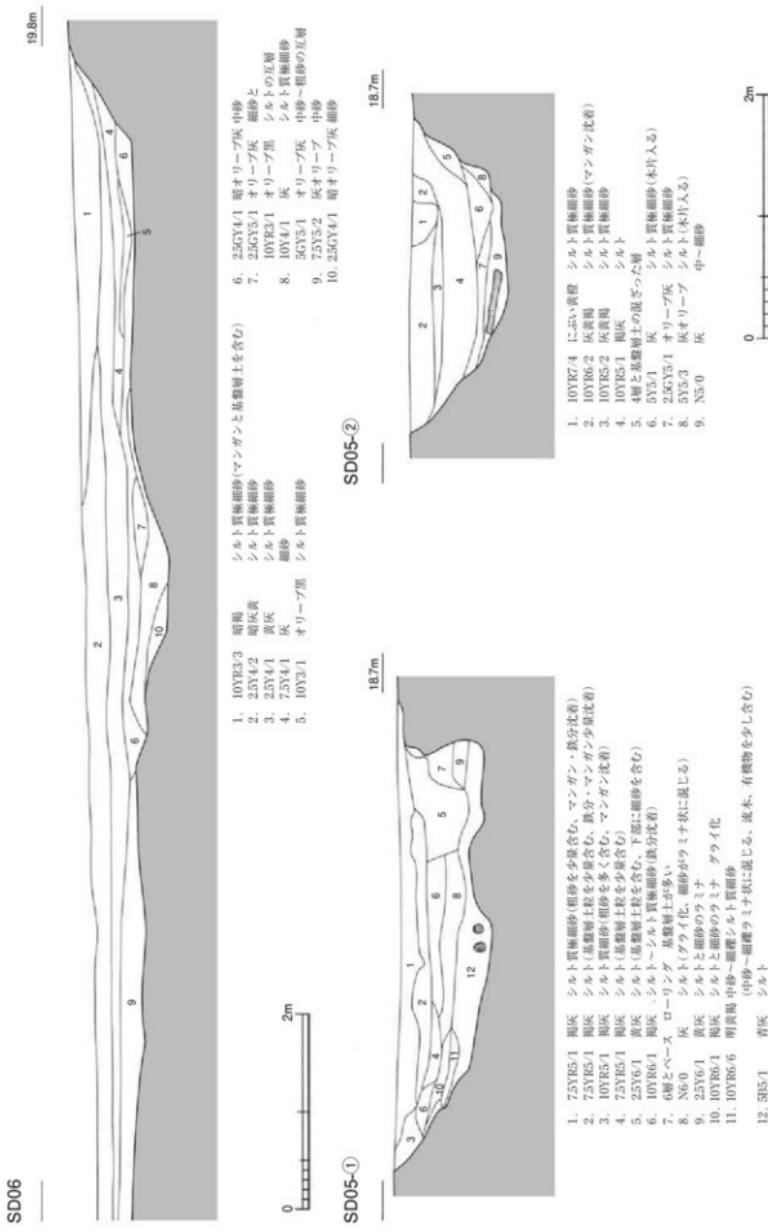
図版14



A2地区 土坑



A2地区 水田・畦畔



SD01

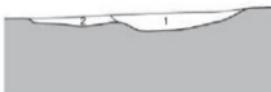
18.8m



1. 7.5YR6/1 開灰 シルト質極細砂(基盤層土とローリング)

SD16-①

18.7m



1. 10YR6/1 開灰 シルト質細砂(マンガン少量沈着)
2. 10YR6/1 開灰 シルト(マンガン沈着)

SD16-②

18.7m



1. 10YR6/1 開灰 極細砂
(基盤層土ブロック混じる、マンガン沈着)
2. 10YR7/1 灰白 シルト質極細砂
(鉄分・マンガン少量沈着)

SD16-③

18.6m



1. 10YR6/1 開灰 シルト質細砂～極細砂(鉄分・マンガン沈着)
2. 10YR6/1 開灰 シルト質細砂(中～粗砂を含む)
(1層より鉄分・マンガン多量に沈着、基盤層土ブロック
少量混じる)
3. 10YR6/1 開灰 シルト質細砂
(鉄分・マンガン沈着、基盤層土ブロック少量混じる)

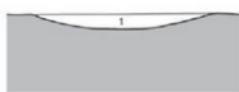
SD16-④

18.5m



SD16-⑤

18.5m



1. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
(マンガン多量に沈着)

SD14

18.7m



1. 25YR7/2 灰黄 シルト(基盤層土)
10YR6/1 開灰 シルト質極細砂
(マンガン・鉄分沈着)

SD17

18.6m



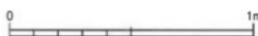
1. 10YR7/6 明黄褐 シルト(基盤層土)
10YR7/1 灰白 シルトブロック

SD20

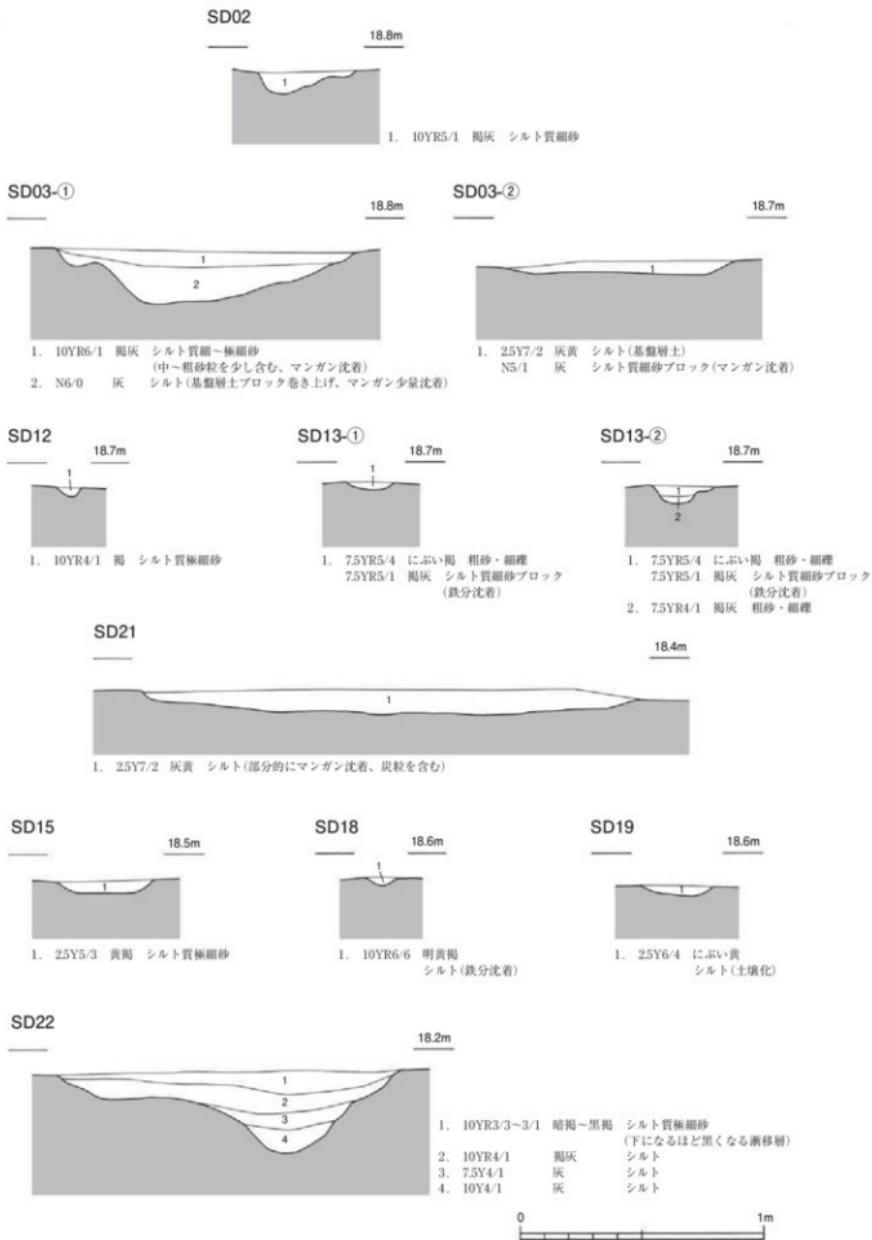
18.5m



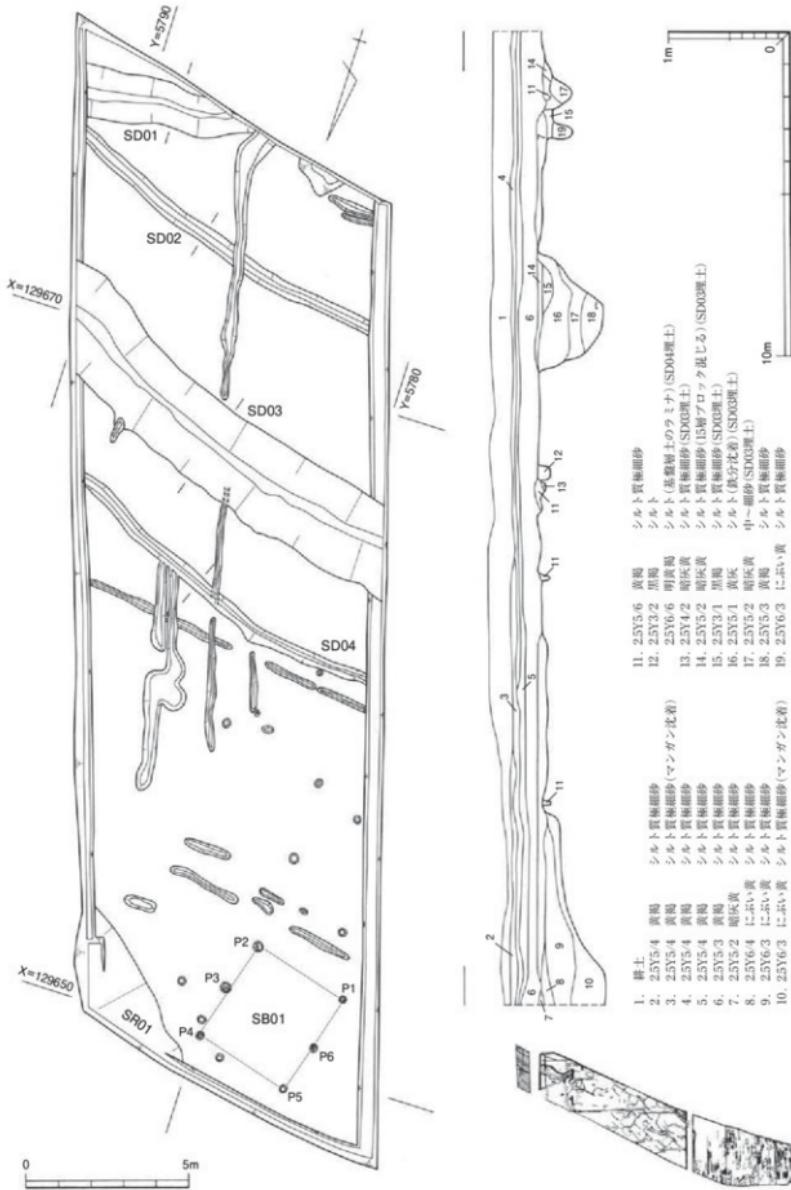
1. 10YR7/6 明黄褐 シルト
(基盤層土)(マンガン沈着)
2.5Y6/1 黄灰
シルト質極細砂ブロック



A2地区 溝(2)

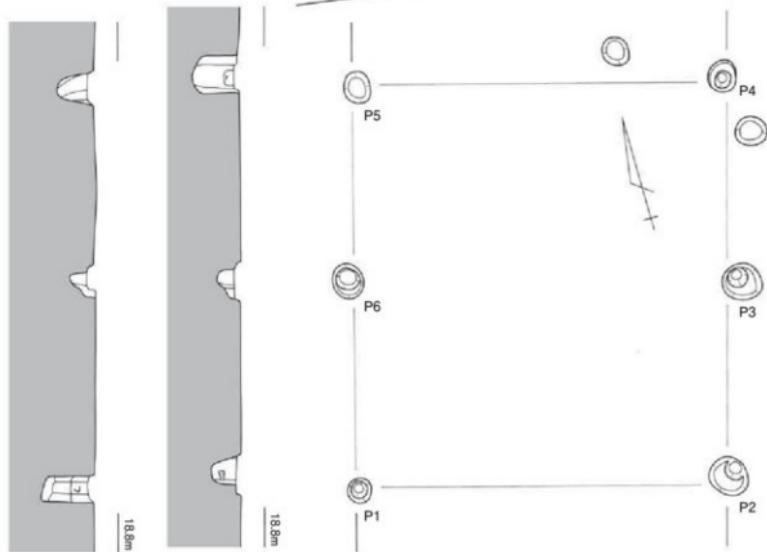


A2地区 溝(3)



B地区 全体図・東壁断面図

SB01



SD01

19.0m



1. 10YR8/6 黄橙 シルト(基盤層土)
2. 10YR6/1 褐灰 シルト質極細砂のブロック
3. 10YR6/1 褐灰 シルト質やや極細砂(上面にマンガン沈着)
4. 10YR5/1 褐灰 シルト
4. 25Y7/1 白灰 細砂～粗砂(中に鉄分沈着)

SD02

19.0m



1. 25Y6/1 黄灰 シルト質極細砂(粗砂を含む、上面にマンガン沈着)
2. 25Y5/1 黄灰 シルト

SD04

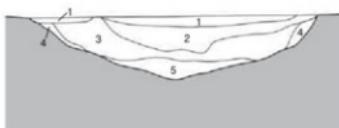
19.0m



1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂(マンガン沈着)
2. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂
- 25Y8/3 淡黄 シルト ローリング

SD03

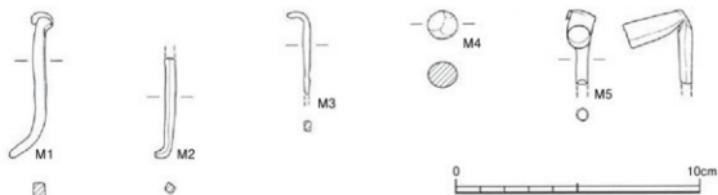
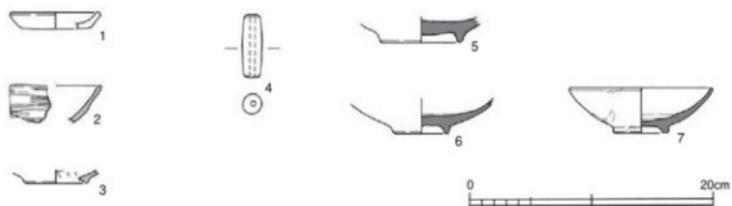
19.0m



1. 10YR6/1 褐灰 シルト質極細砂(マンガン・鉄分沈着、凹みに上層が堆積したもの)
2. 7.5YR5/1 褐灰 シルト(粗砂を少し含む)
3. 7.5YR6/1 褐灰 シルト
4. 7.5YR6/1 褐灰 シルト(粗砂・砂礫を含む)
5. 7.5YR6/1 褐灰 シルト
- 5G6/1 細灰 細～中砂のラミナ



A 1 地区



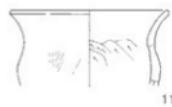
出土遺物(1)

A2地区

SH01



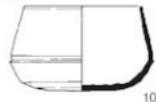
SD05



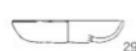
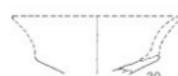
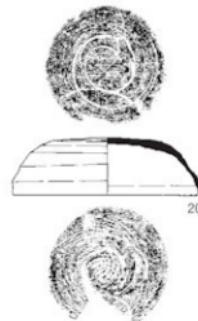
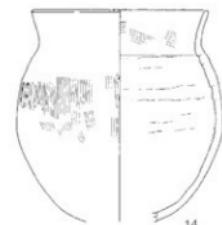
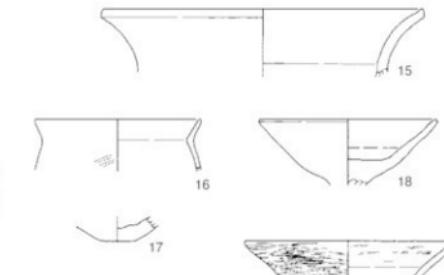
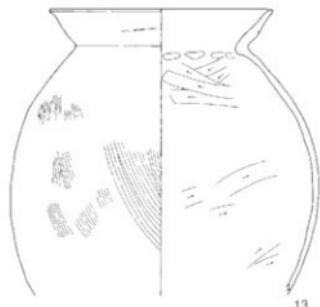
SH02



SX01

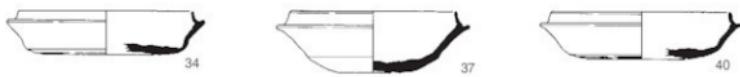
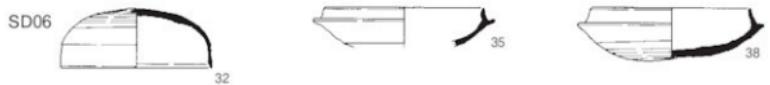


SD06

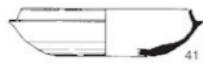


出土遗物(2)

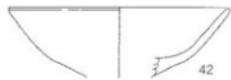
A2地区



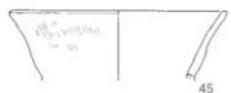
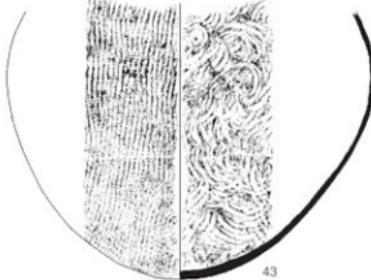
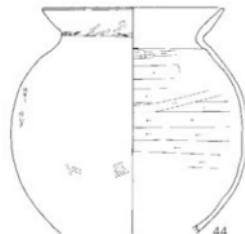
SD08



SD11



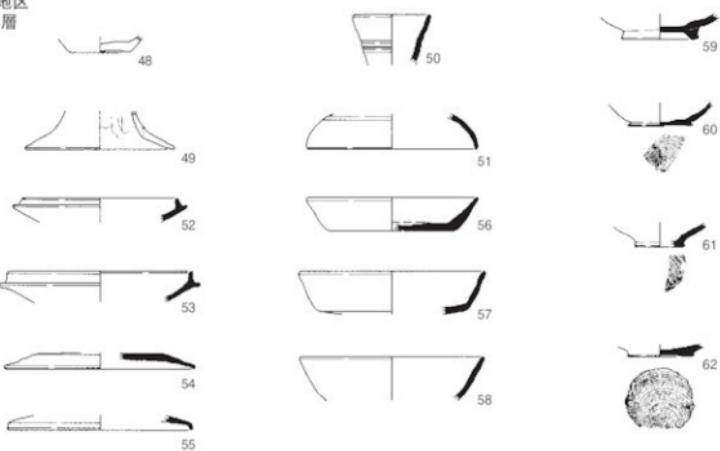
SD22



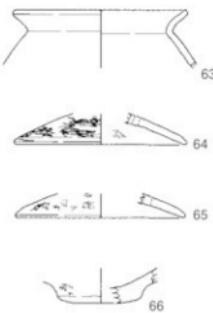
0 20cm

出土遺物(3)

A2地区
包含層



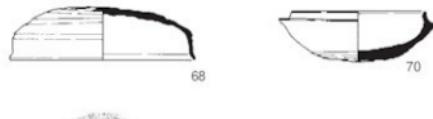
B地区
SB01



SD01



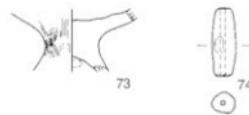
SD03

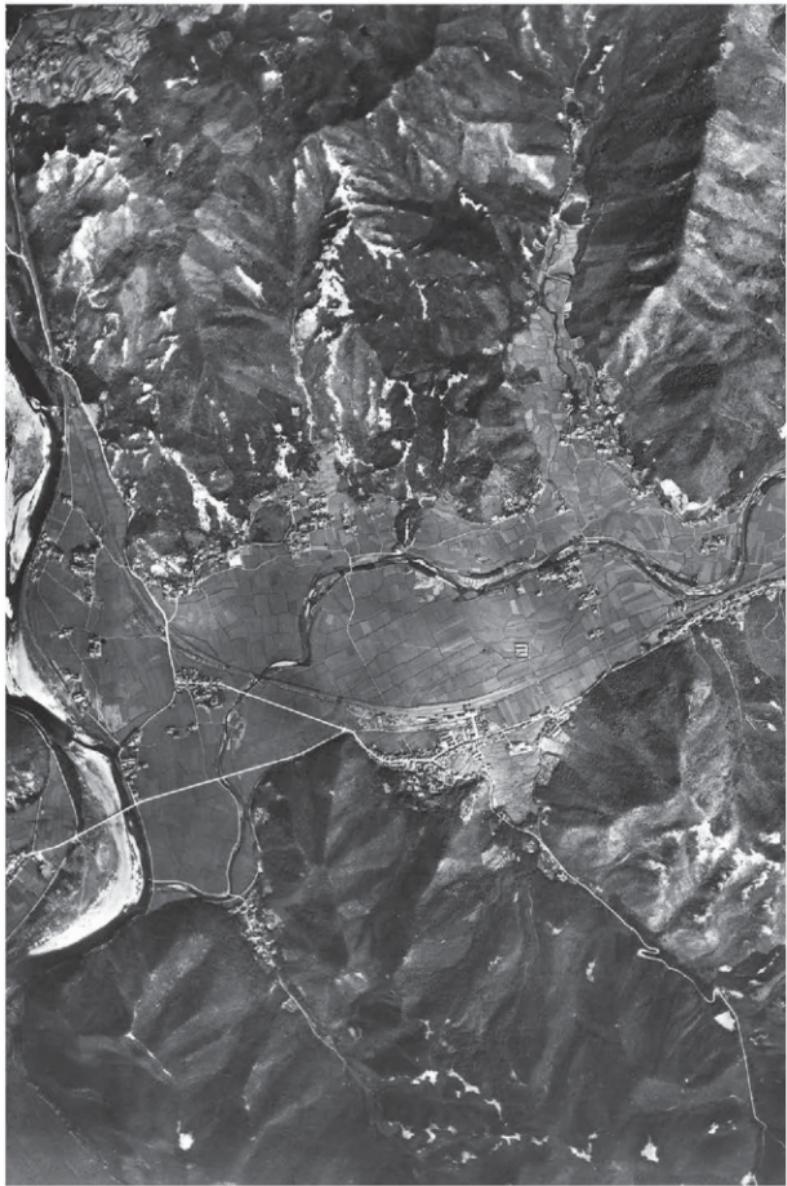


北落ち込み



包含層





遺跡周辺空中写真（1947年　米軍撮影）

写真図版 2



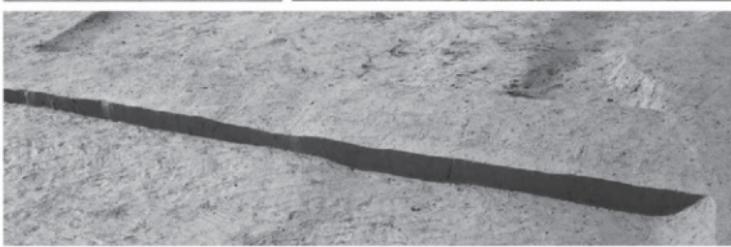
A 1 地区
SK05断面 (南から)



A 1 地区
左) SK06 (北から)
右) SK06断面 (南から)



A 1 地区
SX02断面 (南から)



A 1 地区
溝と現況畦畔 (南から)



写真図版 4





写真図版 6



A 1 地区
S D 121断面（南から）



A 1 地区
S D 129断面（南から）



A 1 地区
S D 174・176断面（南から）



A 1 地区
S D 184・186断面（南から）



A 1 地区
西壁断面



写真図版 8





A 2地区 全景①(西から)



A 2地区 全景②(東から)

写真図版10



A2地区
西半部①(西から)



A2地区
西半部②(東から)



A2地区
東半部(南西から)



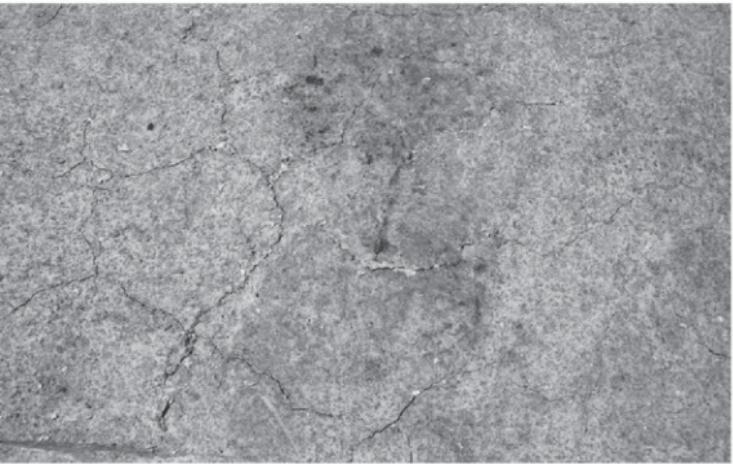
A 2地区
S H01検出状況（東から）



A 2地区
S H01断面（南から）



A 2地区
S H01完掘状況（南から）



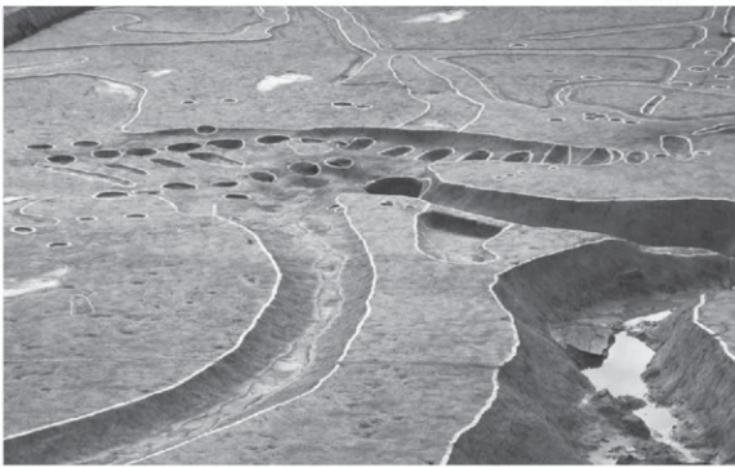
A 2 地区
S H01炭化物検出状況（東から）



A 2 地区
S H01炉（南から）



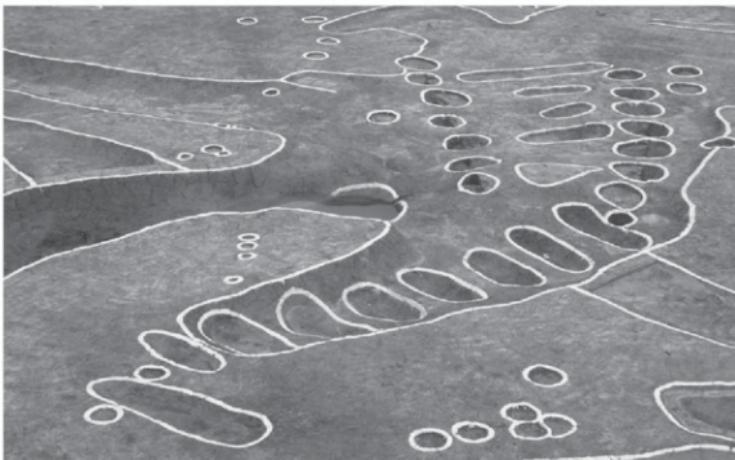
A 2 地区
左) S H02
炭化物検出状況（東から）
右) S H02
断面（南から）



A 2地区
祭祀遺構遠景（東から）



A 2地区
祭祀遺構①（西から）



A 2地区
祭祀遺構②（北から）



A2地区
祭祀遺構③（南西から）



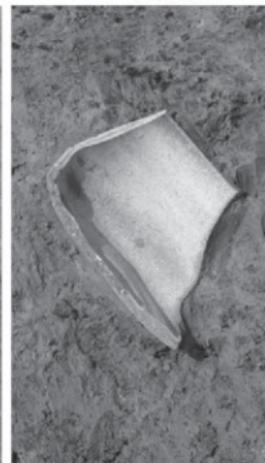
A2地区
祭祀遺構検出状況（西から）



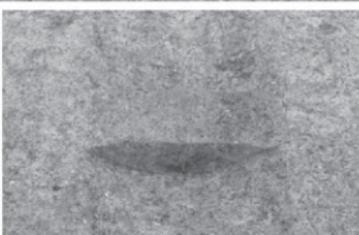
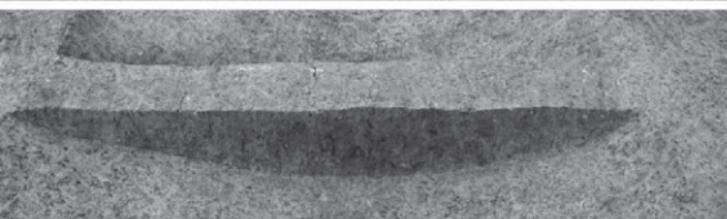
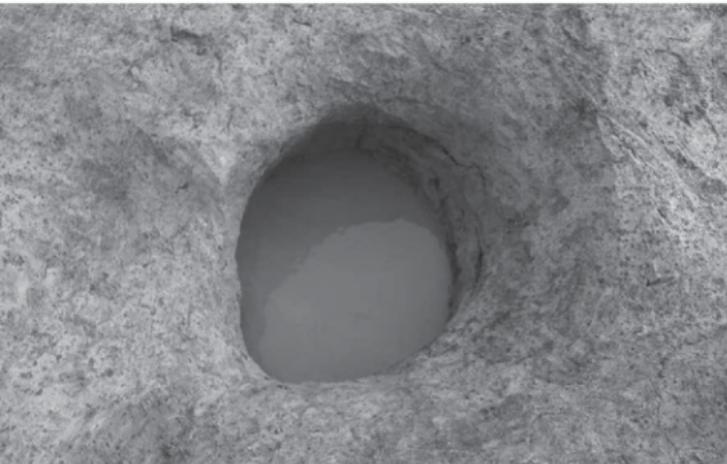
A2地区
祭祀遺構断面①（南から）



A2地区
祭祀遺構断面②（南から）



A 2地区
祭祀遺構P 2断面（南から）



A 2 地区
左) S D09断面
右) S D10断面



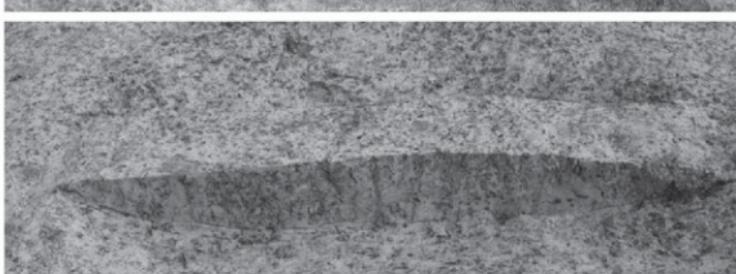
A 2地区
SK03断面 (南から)



A 2地区
SK04断面 (南西から)



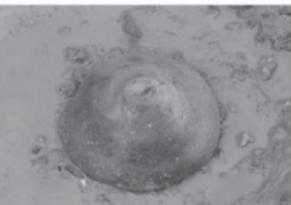
A 2地区
SK07断面 (西から)



A 2地区
SK08断面 (北西から)



A 2地区
SK09断面 (東から)





A 2地区
S D06 (南東から)



A 2地区
S D06東西断面 (南東から)



A 2地区
S D06南北断面 (南西から)



A 2 地区
S D 06 遺物出土状況



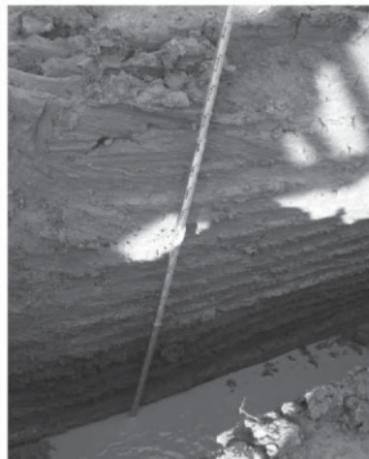
A 2地区
S D22 (北西から)

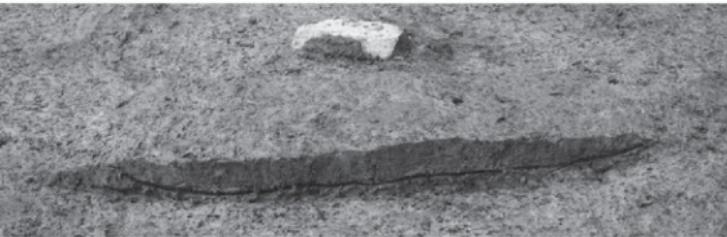


A 2地区
S D22断面 (西から)



A 2地区
左) S D22遺物出土状況
右) S D22断割面 (東から)

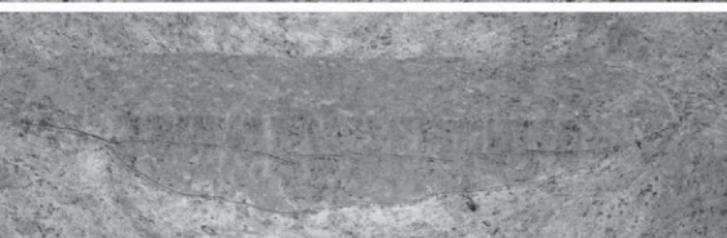




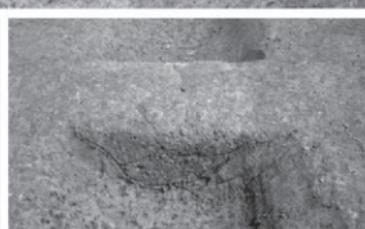
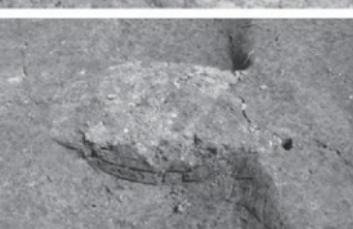
A 2 地区
S D01断面 (南から)



A 2 地区
S D02断面 (西から)



A 2 地区
S D03断面① (東から)



A 2 地区
左) S D13断面① (西から)
右) S D13断面② (西から)



A 2 地区
S D14断面 (南から)



A 2 地区
S D15断面 (南から)

A 2地区
S D16断面① (西から)



A 2地区
S D16断面② (西から)



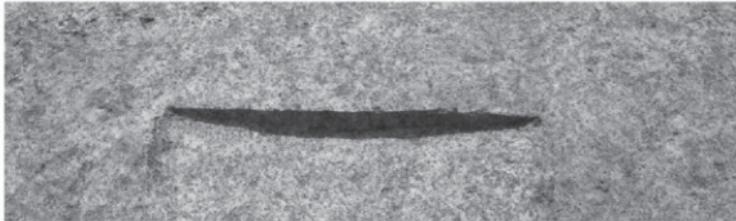
A 2地区
S D16断面③ (西から)



A 2地区
S D16断面④ (西から)

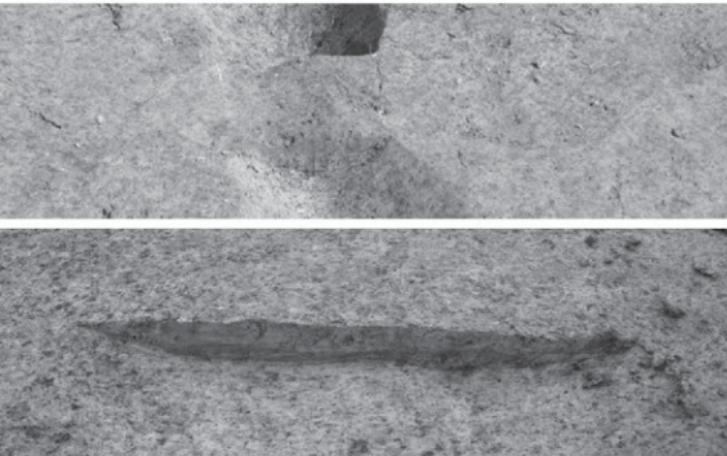


A 2地区
S D16断面⑤ (西から)



A 2地区
S D17断面 (南西から)





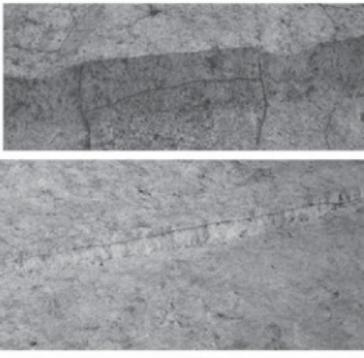
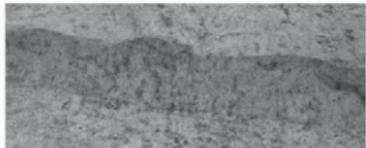
A 2地区
S D18断面 (西から)

A 2地区
S D20断面 (西から)

A 2地区
水田① (北西から)

A 2地区
水田② (南西から)

A 2 地区
水田畦畔
断面 (西から)



A 2 地区
水田断面 (西から)



A 1・A 2 地区間
畦畔断面① (北から)



A 1・A 2 地区間
畦畔断面② (南から)



A 2・B 地区間
畦畔断面 (北東から)



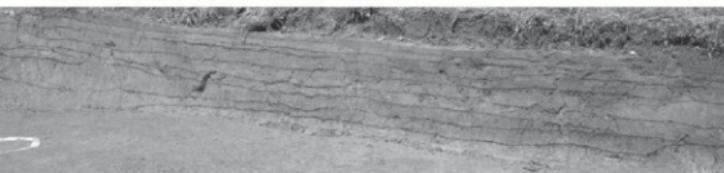
B地区
全景①（北から）



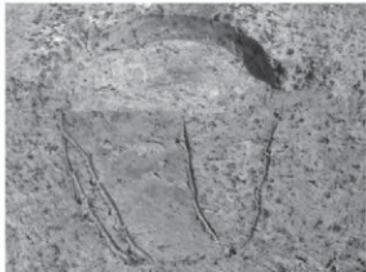
B地区
全景②（南西から）



B地区
東壁断面①（南西から）



B地区
東壁断面②（南西から）



B地区
左) S B01 P3
断割断面 (西から)
右) S B01 P4
断割断面 (西から)

B地区
左) S B01 P5
断割断面 (西から)
右) S B01 P6
断割断面 (西から)



B地区
S D01・02 (西から)



B地区
S D01
断面
遺物出土状況 (西から)



B地区
S D02断面 (西から)



B地区
S D04断面 (西から)



B地区
S D03・04 (西から)



B地区
S D03 (西から)

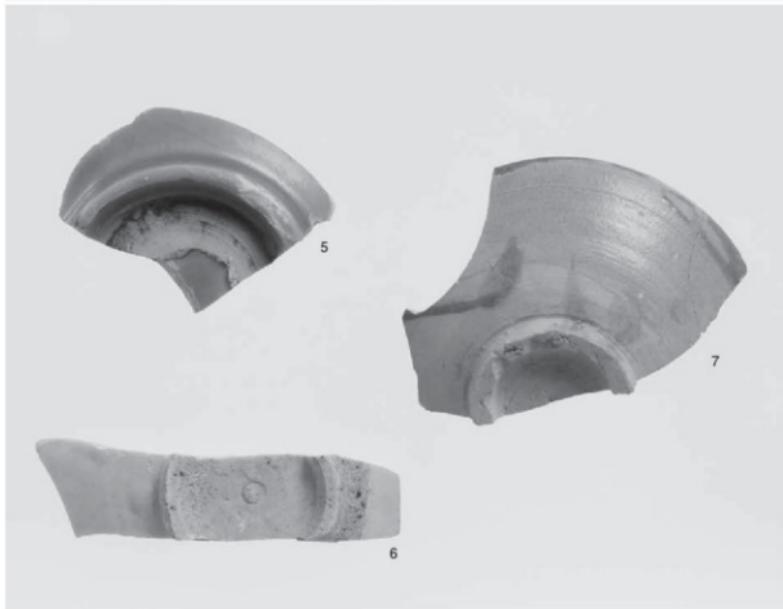
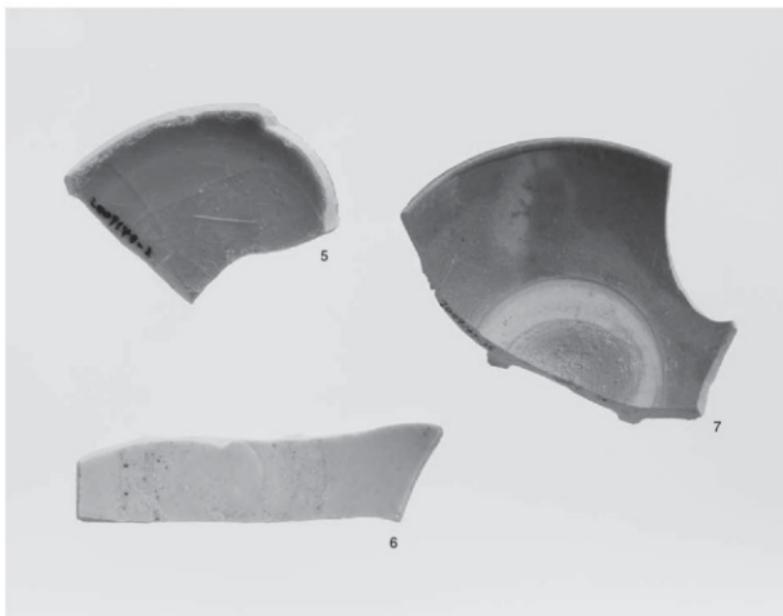


B地区
S D03断面 (西から)

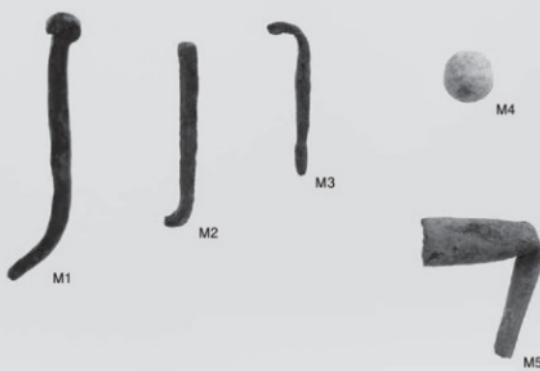


B地区
S D03遺物出土状況





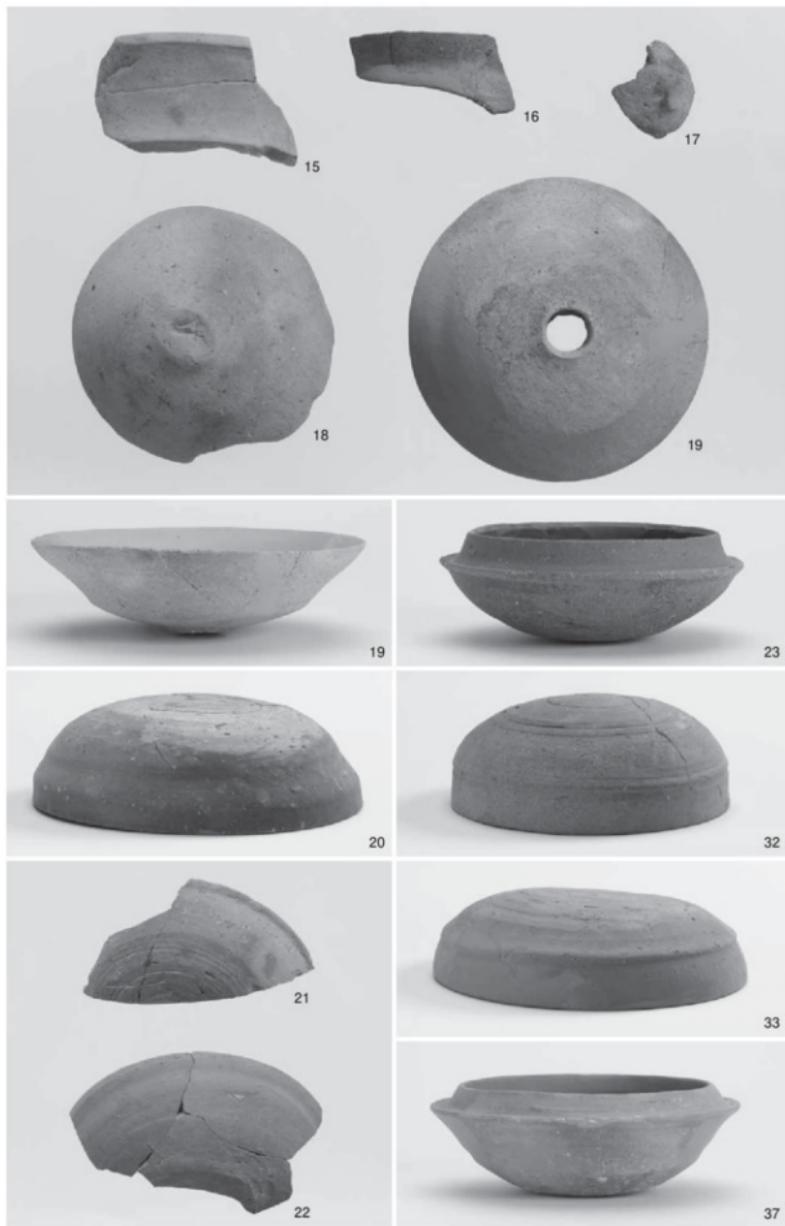
A 1 地区 出土遺物 (1)



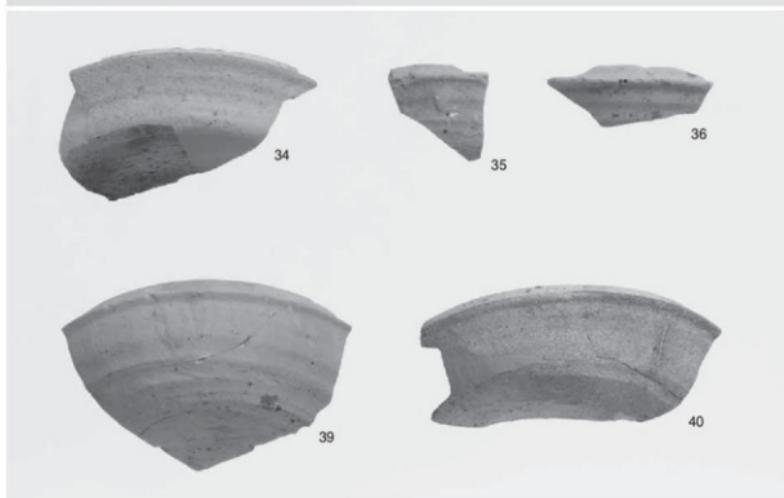
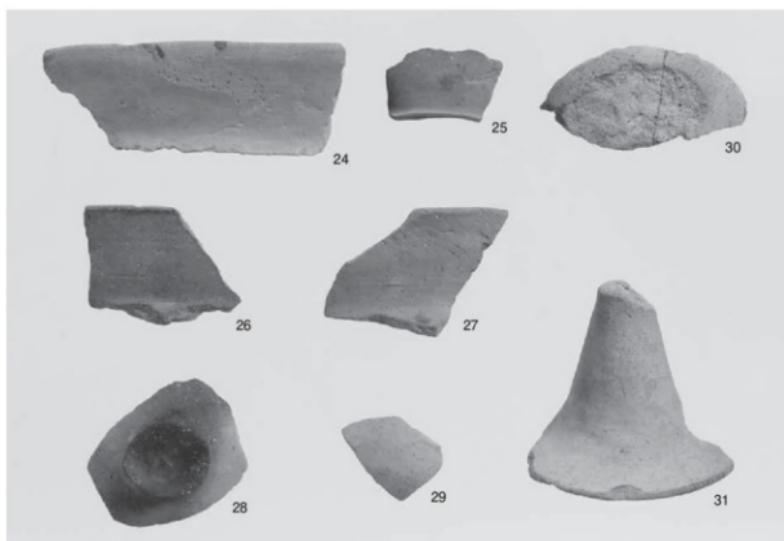
A 1 地区 出土遺物 (2)



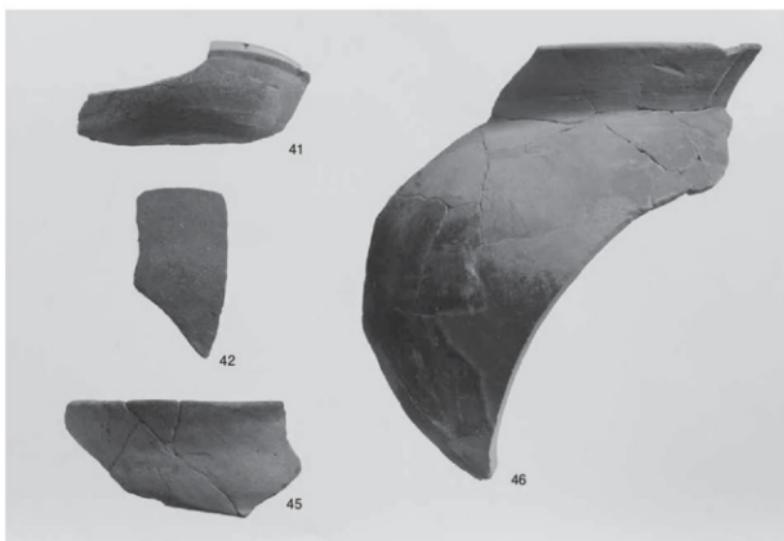
A 2 地区 出土遺物 (1)



A 2 地区 出土遺物 (2)

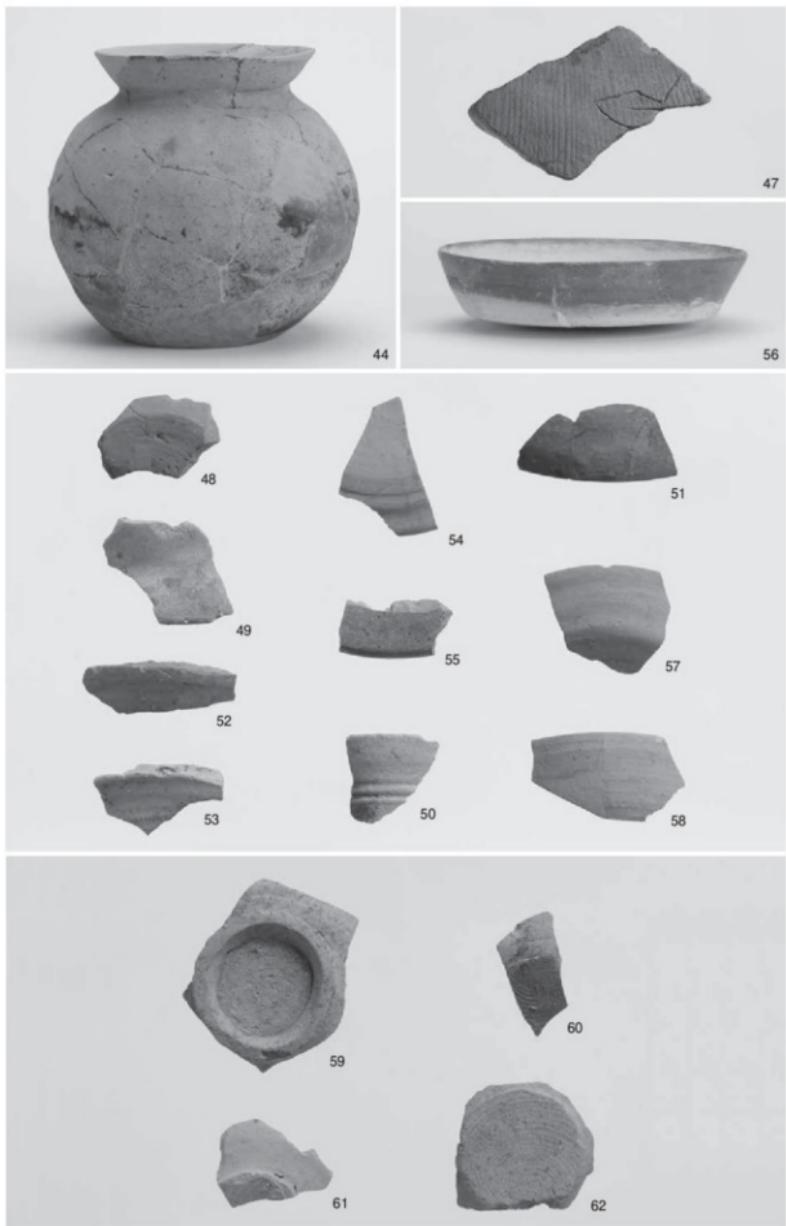


A 2 地区 出土遺物 (3)

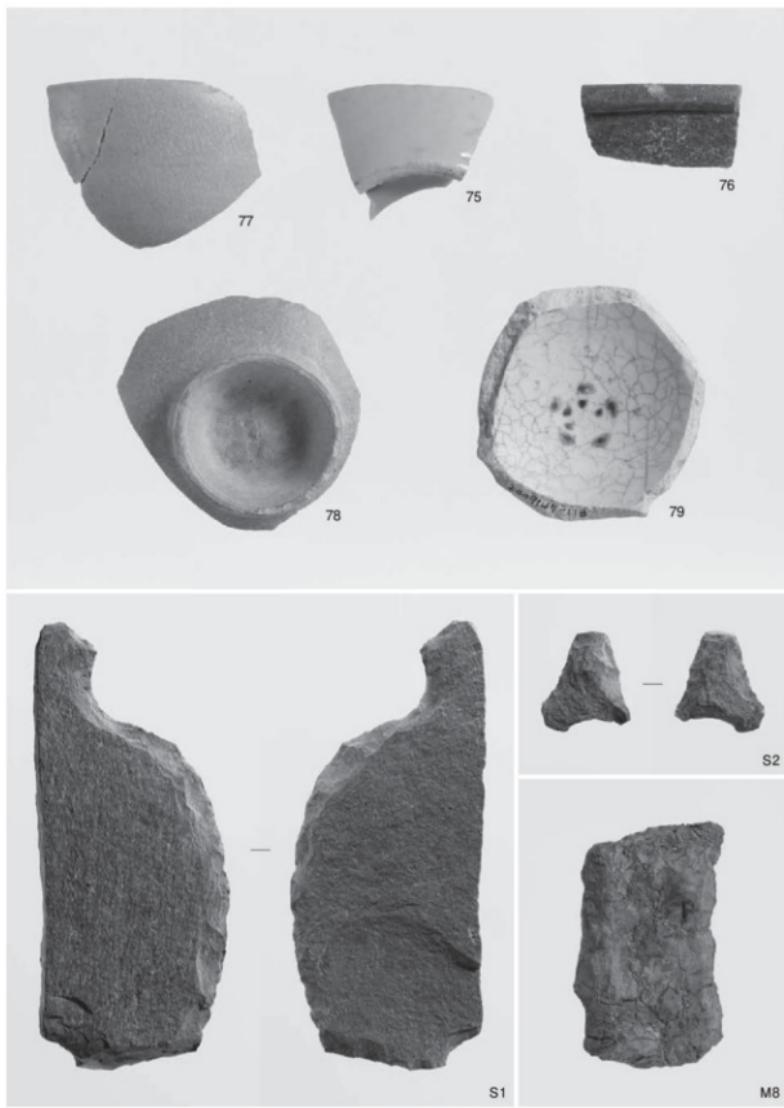


A 2 地区 出土遺物 (4)

43



A 2 地区 出土遺物 (5)



A2地区 出土遺物 (6)



B地区 出土遺物

兵庫県文化財調査報告 第457冊

赤穂市

有年原・クルミ遺跡

－一般国道2号相生有年道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成26（2014）年2月26日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社 神戸新聞総合印刷

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-5-7

赤穂市

有年原・クルミ遺跡

－一般国道2号相生有年道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成26（2014）年2月

兵庫県教育委員会



遺跡遠景（東から）



遺跡全景（北東から）



A 2地区 祭祀遺構（西から）



A 2地区 S D22 出土絵画土器



A 2 地区 S X01 出土遺物



A 2 地区 S D06 出土遺物



A 2 地区 S D22 出土遺物



B 地区 S D03 出土遺物

例　言

- 1 本書は、兵庫県赤穂市有年原に所在する有年原・クルミ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、一般国道2号相生有年道路事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 調査の推移
(発操作業)
本発掘調査 平成21年6月24日～平成21年10月14日
実施機関：兵庫県立考古博物館
工事請負：千種建設株式会社
(出土品整理作業)
平成25年6月21日～平成26年2月26日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 調査成果の測量は、座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 5 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 渡辺界と長濱誠司が担当した。編集は長濱が行った。
- 6 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 7 発掘調査にあたっては立命館大学青木哲哉氏に現地指導を受け、本報告書に玉稿を賜った。お礼を申し上げます。

本文目次

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 有年原・クルミ遺跡	1
第3節 発掘調査の経過	1
第4節 出土品整理作業の経過と体制	5
第2章 遺跡をとりまく環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の結果	
第1節 A 1 地区の調査	10
第2節 A 2 地区の調査	11
第3節 B 地区の調査	16
第4章 有年原・クルミ遺跡の地形環境	(青木哲哉) 21
第5章 まとめ	30
報告書抄録	32

挿図目次

第1図 遺跡の位置	v
第2図 調査地点位置図	2
第3図 周辺の遺跡	9
第4図 出土石器・金属器	19
第5図 調査区断面トレンチ位置図	20
第6図 調査区周辺の地形面区分図	22
第7図 調査区付近における微地形の分布	23
第8図 A 1 地区におけるトレンチ断面図（南北方向）	25
第9図 A 1 地区におけるトレンチ断面図（東西方向）	26
第10図 A 1 地区と A 2 地区間の大畦畔断面図	27
第11図 溝・畦畔の方向	31

表目次

第1表 出土土器法量表.....	18
第2表 出土金属器法量表.....	19
第3表 出土石器法量表.....	19

図版目次

図版1 調査区全体図
図版2 検出遺構と周辺地割
図版3 A1地区 全体図
図版4 A1地区 北壁断面図
図版5 A1地区 土坑
図版6 A1地区 溝（1）
図版7 A1地区 溝（2）
図版8 A2地区 全体図
図版9 A2地区 北壁断面図
図版10 A2地区 壁穴住居跡
図版11 A2地区 祭祀遺構
図版12 A2地区 祭祀遺構断面図（1）
図版13 A2地区 祭祀遺構断面図（2）
図版14 A2地区 土坑
図版15 A2地区 水田・畦畔
図版16 A2地区 溝（1）
図版17 A2地区 溝（2）
図版18 A2地区 溝（3）
図版19 B地区 全体図・東壁断面図
図版20 B地区 遺構
図版21 出土遺物（1）
図版22 出土遺物（2）
図版23 出土遺物（3）
図版24 出土遺物（4）

巻頭写真図版目次

巻頭図版1 遺跡遠景 遺跡全景
巻頭図版2 A2地区 祭祀遺構 A2地区 SD22出土絵画土器
巻頭図版3 A2地区 SX01出土遺物 A2地区 SD06出土遺物
巻頭図版4 A2地区 SD22出土遺物 B地区 SD03出土遺物

写真図版目次

- 写真図版1 遺跡周辺空中写真
- 写真図版2 A1地区全景 A1地区SK01・02断面 A1地区SK03断面 A1地区SK04断面
- 写真図版3 A1地区SK05断面 A1地区SK06 A1地区SK06断面 A1地区SX02断面 A1地区溝と現況畦畔
- 写真図版4 A1地区大畦畔 A1地区大畦畔と現況畦畔 A1地区大畦畔付近断面
- 写真図版5 A1地区SD11・12・13断面 A1地区SX01・SD27断面 A1地区SX03・SD27断面 A1地区SD29・30断面 A1地区SD66・67・82断面 A1地区SD120断面
- 写真図版6 A1地区SD121断面 A1地区SD129断面 A1地区SD174・176断面 A1地区SD184・186断面 A1地区西壁断面
- 写真図版7 A1地区東西断割トレンチ A1地区東西断割トレンチ断面① A1地区東西断割トレンチ断面②
- 写真図版8 A1地区南北断割トレンチ A1地区南北断割トレンチ断面① A1地区南北断割トレンチ断面②
- 写真図版9 A2地区全景① A2地区全景②
- 写真図版10 A2地区西半部① A2地区西半部② A2地区東半部
- 写真図版11 A2地区SH01検出状況 A2地区SH01断面 A2地区SH01完掘状況
- 写真図版12 A2地区SH01炭化物検出状況 A2地区SH01炉 A2地区SH02炭化物検出状況 A2地区SH02断割断面
- 写真図版13 A2地区祭祀遺構遠景 A2地区祭祀遺構① A2地区祭祀遺構②
- 写真図版14 A2地区祭祀遺構③ A2地区祭祀遺構検出状況 A2地区祭祀遺構断面① A2地区祭祀遺構②
- 写真図版15 A2地区祭祀遺構遺物出土状況 A2地区祭祀遺構柱穴断面 A2地区祭祀遺構P2断面
- 写真図版16 A2地区SE01 A2地区SE01断面 A2地区SD08断面 A2地区SD09断面 A2地区SD10断面
- 写真図版17 A2地区SK03断面 A2地区SK04断面 A2地区SK07断面 A2地区SK08断面 A2地区SK09断面
- 写真図版18 A2地区SD05 A2地区SD05断面① A2地区SD05断面② A2地区SD05遺物出土状況
- 写真図版19 A2地区SD06 A2地区SD06東西断面 A2地区SD06南北断面
- 写真図版20 A2地区SD06遺物出土状況
- 写真図版21 A2地区SD22 A2地区SD22断面 A2地区SD22遺物出土状況 A2地区SD22断割断面
- 写真図版22 A2地区SD01断面 A2地区SD02断面 A2地区SD03断面 A2地区SD13断面① A2地区SD13断面② A2地区SD14断面 A2地区SD15断面
- 写真図版23 A2地区SD16断面① A2地区SD16断面② A2地区SD16断面③ A2地区SD16断面④ A2地区SD16断面⑤ A2地区SD17断面

- 写真図版24 A 2 地区 S D18断面 A 2 地区 S D20断面 A 2 地区水田① A 2 地区水田②
- 写真図版25 A 2 地区水田畦畔断割断面 A 2 地区水田断面 A 1・A 2 地区間畦畔断割断面① A 1・
A 2 地区間畦畔断割断面② A 2・B 地区间畦畔断割断面
- 写真図版26 B 地区全景① B 地区全景② B 地区東壁断面① B 地区東壁断面②
- 写真図版27 B 地区 S B01 B 地区 S B01 P1断割断面 B 地区 S B01 P2断割断面 B 地区 S B01 P3
断割断面 B 地区 S B01 P4断割断面 B 地区 S B01 P5断割断面 B 地区 S B01 P6断割
断面
- 写真図版28 B 地区 S D01・02 B 地区 S D01断面・遺物出土状況 B 地区 S D02断面 B 地区 S D04
断面
- 写真図版29 B 地区 S D03・04 B 地区 S D03 B 地区 S D03断面 B 地区 S D03遺物出土状況
- 写真図版30 A 1 地区 出土遺物（1）
- 写真図版31 A 1 地区 出土遺物（2）
- 写真図版32 A 2 地区 出土遺物（1）
- 写真図版33 A 2 地区 出土遺物（2）
- 写真図版34 A 2 地区 出土遺物（3）
- 写真図版35 A 2 地区 出土遺物（4）
- 写真図版36 A 2 地区 出土遺物（5）
- 写真図版37 A 2 地区 出土遺物（6）
- 写真図版38 B 地区 出土遺物



第1図 遺跡の位置

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道2号は大阪市を起点に福岡県北九州市にいたる、近畿と中国・九州を結ぶ西日本の基幹道路である。兵庫県内は大阪湾・瀬戸内海の沿岸部を東西に通過し、明石市から岡山県境までの播磨地域は国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所が管理している。戦後この区間の沿線は市街地の拡大や産業発展により通行車両が急増し、渋滞や周辺の環境悪化が問題となり、車線拡幅やバイパスなどの整備が順次進められた。バイパスの終点となるたつの市以西は4車線拡幅が行われ、相生市までの区間が供用開始し、平成9年には国道に並行して高規格幹線道路である山陽自動車道が全通したが、大型車両の国道通行はなお多く、渋滞や騒音問題の解消には至っていない。

本報告に起因する一般国道2号相生有年道路は、国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所によって昭和60年度に相生市若狭野町若狭野～赤穂市東有年までの4.9kmが有年道路として事業化されたことに始まる。平成12年度には事業区間が相生市若狭野町鶴龜～若狭野町若狭野間3.7kmが追加され、相生有年道路として計8.6kmが事業化された。東側の相生市域より順次事業が進捗し、車道の4車線化、バイパス新設により円滑な交通の確保とともに歩道、遮音壁などの整備も行われ周辺の環境改善も図られる。事業の大半は現道の車線拡幅だが、赤穂市有年横尾付近は現道が集落内を通過していることから、現道西側に延長2.8kmのバイパスを新設する。平成21年には相生市内の区間の一部が供用開始し、さらに事業が西へ進捗することから、それに対応して埋蔵文化財の調査を行うことになった。

第2節 有年原・クルミ遺跡

有年原・クルミ遺跡は、赤穂市有年原、有年牟礼と有年横尾地区の境界付近にあたる有年原字クルミに位置する周知の遺跡である。遺跡付近の水田には条里地割が遺存している。

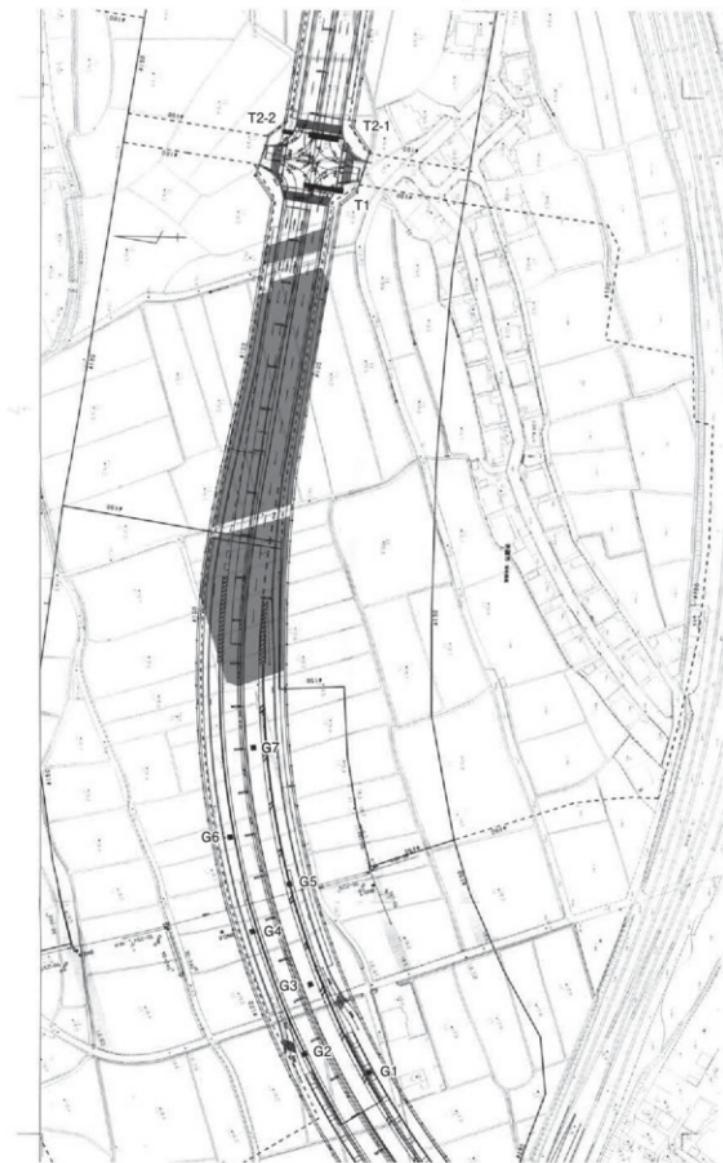
バイパス新設に関連してJR有年駅周辺の区画整理も行われ、これに伴う埋蔵文化財の調査は赤穂市教育委員会が行っている。矢野川南岸の平野部は遺跡の空白地帯であったが、区画整理事業の具体化に合わせて赤穂市教委が平成7年度に事業地内の分布調査を行い、対象地の広域に遺物が散布することが確認された。遺跡に対する範囲確認のための確認調査は、赤穂市教育委員会により平成9・10・15年度に実施した。

平成17年度にJR有年駅周辺の区画整理事業が具体化したことから、平成18年度に市道敷設箇所について、確認調査により調査範囲を絞り込んだ後2,600m²を対象に本発掘調査を開始し、以後継続的に調査を行っている。その結果、縄文時代後期、古墳時代初頭、中世の遺構を検出しているが、遺跡の大部分は生産域であったと推定される。また奈良時代の「奥津家」と書かれた墨書き器が出土し付近に古代役所の存在が推定される。近世以降は遺跡周辺は完全に水田となる。

第3節 発掘調査の経過

1. 分布調査

一般国道2号相生有年道路の埋蔵文化財の対応は、平成12年度に事業が具体化したことに始まる。平成12・13年度に用地取得などに合わせて相生市内における事業地内の分布調査を部分的に実施したが、事業地全域を対象とした分布調査は平成14年度に実施し、事業対象地の遺物の散布状況や地形観察など



第2図 調査地点位置図

を行った。この結果、相生市域では地形観察などから集落の存在を想定した（No.1 地点）。赤穂市域では事業対象地が千種川東岸は有年牟礼・井田、クルミ遺跡（No.2 地点）、西岸は東有年・沖田、西有年遠古殿遺跡（No.3 地点）の周知の遺跡に重複することが判明した。

平成14年度

遺跡調査番号：2002183

調査期間：平成14年12月11日

調査機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者：甲斐昭光・高瀬一嘉

調査面積：239,400m²

相生市域については、No.1 地点について平成18・19年度に確認調査を実施し、遺構・遺物を検出した。平成20年度に若狭野町所在の西柄遺跡、宮ノ前遺跡の本発掘調査を実施し、本報告書と同時進行で出土品整理作業を行った。

赤穂市域のうち、千種川東岸（No.2 地点）については、相生有年道路に伴う分布調査の時点では有年原・クルミ遺跡、有年牟礼・井田遺跡として周知され、赤穂市教育委員会が本事業地を含め区画整理に伴う確認調査を行っている。その後隣接地で市道部分の本発掘調査が行われ、本事業対象地内も遺構が広がる可能性が高いことから、両遺跡ともに市教委の調査成果をもとに本発掘調査を行うこととなった。東側に隣接する有年牟礼・井田遺跡は、平成21～23年度に4次にわたって本発掘調査を実施した。

有年原・クルミ遺跡についての確認調査は、西側について、遺跡の範囲を確認する調査を本発掘調査前に実施した。また本発掘調査の結果、東側に遺構が広がる可能性があったため、遺構の広がりを確認するため平成23年度に有年牟礼・井田遺跡の本発掘調査と並行してトレンチによる調査を実施した。

1. 確認調査

平成20年度

遺跡調査番号：2008182

調査期間：平成21年2月2日～3日

調査機関：兵庫県立考古博物館

調査担当者：別府洋二

調査面積：70m²

概要

本発掘調査対象範囲の西側について、遺構面の広がりを確認するため、グリッドによる調査を行った。G 1・3・4・5・7では、地表下約0.7mで旧地表面が検出されたが、面は安定せず遺構も確認できなかった。その下層は粘土・シルト・細砂となり、後背湿地状の堆積となる。G 4では流木などが含まれる有機質層が検出された。

G 2・6では、地表下約0.7mで基盤層である黄褐色粘土層が検出されたが、遺構は検出できなかった。G 2では基盤層が南側へ落ち込む境界部を検出し、落ち込みに堆積した上層から加工木材が出土してい

る。土器は出土していないが、中世の耕作土あるいは流路の一部と推定される。遺物の出土は多くは旧耕作土内やその直下の整地層からで、明瞭な遺物包含層は存在していない。

調査の結果、調査範囲内では北端の一部にのみ微高地が残存し、遺跡本体はさらに北側、あるいは東側に立地し、本調査範囲までは広がっていないことが明らかとなった。

平成23年度

遺跡調査番号：2011317

調査面積：80m²

調査機関：兵庫県立考古博物館

調査担当者：岸本一宏・仁尾一人

調査期間：平成24年1月18日～3月5日

概要

本発掘調査B地区の東側20～50mの範囲についてトレンチにより、遺構および遺構面の有無を確認するための調査を行った。

T 1 では耕土・盛土・床土直下でオリーブ灰色層を検出した。この層は粘質で軟質であり、上面で遺構は検出できなかった。また南端に近い位置で明黄褐色の基盤層が北側に深く落ち込んでいることが確認できた。基盤層が高位で残存する範囲は幅1.5m足らずで、その南側も深く落ち込んでいる。

T 2 - 1 もトレンチ 1 同様に床土下部にオリーブ灰色層が堆積する。さらにその下層は砂層や砂礫層となり、遺構面となりうる土層は認められず遺構・遺物も検出できなかった。これらの堆積層は矢野川旧河道部分の堆積層にあたると判断され、トレンチ 1 の深掘りでも同様の堆積状況が確認できた。T 2 - 2 も同様の堆積をみせ、矢野川旧河道堆積層がさらに深く堆積し、遺構・遺物は検出されなかった。

調査結果から、今回確認調査を行った範囲は、B地区で存在した遺構面となる基盤層は矢野川の氾濫によって削り取られたものと判断した。したがって確認調査を行った範囲以東については、遺構面は統かないことが明らかとなった。

2. 本発掘調査

赤穂市教育委員会による確認調査、および隣接地での本発掘調査の成果に基づいて本事業地内の調査対象地を決定した。また、平成20年度実施の確認調査により西側の調査対象範囲を絞り込んだ。

発掘調査工事は千種建設株式会社、空中写真測量は株式会社エイト日本技術開発に委託した。本発掘調査にあたっては、国土交通省のほか区画整理を行う赤穂市とも調整を行い進めた。

調査は残土仮置きの都合でA 1 地区、B 地区、A 2 地区の順で進めた。水田耕作土を除去したのち、遺物包含層まで機械で掘削し、その後入力により遺構面までの掘削と精査を行った。遺構削除終了後に空中写真測量により調査区の図化を行った。なお空中写真測量は2回実施した。

調査の最後に立命館大学青木哲哉氏により地形形成の調査指導をうけたほか、現況畦畔の断割り調査を行い土地利用の一端の解明に努めた。

また調査終盤の10月3日には地元住民を対象とした現地説明会を行い、多くの参加を得た。

遺跡調査番号 2009147

調査期間 平成21年6月24日～10月14日

調査機関 兵庫県立考古博物館

調査担当者 渡辺 昇・長濱誠司

調査面積 6,816m²

第4節 出土品整理作業の経過と体制

有年原・クルミ遺跡についての出土品整理作業は、本発掘調査時に現地において、水洗、ネーミングを行ったことに始まる。

本格的な作業は、平成25年度に実施した。兵庫県立考古博物館魚住分館にて水洗、ネーミング作業を行った後、出土遺物を兵庫県立考古博物館に搬入し、接合・補強、実測、復元、写真撮影、図補正、トレース、レイアウトを経て報告書刊行まで諸作業を単年度で実施した。

遺物写真撮影は株式会社クレアチオに委託して行った。また遺跡出土の炭化物について、株式会社加速器分析研究所に委託して放射性炭素年代（AMS測定）を行い、その成果は遺構原稿に反映した。

工程管理担当：長濱誠司・深江英憲

保存処理担当：岡本一秀

非常勤嘱託員等

水洗・ネーミング

今村直子・小野潤子・藤尾裕子・松本恵梨子

接合・補強 復元

荻野麻衣・島村順子・佐々木愛・菅生真理子・上田紗耶香

実測 図補正 トレース 写真整理 レイアウト

友久伸子・古谷章子・川村由紀・坂東知奈

保存処理

桂 昭子・梶原奈津子

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

赤穂市は兵庫県南西端にあたり、西は岡山県に接する。南は瀬戸内海（播磨灘）に面し、その海岸線は瀬戸内海国立公園の一部に指定された景勝地である。人口は50,702人（平成25年1月末現在）を数える。製塩と赤穂義士で全国的に知られる。

かつては北の赤穂郡上郡町、東の相生市とともに赤穂郡を構成していたが、1951年に赤穂町・坂越町、高雄村が合併し市制を施行、1955年に有年原・クルミ遺跡が所在する有年村を編入し、市域北部が形成される。さらに1963年には旧備前国の一である岡山県福河村福浦地区を編入してほぼ現在の市域が形成される。市域は千種川の下流域にあたり南北に貫流する。市街地は河口の三角州上に所在するが、河口付近の陸地化は中世以降に進み近世の赤穂城城下町から発達したものである。

千種川は鳥取・岡山県境江浪峠に源を発し、岡山県境に沿って播磨灘まで約72kmを南流する。流域は谷幅が狭く下流域を除くと平野がほとんど発達していない。

有年地区は千種川をはさんで東西にのびる谷であり、東から矢野川、西から長谷川が合流し、千種川と両支流沿いに谷平野が形成される。東西に開けた谷地形から、有年は中世以降の山陽道が通過し、現在の国道2号に継続される。近世には宿駅が営まれる。海岸部の市街地とは山塊によって隔絶され、峰道、千種川を介して結ばれている。相生駅を起点とする国鉄赤穂線が開通するまでは有年と市街地を赤穂鉄道が結んでいた。また千種川を介して内陸部や日本海側の因幡国との南北の交通も発達する。近代に入ると播磨国境の山岳越えの必要から山陽鉄道が有年を東西に通過することとなり、有年駅が開設される。その後山陽鉄道は国有化され山陽本線となる。また市域を山陽自動車道が通過し、市街地西側に赤穂インターチェンジが設置される。

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代

旧石器時代まで確実にさかのぼる遺跡は不明である。縄文時代に入ると千種川西岸に所在する遺跡で生活の痕跡が認められる。馬路池遺跡で縄文時代早期の石礫、ナイフ形石器が採集される。上音生遺跡では縄文後期の土器が出土し、東有年・沖田遺跡では縄文晚期の土坑を検出している。これら遺跡の付近に生活の跡があると推定される。その後弥生時代前期までは遺跡の空白期間となっている。

弥生時代

この時期の遺跡は有年付近に顕著である。有年原・田中遺跡は有年地区では最古の集落であり中期前葉以降の土器が出土する。東有年・沖田遺跡は市内最大の弥生集落であり中期中葉の円形周溝墓、後期の大型住居を検出する。両遺跡は千種川を挟んで位置し、拠点的な集落として後期まで存続する。

弥生時代中期後半になると遺跡増加し、上記遺跡のほかに有年牛込・山田、西有年・垣内田遺跡など有年地区各所で集落が形成される。これらの中には規模が縮小しつつも後期まで存続するものがある。東有年・沖田遺跡は住居数棟に1つ大型住居で構成される集落構成であり後期後半から古墳時代初頭にかけて讃岐、山陰、吉備地方の土器が出土している。

塚山古墳群付近では弥生時代中期の土器出土し、千種川西岸の野田遺跡でも中期後葉の遺物が散布す

る。付近では山裾などで中期の遺物が採集されており集落の存在が推定される。また野田遺跡の背後の尾根上の所在する精谷山遺跡からは土器棺と考えられる大型の壺が出土しており、山裾に展開する集落の墓域の可能性がある。若狭野地区的奥ノ山遺跡、野々宮山遺跡、下土井城山遺跡でも丘陵頂部や南斜面で弥生中期後半の土器を採集されている。調査例はないものの、遺跡の立地からいわゆる高地性集落が存在するかもしれない。

後期に入ると大型の墳丘墓がこの地域にみられる。有原・田中遺跡では2基の円形周溝墓を検出し、装飾器台などが出土する。このうち1号墳丘墓は突出部と陸橋部、貼石をもつ。有年牟礼・山田遺跡では弥生末～古墳初頭の方形周溝墓を検出している。周溝内から出土した土器は他地域からの搬入品。奥山遺跡では小形彷彿円行花文鏡が出土し、木虎谷古墳群の中に当該期とみられる箱式石棺がある。

古墳時代

初期の前方後円墳は正福寺北谷田古墳、中山13号墳がある。三角縁神獣鏡などの副葬品が出土した西野山3号墳は前方後方墳の可能性が指摘される。これらはいずれも上郡町高田地区に所在し、当時の政治的中心がこの地域であったと考えられる。矢野川流域では前方後円墳の大瀧山1号墳があるものの、有年地区では箱式石棺を埋葬施設とし、鉄鎌が出土した津村古墳が知られるのみで前期の前方後円墳は確認されていない。

中期古墳としては蟻無山古墳群があり3基の古墳で構成される。1号墳は丘陵頂部の自然地形を利用して築造された造出し付帆立貝形古墳で、全長52mの千種川流域最大の中期古墳である。初期須恵器や円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が採集される。この時期に入って有年地区に所在した氏族の台頭がうかがえる。奥山古墳群は中期古墳4基が山頂から斜面にかけて分布し、円筒埴輪のほか銅留短甲が出土している。上郡町高田地区では前期に引き続いて中期に入っても造墓活動が続く。この時期の古墳として円筒埴輪、楕形埴輪が採集された中山1号墳、円筒埴輪が採集された西野山7号墳がある。

有年地区北側の山裾には後期古墳が密集する。3支群51基で構成される塚山古墳群など100基以上の古墳が確認されている。その大半は横穴式石室であるが、石棚を有する木虎谷2号墳、玄室内に間仕切りをもつ塚山1～6号墳、奥門、玄門部をもつ野田2号墳など特異な形態をもつ横穴式石室があり、これらは県指定史跡となる。若狭野古墳は古墳時代末の方墳である。墳丘は3段築かれ、上・中段には外護列石が巡る。上郡町与井1号墳は大型の石室を埋葬施設とする。東有年・沖田遺跡では削平された円墳3基が集落に隣接して検出される。

揖保郡から赤穂郡にかけて古墳時代から平安時代の須恵器窯跡が200基程度分布し、相生窯址群を構成する。相生窯址群では5世紀末～6世紀初頭には東部の揖保郡を中心に須恵器生産が開始される。しかし実態不明ながら有年付近には、正福寺窯跡や奥山田窯跡があり、6世紀以降須恵器生産を行っている可能性がある。また有原・田中遺跡では旧河道内から韓式系土器や初期須恵器が出土しており、その中には焼けひずみのある須恵器があることから付近に未知の須恵器窯跡が所在している可能性が指摘されている。

集落遺跡としては、有年牟礼・山田遺跡では古墳時代の掘立柱建物、有年牟礼・井田遺跡で鍛冶工房跡が検出される。

古代

有年原・クルミ遺跡の所在する赤穂郡は播磨国に属するが『播磨国風土記』は赤穂郡の記載を欠き、郡内の状況は明らかにしえない。平城宮出土木簡にある「赤穂郡大原郷」は有年地区に比定する説が有力であり、この木簡に記された人名、有年牛札・山田遺跡出土の「秦」と刻書された須恵器片と関連づけて有年地域に渡来系氏族の存在を物語る。

古代山陽道は北側の上郡町域を通過し、山陽道に沿う上郡町高田地区には与位庵寺、赤穂郡衙推定地である与位遺跡があり、交通の要衝であるとともに赤穂郡の中心であった。与位庵寺は7世紀後葉創建で塔基壇が調査される。寺院に隣接して瓦を供給した与位瓦窯跡ある。古代山陽道沿いに所在する神明寺遺跡は高田駅家の有力な推定地であるが、塔心礎や礎石が検出されたことから寺院跡の可能性が高く、その東側の高田宿遺跡を高田駅家跡とする指摘もある。

相生窯址群は奈良時代までは生産の主体が東部にあるが、西部の西後明地区にも範囲が拡大する。平安時代に入ると生産は入野地区、さらに緑ヶ丘地区などの西部に移り最盛期をむかえる。奥山田窯跡でも奈良・平安時代まで須恵器生産を行なっている可能性がある。

中近世

律令体制の崩壊とともに山陽道は荒廃するが、中世以降も畿内と中国・九州を結ぶ主要街道として整備され、近世には有年地区を近世山陽道（西国街道）が通過し、有年に宿駅が設置される。

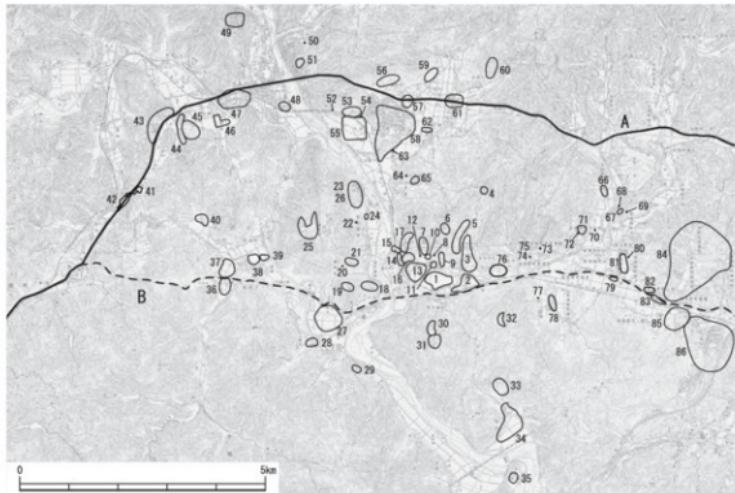
街道や千種川を見下ろす山頂に有年山城、鍋子城、鶴ヶ堂城、高野須城、後藤陣山城などの山城が築かれる。有年牛札・山田遺跡では発掘調査により中世城館が確認される。山岳寺院は黒沢山光明寺、医王山駿行寺などがある。黒沢山光明寺は調査で塔跡を検出している。

この時期の集落はいくつかの遺跡で検出されるが、特記すべきものとして、東有年・沖田遺跡では大型建物、西有年往来南遺跡では鍛冶遺構を検出している。

参考文献

赤穂市教育委員会『有年原・クルミ遺跡発掘調査報告書－有年土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1－』赤穂市文化財調査報告書69 2008年

赤穂市教育委員会『有年原・クルミ遺跡発掘調査報告書－有年土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3－』赤穂市文化財調査報告書76 2013年



1. 有年原・クルミ遺跡
2. 有年半礼・井田遺跡
3. 有年半礼・山田遺跡
4. 山田奥窓跡
5. 砧山古墳群
6. 奥山田古墳群
7. 懸針谷古墳群
8. 藤村古墳
9. ハトカ古墳群
10. 有年原・北山遺跡
11. 有年原・北岳遺跡
12. 木虎谷古墳群
13. 有年原・田中遺跡
14. 蟻ヶ山古墳群
15. 玉掘古墳群
16. 奥山古墳群
17. 北原古墳群
18. 放生山古墳群
19. 有年山城跡
20. 三軒家遺跡
21. 後藤陣山城跡
22. 稲谷山遺跡
23. 舞田古墳群
24. 上所山田遺跡
25. 黒沢山光明寺
26. 野田遺跡
27. 東有年・沖田遺跡
28. 上曾生遺跡
29. 鍋子城跡
30. 桶ヶ堂城跡
31. 医王山駿行寺跡
32. 高野須城跡
33. 周世宮裏山古墳群
34. 周世入相遺跡
35. 高雄・根木遺跡
36. 西有年・往来南遺跡
37. 西有年・長根遺跡
38. 西有年・垣内田遺跡
39. 西有年・畠田遺跡
40. 馬路池遺跡
41. 落地板坂遺跡
42. 落地八反坪遺跡
43. 飯坂古墳群
44. 井の端古墳群
45. 大酒古墳群
46. 山野里大塚遺跡
47. 山野里宿遺跡
48. 竹万宮ノ前遺跡
49. 跃山城跡
50. 丸尾古墳
51. 柏原城
52. 舞井ノ井塚
53. 舞井魔寺
54. 舞井瓦窑址
55. 舞井遺跡
56. 神明寺古墳群
57. 神明寺遺跡
58. 西野山・中山古墳群
59. 宇治山古墳群
60. 佐用谷古墳群
61. 高田宿遺跡
62. 梶ノ木遺跡
63. 中山真窓跡
64. 正福寺北谷田古墳
65. 正福寺窓跡
66. 下土井山崎山古墳群
67. 下土井坡
68. 下土井城山古墳・寺田城の下古墳
69. 下土井城山遺跡
70. 下土井道路
71. 大避山古墳群
72. 奥の山遺跡
73. 若狭野古墳
74. 若狭野陣屋
75. 若狭野廢寺遺跡
76. 荒神山古墳群
77. 松崎瓦窯址
78. 雨内古墳群
79. 宮ノ前遺跡
80. 野々宮山古墳群
81. 野々宮山古墳群
82. 上松古墳群
83. 西柄遺跡
84. 相生窓跡群 西後明地区
85. 相生窓跡群 入野地区
86. 相生窓跡群 緑ヶ丘地区
- A . 古代山陽道
B . 近世山陽道

第3章 調査の結果

第1節 A 1 地区の調査

1. 概要

A 1 地区は調査区の西半部にあたり、東側に A 2 地区が所在する。A 2 地区とは里道によって隔てられる。調査区は長さ約70m、幅約40m、面積約2,400m²を測り、A 2 地区に次ぐ面積である。

本調査区の基本層序は、現耕土以下旧耕土層と鉄分が沈着した旧底土層が互層となり、複数面の水田面が確認できる。基盤層は東端付近で検出したのみであり、それ以西では全く確認していない。したがって基盤層は本調査区東端付近から西、あるいは北西方向に急激に落ち込んでいることが考えられ、水田化される以前は、ほぼ調査区全域が隣接地や A 2 地区で検出された旧河道にあたっていたものと考えられる。

検出した遺構は、畦畔、耕作痕など水田に伴うもののみであり、豊穴住居跡や掘立柱建物跡などの生活の痕跡は全く認められなかった。したがって本調査区は隣接する集落の生産域として利用されていたものと考えている。

2. 遺構

土坑（図版5 写真図版2・3）

S K01

平面形は東西方向に主軸をもつ長楕円形。長さ2.5m、幅70cm、検出面からの深さ10cmである。断面形は皿状を呈する。

S K02

平面形は東西方向に主軸をもつ長楕円形。長さ2.5m、幅90cm、検出面からの深さ10cmである。断面形は皿状を呈する。

S K03

平面形は南北方向に主軸をもつ長楕円形。長さ80cm、幅40cm、検出面からの深さは30cmである。断面形はU字状を呈する。

S K04

平面形は南北方向に主軸をもつ不整な楕円形を呈する。長さ2.6m、幅1.4m、検出面からの深さ15cmである。断面形は皿状を呈する。

S K05

平面形は南北方向に主軸をもつ長楕円形。長さ2.6m、幅1.1m、検出面からの深さ10cmである。断面形は皿状を呈する。

S K06

調査区東端で検出した。大畦畔と重複し、本遺構が後出す。平面形は南北方向に主軸をもつ長楕円形を呈する。長さ3.0m、幅65cm、検出面からの深さ15cmである。断面形は逆台形を呈する。

大畦畔（写真図版4）

調査区東端で検出した。南北方向にのびる。現大畦畔と平行する。その方向はN15°W前後を示す。

溝（図版6・7 写真図版5・6）

南東半部を除く調査区のはば全域で検出した。形状などから耕作痕と考える。直線的に南北方向にのび、N17°Wの偏りを示す。これは大畦畔や現水田に伴う暗渠の方向に近似している。なおこの溝に対応する水田畦畔は検出していない。

3. 出土遺物（図版21 写真図版30・31）

大畦畔出土遺物

1は土師器小皿である。2、3は瓦器碗である。2は口縁部のみ残存し横方向の暗文がみられる。3は底部のみ残存する。低い断面三角形の高台がつく。

包含層出土遺物

4は土師質の有孔土錐である。5は青磁碗底部である。6は白磁碗底部で底部を輪状に釉ハギする。M8は施釉陶器皿である。内面に施釉し、底部を輪状に釉ハギする。

M1～3は鉄釘で断面は4～6mmの方形を呈する。M4は鉄砲玉で径約1.1cm、重さ8.1g。M5は煙管吸口である。M6・7は銅錢で「寛永通寶」である。M6は完存するが、M7は左部を欠く。

第2節 A2地区の調査

1. 概要

調査面積は幅約35m、長さ120mの4,100m²と広い調査区である。他地区同様に調査前の地目は水田で矢野川の氾濫原・低地である。農作業に必要な里道があることから、A1地区・B地区と分かれている。

基本層序は、A1地区と同様に現耕土以下旧耕土層と鉄分が沈着した旧床土層が互層となり、ほぼ全面にわたり複数面の水田面であったことが確認できる。A1地区東端で確認できた黄褐色を呈する基盤層はほぼ全域で確認できた。基盤層は南東側に高まり、南東隅付近ではほぼ現耕土直下で基盤層を検出している。

調査区西半の遺構はA1地区と同じ水田に限られている。東半では堅穴住居跡・旧河道・溝・祭祀遺構が水田とともに検出されている。

検出した遺構は堅穴住居跡1棟、堅穴住居跡の可能性のある焼土面1基、井戸1基、祭祀遺構と溝・土坑・畦畔・ピットを検出した。水田面も洪水に遭っており、複数時期あることは確実である。同一面で調査したが、堅穴住居跡が水田面の下で確認していることから明らかかなように、遺構の時期差は当然ある。

2. 遺構

堅穴住居跡（図版10 写真図版11）

S H01

調査区東側の旧河道に近い部分で検出した。焼土が認められたことから精査したところ、南北4.1m、東西2.6mの長方形プランを検出した。中央部分に円形ピットとU字形の焼土塊があり、炉跡と思われる。主軸はほぼ南北に長軸を有している。全体に焼土・炭が広がっており、焼失住居である。肩部分にも広がりが僅かに認められたので高床部を持って西側に広がる可能性が残されている。床面までの深さは5cm前後で焼土面によった検出可能となった遺構である。その下の層は変色を蒙ったもので床面では

ない。時期は古墳時代初頭（庄内新段階期）と思われる。

S H02

S H01同様な焼土面を S H02として南壁沿いで調査したが、明瞭なプランを検出することが出来なかった。焼土・炭の状況から堅穴住居跡の可能性が残されるが、明確ではない。

なお、床面で採取した炭化物を株式会社加速器分析研究所にて放射性炭素年代（AMS測定）を依頼した。その結果、 $2,860 \pm 30$ yrBPの数値を得たことを記しておく。

井戸・祭祀遺構（図版11～13 写真図版13～16）

S E01

旧河道と溝が合流する内側で検出している。最大径150cm、最小径120cm、深さ55cmの素掘りの井戸である。西側に寄って2段掘りされており、東西90cm、南北60cmの不定方形が深掘部分で底はまた円形になる。深くはないが、現在でも湧水している。上径より中央部分が広く、断面形状は僅かに袋状になっている。

祭祀遺構

井戸周辺の溝・土坑などを祭祀遺構と呼称する。井戸を中心とした遺構群で、井戸に向かう道（通路）と考えられる。小土坑群（小溝含む）はいわゆる波板状遺構などと呼ばれる水田遺構に伴って検出例が多い遺構である。これが2基南北に並んでいる。井戸の南西部に1.8×1.6mの楕円形の高まりがあり、そこから南東に4段のステップがある。細長い溝状の土坑で、その両側に杭列（各7基）が設けられている。径40～60cmと大形のもので、柱痕跡を確認出来なかつたので杭列としている。両側に太い杭列を打設したと考えており、目隠しを目的にしたと想定している。この遺構の平面形は台形になり南東部が広がっている。下のステップで長さ2.4mを測り、その杭列端部（南東部）の距離は心々間で3mを測る。高まりから北側は浅い溝状になり、その中に7基の細長い土坑（溝状）が築かれており、溝状の北側にもう1基合わせて8基の土坑が存在する。井戸北側にはオーバーフローした水を流すSDIIが掘られ、旧河道へ達している。これら遺構が一体のものと考え、祭祀遺構とする。当然水に対する祭祀で古墳時代後期の所産である。

土坑（図版14 写真図版17）

8基検出しているが、性格のわかる土坑はない。楕円形・不定形のものが大半である。祭祀遺構南側に浅い溜まりがあった。SX01としたが、祭祀遺構の一部かもしれない。

S K02

調査区北東部で検出した。北西～南東方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長さ80cm、幅35cm、検出面からの深さ9cmを測る。断面形はU字状を呈する。

S K03

調査区南東部で検出した。不整形の土坑である。長さ、幅とも1.65m、検出面からの深さ10cmを測り、底部は凹凸がある。埋土には基盤層土とともに炭・焼土が少量混じる。

S K04

調査区中央付近で検出した。北東～南西方向に主軸をもつ長楕円形を呈する。長さ2.8m、幅75cm、検出面からの深さ4cmを測る。断面形は皿状を呈する。

S K07

調査区北西部で検出した。ほぼ東西方向に主軸をもつ隅丸長方形を呈する。長さ1.8m、幅65cm、検出面からの深さ14cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

S K08

調査区南西部で検出した。平面形は円形を呈する。径60cm、検出面からの深さ5cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土に炭粒が少量混じる。

S K09

調査区南西隅のS D22南側で検出した。東西方向に主軸をもつ隅丸長方形を呈する。長さ2.05m、幅1.05m、検出面からの深さ5cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土には基盤層土が多く混じる。

溝（図版16・18 写真図版18~21）

22条検出しているが、祭祀遺構に伴うものが含まれ、逆にスキ溝は番号を与えていない。旧河道から分流するための溝群と水田内で検出した小溝がある。分流する水路機能を有する溝調査区東側と南西部で検出されている。調査区東側で検出されている一群はB地区方向から延びてくる溝である。S D02・03・05と井戸から溢れた水を流すS D11である。S D11は祭祀遺構の一部と考えられる。S D02は東壁から12mまで残存している幅0.3mを測る直線の溝である。切り合い関係から最も新しい溝で古代であろう。S D03は蛇行しており、東壁から32mのところで消失している。水田の南東コーナーであることから、この部分が水田の水口であろうと思われる。幅1.2~2.1mを測り最大深度は0.65mである。S D05は幅1.8~2.9mの、一部屈曲するが概ね直線となる溝で旧河道の可能性が高く、S D06に繋がる溝（河道）であろう。底には板材などの木製品があり、須恵器杯などが出土している。最大深度は0.85mで断面形状は不定の逆台形である。S D11はS E01からS D06までの5.5mの間で幅1.2m、深さ0.4mで西側を内側に弧を描く。断面形はU字形である。出土遺物は土師器小片だけであるが、時期は井戸などと同じ古墳時代後期と思われる。調査区南西で検出された溝はS D22である。幅2.5~3.2mで直線的に延びる。古墳時代初頭の絵画土器を出土している。溝そのものの埋没時期は古墳時代後期である。調査区内20mを調査しており、深さは1.2mである。

それ以外の溝は水田耕作に伴うスキ溝である。A1地区同様に南北方向のスキ溝を検出している。下層の不定形小区画水田以降のスキ溝である。

水田跡（図版15・17・18 写真図版22~24）

東側を除いてほぼ全面で検出している。畦畔を確認したもので、最も狭い一筆は 2×3 mの6mである。1辺4~5mのものが多いようであるが、洪水堆積が多数あり切り合いもある。検出した水田すべて同時期ではないと思われる。現況では 10×5 mの50mが最大である。地形は東から西に向かって低くなるが、必ずしも水口が東側に設けられているわけではない。

3. 出土遺物（第4図・図版22・23 写真図版32~37）

竪穴住居跡出土遺物

SはSH01出土の土師器壺底部である。焼失住居であることから土器も強く被熱し赤変している。尖り底から外傾する体部になる。明褐色砂粒多く含む。内面ケズリで庄内並行期と思われる。

9はS H02出土須恵器瓦泉口縁部である。端部を欠くが長い外反する頭部に沈線2条とカキメが施される。口縁部は屈曲して外傾しロクロナデである。内外とも灰である。TK-10前後であろうか。

祭祀遺構出土遺物

10は須恵器椀で端部の丸い内傾する口縁部で平底はロクロケズリを施す。変化点に沈線があり、灰～灰白で長石を含む。祭祀遺構のピット・土坑から分かれて出土している。大きく歪んでいる。

溝出土遺物

11・12はSD05出土の土師器である。11は甕で内湾する体部から外反する口縁部になり端部丸く納める。内面ヘラケズリ、外面ハケ整形で、内外ともにぶい黄橙を呈する。長石・石英などの砂粒含み磨滅顕著である。12は高杯筒部で外傾し掘も食線的に開く。中実で外面ハケ整形からミガキを施し、内面ナデ調整ある。内外ともにぶい黄橙を呈する。

SD06からは多くの土器が出土している。13～23は上層の土器である。13～19は土師器で13～17は甕である。13は球形の体部から外傾する口縁部で端部丸い。口縁部はユビ成形によって作り出し、指圧痕が残りその後口縁部全体を強いヨコナデで仕上げる。内面にはぶい黄橙～灰白・橙でヘラケズリからナデ仕上げ。外面は褐灰～灰でハケ整形を行い黒斑が認められる。14はやや長めの球形体部から外反する口縁部で端部丸い。口縁部と外面はハケ整形で、内面は板ナデである。粘土紐残り、煤付着している。灰白～黒で砂粒含み、口縁部歪んでいる。15は大形壺か二重口縁壺である。残存部が擬口縁部から外れた状態に見えるので、壺の可能性が高い。浅黄～ぶい黄橙で外面はタタキ成形である。17は小さな平底から外傾する体部に続く。内面は浅黄、外面は黄灰でユビ成形からナデ仕上げ。上層の土師器のなかでは古相を示している。18・19は高杯部である。18はナデ整形からヨコナデを行う。外傾し端部丸く中実の筒部となる。19は平坦な底から甘い接線を持って外傾する杯部で端部は尖りぎみ。筒部をソケット状に接合しており、接合面で割れている。内外面ともにハケ整形からヘラミガキで仕上げている。20～23は須恵器杯である。20だけ杯蓋で内湾する天井部から体部で端部は尖りぎみに薄く仕上げる。内面には同心円文の痕跡があり、外面にはヘラ記号が認められる。21は平底気味から扁平な内湾する体部になり、立ち上がりは内傾し端部尖る。受部は短く端部丸い。灰～灰白出長石含む。22は平底で体部直線的に開き、受部まで延びる。立ち上がりは外反し端部尖る。23は丸底から内傾する立ち上がりになる。受部は短く上方に延び丸く納める。ヘラ切りのナデ仕上げ。

24～40はSD06下層の遺物である。24～31は土師器、32～40は須恵器である。24は外反する甕口縁部で、口径31cmと大形である。ハケ整形のうち内面はヘラミガキ、端部周辺はヨコナデ。にぶい黄橙～灰黄褐である。25は小形壺口縁部で外傾し端部尖る。にぶい黄橙でヨコナデ仕上げ。26は外傾する甕で端部角張る。ハケ整形からヨコナデで金雲母などの砂粒含む。27も甕で外反ぎみで端部丸い。内面灰黄褐、外面にぶい橙で、ハケ整形からヨコナデである。28は上げ底の甕底部で外反ぎみの体部で褐灰をしている。内面はくもの果状ハケである。29は内湾する口縁部で端部丸い皿で、ヨコナデ仕上げ。30は高杯部下半で、色調はにぶい橙～灰白で砂粒含む。内面はナデ調整を加える。31は掘が広がる高杯脚部で、灰黄褐～にぶい黄橙を示す。内面には絞り目が残り、外面はハケ整形からナデ仕上げで、中実である。32・33は杯蓋である。32は天井部丸く内湾して直立する口縁部になる。端部は外側に薄く尖らせている。天井部はロクロケズリから仕上げナデで口縁部はロクロナデである。灰～灰白でロクロ方向は逆時計回り。33は天井部緩やかに内湾しロクロケズリ、扁平で口径大きい。口縁部内湾し端部丸い。灰で内面は

一方向の仕上げナデ。34~40は杯身である。34は口径の割に扁平である。上げ底ぎみの平底から外反する体部が受部に延び、端部は丸い。立ち上がりは外反し器壁薄く仕上げる。灰~灰白で内面不定方向のナデ仕上げ。35は底部を欠く。内湾する体部から外反する立ち上がりになり端部尖る。受部はやや上がり端部丸く短い。底部はロクロケズリで他はロクロナデ。36も底部残存しておらず、体部内湾ぎみで立ち上がり低く外反する。受部は水平に短く端部丸い。ロクロナデで灰~灰白である。37は不安定な平底から屈曲しつつ外傾し水平に開く受部になる。端部は丸く短い。立ち上がりは外反し端部丸く、器壁薄い。底面はヘラ状工具痕が見られ未調整である。内面は一方向の仕上げナデ。色調は、内面は灰~暗灰だが、外面特に口縁部側は酸化状態で赤灰を呈している。38は丸底から内湾する体部になり、立ち上がりは内傾し端部尖る。受部は短く水平になり端部丸い。受部周辺には自然釉がかかっている。灰~暗灰を示し、内面は一方向の仕上げナデでロクロ回転方向は逆時計回りである。39は不安定な平底から体部内湾し、立ち上がりも内湾する。受部短く端部丸い。内面は不定方向の仕上げナデが見られる。ロクロケズリで一部未調整となる。40は上げ底となっているが底面は欠く。体部外傾し水平に短く開き端部丸い受部となる。立ち上がりは短く外反し端部丸い。灰白を呈し、自然釉付着している。須恵器はTK10型式を主とするが時期幅が認められる。

41はSD08出土の須恵器杯身である。底面未調整と思われ上げ底ぎみに延びるが残存していない。体部は内湾し立ち上がりは僅かに外反し端部尖る。受部は短く水平で端部丸い。灰白を呈し砂粒含む。

42・43はSD11出土である。42は土師器高杯部である。外傾する杯部下半から外傾し端部尖る。ナデ仕上げ・ヨコナデ調整で2次焼成を受けている。内面灰黄褐~黒褐、外面赤である。43は丸底から内湾する球形の体部を有する須恵器壺である。内面は灰白~灰で同心円タタキが認められ、外面は灰黄褐~にぶい黄褐で格子状のタタキが施される。2次焼成を受けており砂粒含む。

44~47はSD22出土すべて土師器である。44は壺で底部を欠くが丸底と思われる。球形の体部内面はヘラケズリで有機質(コゲ)が底に付着している。外面はユビ成形からハケ整形しナデ仕上げを行う。現況で確認出来ないが、頭部にタタキが残ることからタタキ成形を行ったと思われる。色調は灰白~にぶい黄橙~橙で砂粒含む。口縁部は外傾し端部丸い。口縁中央部が厚くなっている。45は壺口縁部で外傾し端部丸い。ハケ整形からヨコナデを行う。にぶい黄橙~黒褐をする。46は底部を欠くやや扁平な球形の壺である。丸底と思われ、口縁部は外反する。ハケ整形から板ナデ・ナデ整形を施す。器壁は厚めで褐灰~にぶい黄橙をしている。47は壺体部破片と思われる。内湾しており、灰白~にぶい黄橙を呈する。ハケ整形が施され、その後ヘラによる絵画が描かれている。鳥の頭部かと思われるが断定出来ず、スッポンなどの頭部かもしれない。

包含層出土遺物

48・49は土師器で、それ以外は須恵器である。49~53は古墳時代、それ以外は奈良~平安時代の遺物である。固化していないが、75・76は中世後半、77~79は近世の遺物である。

2点の石器が包含層から出土している。S1はサスカイト製の石匙である。両面から刃部を作り出している。長さ4.05cmで40.8gである。S2は先端を欠く石鏃である。僅かに凹基となるものでサスカイト製である。0.4gと軽量である。

第3節 B地区の調査

1. 概要

幅30mで長さ10m余りの280mと小面積の調査区である。有年原クルミ遺跡では東端に位置している。里道が調査出来ないことから、調査区を別にした。地形的には僅かながらA2地区より高くなっている。東でも南東方向に向かってやや高くなってしまい、その方向に微高地があり、集落があるのではと推測される。検出した溝などは繋がっており、当然A2地区へ同じ遺構が延びている。

基本層序は、現水田面直下に黄褐色シルト質極細砂層が堆積し、その直下が基盤層となる。基盤層上面が遺構面となるが調査区北東隅は遺構面が北東側に落ち込みをみせる。A2地区SD06あるいはB地区の東側に畦畔に痕跡を残す旧河道を続くものであろう。

検出した遺構は、掘立柱建物1棟、旧河道1条、溝4条とスキ溝・ピットである。

2. 遺構

掘立柱建物跡（図版 写真図版）

S B01

調査区北側で確認しており、1×2間の規模な建物である。東西1間で3.0mを測る。南北は1間1.6mの3.2mを測る。柱痕跡は20cm前後で、柱穴の最大深度は44cmである。調査区北側に延びている可能性もあるが、調査区北東隅に旧河道肩部があることから、延びないように思われる。主軸方向はN20°Wで僅かに西側に振っている。柱穴出土遺物から時期は古墳時代初頭と思われる。

旧河道

S R01

肩部を調査区コーナーで検出している。調査したのは肩部付近だけで、北東に向かって落ち込みかかった状況である。河道本体は調査区北側に存在する。A2地区北東隅部の河道が続いているものと思われる。

溝（図版20 写真図版28・29）

4条調査している。南からSD01・02・03・04と付けている。SD01は東壁から調査区南辺の中央に延びる溝である。SD01は幅1.4~1.8mで最大の深さ0.4mを測る。検出した部分では東西に直線的に延びている。水平堆積を示しており、埋没時期は他の溝より早かったと思われる。SD02は調査区を東西に貫いており、A2地区SD03に続いている。調査区内での切り合いはないが、SD01を調査区東側で切っているものと思われる。溝は直線ではなく南側を内側とする緩やかな弧を描いている。幅0.4~0.55mで深さ0.3mを測る。断面U字形で人為的な溝である。SD03は調査区を東西に貫いており、幅2.3~2.6m、最大の深さ0.6mを測る。堆積はレンズ状を示し、一気に埋没したのではなく徐々に埋まつたと思われる。SD04は調査区中央をやはり東西に貫流している。南側にSD03が約2m離れて存在しており平行している。A1地区では検出されておらず、里道部分で合流するか切られているかと思われる。幅0.4~0.5mで深さは0.2m前後である。断面は逆三角形に近い形状である。

溝はそれ以外にも複数ある。東西方向と南北方向があるが、いずれもSD01~04埋没後に設けられた溝でスキ溝と考えている。

ピット

S B01以外に11基確認している。柱痕跡を確認したものも1基あり、他にも掘立柱建物・柵などの可能性が残されている。

3. 出土遺物（図版24 写真図版38）

出土遺物量は面積的にはB地区はやや多い。

掘立柱建物跡出土遺物

63~66はS B01出土遺物で、すべて土師器である。63は壺で内傾する肩部から僅かに外反する口縁部で端部角張る。ヨコナデで仕上げている。端部に刻み目があった可能性が残る。64・65は据広がりとなる高杯脚部である。64は内湾し端部尖りぎみである。暗灰~黒を呈し、内面はハケ整形からナデ、外面はヘラミガキが施され、端部周辺はヨコナデである。透孔が1ヶ所残っており、4方透孔かと思われる。黒斑が認められる。65は外面ハケ整形、内面ナデ、端部ヨコナデである。にぶい黄橙~橙で1ヶ所透孔が残存している。66は壺底部で不安定な平底である。外面はタタキ成形からナデ、全体に板ナデで調整している。にぶい掲~黒掲で砂粒含む。

溝出土遺物

67は土師器壺でS D01出土である。内湾する体部から外反する口縁部になり端部丸い。口縁部中央の器壁が厚くなっている。にぶい黄橙で粗いハケ原体による整形から板ナデを行う。

68~71はS D03出土で須恵器杯である。68は蓋で丸みを持つ天井部でロクロケズリだが一部未調整である。稜線を持ってから口縁部に向けて外傾し端部外側につまみ出し尖る。灰~灰白で内面に有機質付着している。69も蓋で天井部丸く体部外傾し口縁端部は外側に尖らす。内面には同心円文が残り、成形時の当て具痕であろう。天井部には2本のヘラ記号が記されている。灰~灰白を示す。70は身で器壁が厚く丸底から内湾し受部上方に丸く納める。立ち上がりは外反し端部丸い。灰白~暗オリーブ灰を呈し、内面は1方向の仕上げナデが施される。受部には別個体の破片（蓋片）と自然釉が付着している。71も身、丸底で器壁は厚めである。体部は内湾し受部短く端部丸い。立ち上がりは内傾し端部尖る。内面に同心円文が認められる。2点ずつの蓋身であるがセット関係はない。

旧河道出土遺物

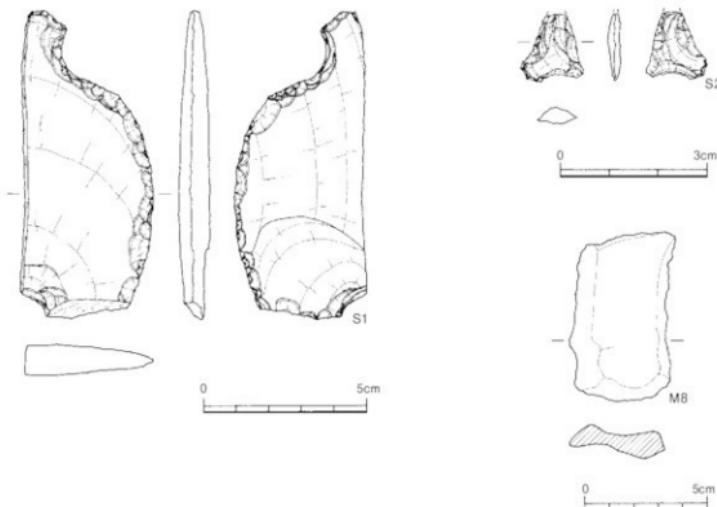
72は調査区北落ち込みから出土している。S R01肩部と考えられる遺構である。須恵器杯身で、平底から内湾する体部になり端部丸い。灰~灰白を示す。

包含層出土遺物

73は土師器高杯筒部で包含層出土である。中実で杯部・裾部とともに内湾する。にぶい橙~橙で外面はハケ整形である。内面はナデ整形である。74は土師質土錘で包含層出土で中央が膨らんでいる。1方から穿孔しており、灰白~暗灰黄で20.4gを測る。

第1表 出土土器法量表

報告番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量(cm)				残存	備考
						口縁	器高	底径	重量		
1	土師器	瓶	A1 東端	大昭明		(7.1)	1.35	(5.4)		1/6	
2	瓦質土器	瓶	A1 東端	大昭明		—	(3.1)	—		若干	
3	瓦質土器	瓶	A1 東端	大昭明		—	(1.0)	(5.0)		1/6	
4	土師質	土鍋	A1		P01.1	401.6	991.6		15.8g	はぼ定形	
5	青磁	碗	A1		—	(2.0)	(6.4)			1/4	
6	白磁	碗	A1		—	(2.9)	(4.4)			1/4	
7	施釉陶器	瓶	A1		(11.6)	3.7	(4.4)			1/5	
8	土師器	甕(底部)	A2	S1H8	—	(3.2)	1.05			1/1	
9	須志器	瓶	A2	S1H2	床面	—	(7.9)	—		断1/3	
10	須志器	瓶	A2	S1X01		9.6	6.9	5.7	11.85	3/4 5/6 体4	
11	土師器	甕	A2	S1D05		(12.8)	—	(6.2)	(11.8)	1/12 断1/8 体1/6	
12	土師器	高杯	A2	S1D05		—	(7.8)	—		断3/4	
13	土師器	甕	A2	S1D06	砂利上	38.0	(23.5)	—	(25.4)	2/3	
14	土師器	甕	A2	S1D06	上層	(14.4)	(17.3)	—	(17.0)		
15	土師器	甕	A2	S1D06		(26.2)	(5.5)	—		1/10	
16	土師器	甕	A2	S1D06		(13.4)	(4.2)	—		1/5 断1/5	
17	土師器	甕(底部)	A2	S1D06	上層	—	(2.0)	3.25		のみ	
18	土師器	高杯	A2	S1D06	底、灰シルト	14.4	(5.4)	—		2/3 斜部1/1	
19	土師器	高杯	A2	S1D06		37.1	(5.3)	—		2/3 体2/3	
20	須志器	杯垂	A2	S1D06		15.3	4.65	—		2/3 斜部2/3	
21	須志器	杯身	A2	S1D06	上層	(12.0)	—			1/5 体4/3	
22	須志器	杯身	A2	S1D06	上層	(12.2)	(4.05)	—		1/4	
23	須志器	杯身	A2	S1D06		11.4	5.1	9.0	14.1		近形
24	土師器	甕	A2	S1D06	下層	(30.0)	(4.5)	—		1/3	
25	土師器	小型甕	A2	S1D06W手	下層か?	(58.4)	(2.8)	—		若干	
26	土師器	甕	A2	S1D06W手	下層か?	(16.6)	(4.7)	—		1/14	
27	土師器	甕	A2	S1D06W手	下層か?	(15.0)	(5.5)	—		1/12	
28	土師器	甕(底部)	A2	S1D06	下層	—	(2.5)	3.65		1/1	
29	土師器	瓶	A2	S1D06W手	下層か?	(9.0)	1.8	—		若干	
30	土師器	高杯	A2	S1D06W手	下層か?	—	(1.5)	—		1/3	
31	土師器	高杯	A2	S1D06W手	下層か?	—	(7.1)	(10.0)		1/4 斜2/3	
32	須志器	杯垂	A2	S1D06	下層	12.3	4.8	—		4/5 体1/3	
33	須志器	杯垂	A2	S1D06W手	下層か?	(15.8)	4.05	—		2/5 体2/5	
34	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(14.3)	3.55	—		1/6	
35	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(13.1)	(3.2)	—		若干	
36	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(14.0)	(2.2)	—		若干	
37	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(13.6)	4.9	—		1/3 斜1/3	
38	須志器	杯身	A2	S1D06		33.0	4.35	—		1/4 体3/5	
39	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(13.5)	4.4	—		1/4 斜1/4	
40	須志器	杯身	A2	S1D06W手	下層か?	(14.7)	3.8	—		1/4 斜1/4	
41	須志器	杯身	A2	S1D08		(13.9)	3.8	—		1/12	
42	土師器	高杯	A2	S1D11		(18.0)	(5.7)	—		1/14	
43	須志器	甕	A2	S1D11		—	(21.8)	—	(30.3)	1/1 体約3/5	
44	土師器	甕	A2	S1D22		(14.8)	(18.5)	—	19.1	若干	1/9 10
45	土師器	甕	A2	S1D22		(17.8)	5.7	—		1/3	
46	土師器	甕	A2	S1D22		(18.0)	(21.5)	—		1/7	
47	土師器	甕	A2	S1D22		長(4.8)	80(7.5)	厚1.1		体のみ若干	繪画土器
48	土師器	瓶	A2 南東部			(1.3)	(5.0)	—		1/4	
49	土師器	高杯	A2 南東部			(3.2)	(12.0)	—		1/18	
50	須志器	瓶?	A2 中央			(6.2)	(4.1)	—		1/6	
51	須志器	杯垂	A2 南西部			(13.8)	(2.9)	—		1/6	
52	須志器	杯身	A2 中央			(12.6)	(1.95)	—		若干	
53	須志器	杯身	A2 東半			(15.0)	(2.5)	—		若干	
54	須志器	杯垂	A2 中央			(15.3)	(1.3)	—		1/24	
55	須志器	蓋	A2 西半			(15.0)	(1.2)	—		1/10	
56	須志器	瓶	A2 東半			(14.0)	2.7	(10.6)		1/6 1/3	
57	須志器	瓶	A2 中央			(15.1)	(3.5)	(11.6)		1/10	
58	須志器	瓶	A2 中央			(15.0)	(3.6)	—		1/7	
59	須志器	瓶	A2 中央			—	(2.1)	6.25		1/1	
60	須志器	瓶	A2 東半			—	(1.9)	(5.4)			
61	須志器	瓶	A2 東半			—	(2.0)	(4.0)		1/4	
62	須志器	瓶	A2 南東部			—	(1.0)	5.5		8/9	
63	土師器	甕	B	S1B01-P1		(14.0)	(4.8)	—		1/6	
64	土師器	高杯	B	S1B01-P4		(13.6)	(2.5)	—		1/5	
65	土師器	高杯	B	S1B01-P1		(13.4)	(1.95)	—		1/6	
66	土師器	甕(底部)	B	P01		—	(2.9)	(7.0)		1/3	
67	土師器	甕	B	S1D01		(33.8)	(6.8)	—		若干	
68	須志器	杯垂	B	S1D03東半		35.2	4.3	—		3/4 体1/3	
69	須志器	杯垂	B	S1D03東半		(15.0)	4.55	—		1/4	
70	須志器	杯身	B	S1D03W手		11.0	4.1	—		はぼ定形	
71	須志器	杯身	B	S1D03		(12.2)	5.3	—		1/3	
72	須志器	杯身	B	S1R01	1.層	(10.0)	3.7	(5.3)		1/7 1/6	
73	土師器	高杯	B	—		(5.1)	—			脚・体のみ	
74	土師質	土鍋	B	P05.5	瓶1.95	厚1.7			(20.4)g	14/15	
75	白磁	碗	A2							写真のみ	
76	無釉陶器	縹緲	A2							写真のみ	
77	施釉陶器	縹緲	A2							写真のみ	
78	施釉陶器	碗	A2							写真のみ	
79	施釉陶器	瓶	A2							写真のみ	



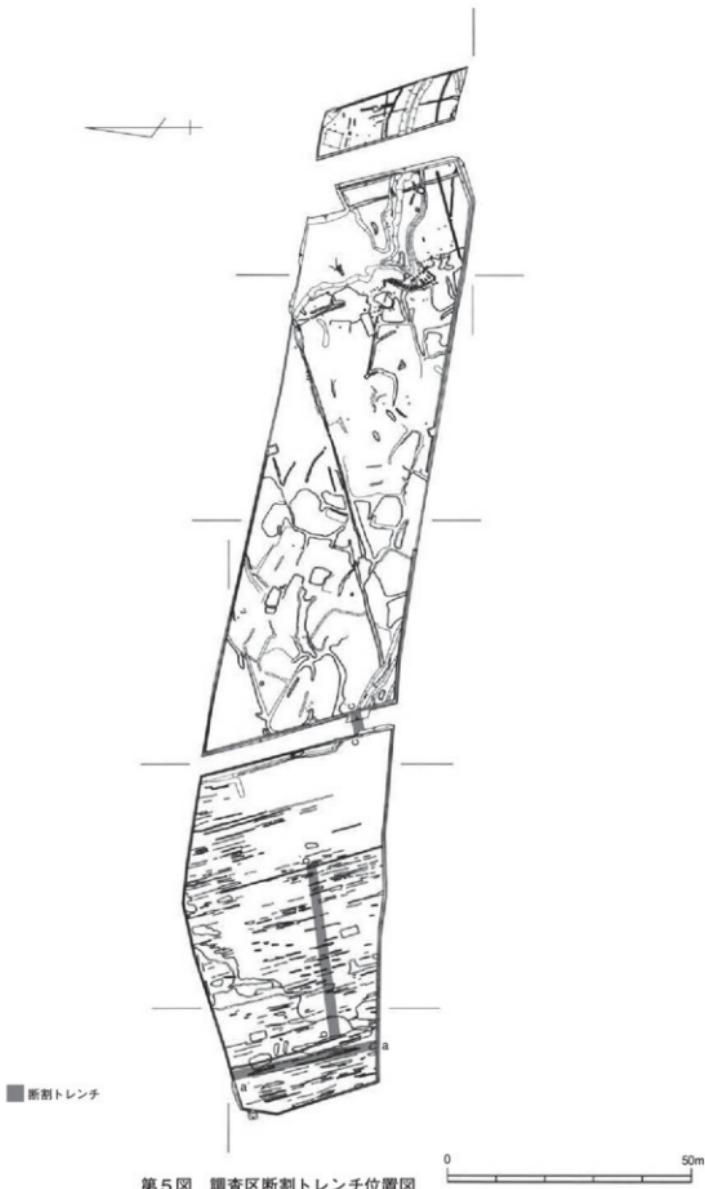
第4図 出土石器・金属器

第2表 出土石器法量表

報告番号	種別	器種	地区	遺構	層位	法量(cm)				残存	備考
						長さ	幅	厚さ	重量		
S 1	石器?	サヌカイト	A 2			(4.05)	(9.4)	0.9	(40.8) g		
S 2	石器	サヌカイト	A 2			(1.35)	(1.25)	0.3	0.4 g		

第3表 出土金属器法量表

報告番号	器種	地区	遺構	層位	法量(cm)				残存	備考
					長さ	幅	厚さ	重量		
M 1	鉄釘	A 1 北半			長6.0	幅0.5	厚0.65			
M 2	鉄釘	A 1			長(4.1)	幅0.4	厚0.4		上端部欠損	
M 3	鉄釘	A 1 北半			長(3.4)	幅0.35	厚0.4		下端部欠損	
M 4	鉛玉(鉛碇玉)	A 1			長1.15	幅1.2	厚1.05	8.1 g		
M 5	錐管				長(5.6)	幅1.05	厚0.05		端部一部欠損	
M 6	銅錢	A 1 南半							完存	寛永通宝
M 7	銅錢	A 1 南半							約1/2	寛永通宝
M 8	不明	A 2 中央			長6.95	幅3.95	厚1.05			



第4章 有年原・クルミ遺跡の地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や數千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査地区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査地区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通して明確にすることが可能となる。同時に調査地区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも考察できるのである。

本稿では、有年原・クルミ遺跡における地形環境を明らかにし、それと人間活動との関係について考察したい。調査では、本遺跡の調査地区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、5,000分の1空中写真の判読と現地踏査によって調査地区周辺の地形面を区分するとともに、調査地区付近における微地形の分類を行った。堆積物に関しては、主に調査地区での地質断面を詳細に観察した。これは、遺構検出面より上位だけでなく、その面から掘削したトレーナー断面で遺構検出面以深についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査地区付近における地形環境およびそれと人間活動との係わりを考察した。

2. 調査地区付近の地形分布

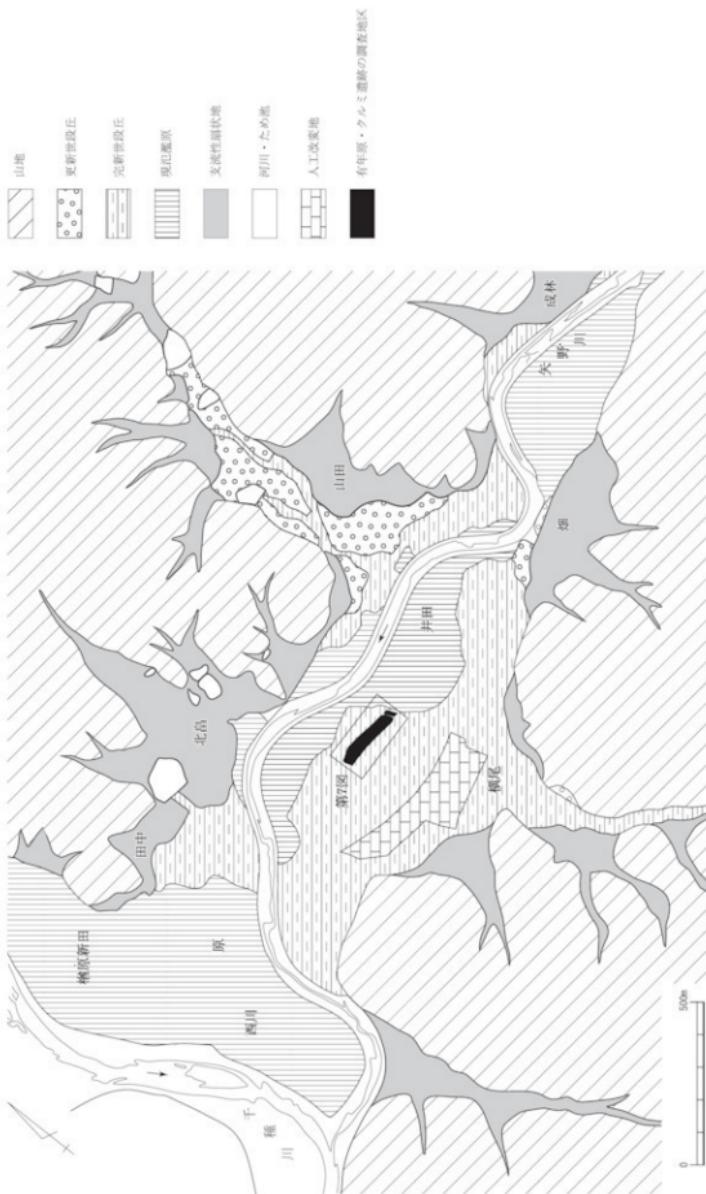
(1) 調査地区周辺の地形面について

本遺跡の調査地区は千種川の支流である矢野川の沖積低地に位置する。矢野川は、山地に刻まれた幅600~700mの谷中を西へ流れ、千種川の中流部でそれに流れ込む。合流点に近い矢野川下流部の調査地区周辺には、標高150~300mの山地がみられ、それらは主に花崗岩や流紋岩からなる。矢野川が流下する谷中には、狭長な平野がほぼ東西に延びる。矢野川下流部の平野には、更新世段丘、沖積低地、及び支流水扇状地が認められ（第6図）、沖積低地はさらに完新世段丘と現氾濫原に細分される。こうした地形のうち、調査地区は完新世段丘に位置する。調査地区周辺に分布する各地形の特色は次のとおりである。

〔更新世段丘〕 調査地区周辺の平野では、更新世段丘が1面しか認められず、それは比高1~2mの段丘崖をもつ。この段丘は、山田の集落が位置する矢野川支流の谷中によく発達し、他では畑の集落付近や横尾の南にみられる小谷の中に断続的に分布するだけである。有年半礼・山田遺跡は山田の集落付近にみられるこの段丘面を中心に立地する。

〔完新世段丘〕 この段丘は、調査地区的周辺にみられる地形の中で最もよく発達し、多くが矢野川に

第6図 調査地区周辺の地形分類図



よって形成されたものである。段丘崖は、数十cmの比高を有するものの、ところどころで不明瞭になり、そこでは段丘面と現氾濫原の地表がほぼ同じ高さで観察される。段丘面は比較的平坦で、条里型土地割（条里地割）が認められる場所もある。この段丘には、本遺跡のほか有年原・田中遺跡が立地する。

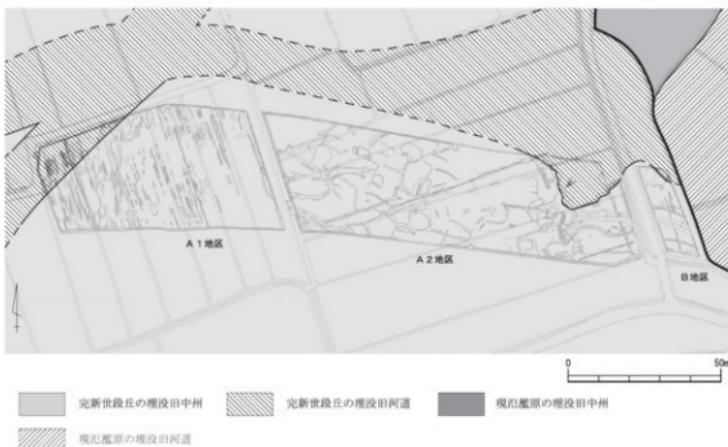
〔現氾濫原〕 この地形面は主に矢野川と千種川に沿ってみられる。これは、最も低い地形面で、河川の氾濫時に冠水する危険性が最も高い。そこでは、完新世段丘面と比べて地割の乱れが激しく、地表の起伏がやや大きい。

〔支流性扇状地〕 この地形は山地を刻む開析谷中から山麓にかけて発達する。これらは、洪水や土石流が発生した際、背後の山地から堆積物が供給されてできたもので、地表傾斜は平均13.5%と急である。この扇状地は、更新世段丘や完新世段丘と傾斜変換線で接し、現氾濫原とは比高1m前後の崖で境される。これらは北畠や山田、畠などに点々と分布する。

(2) 調査地区付近における微地形の分布

調査地区は矢野川南岸の完新世段丘に位置し、東側には現氾濫原が広がる。この付近では、完新世段丘と現氾濫原との境界に明確な比高をもつ段丘崖がみられず、両地形面はほぼ同じ高度の地表をなす。完新世段丘面には条里型土地割が認められ、現氾濫原での地割は乱れている。A1地区とA2地区ならびにA2地区とB地区の境界には、それぞれ条里型土地割の大畦畔が北北西～南南東の方向に延びる。

調査地区が位置する完新世段丘は埋没した扇状地が段丘化したものである。そのため、調査地区付近には扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で分布する（第7図）。調査地区の大半は東西に長く延びる埋没旧中州上に位置し、それはA1地区の北西部、A2地区の北東部、及びB地区の北東端を除く範囲に広がる。埋没旧中州上では、A1地区で中世以降の水田跡が検出され、A2地区では古墳時代初頭と後期の堅穴住居跡が1棟ずつ、井戸をはじめとする古墳時代後期の祭祀遺構、ならびに古墳時代や古代以降の水田跡などが認められる。またB地区の埋没旧中州上では、主に古墳時代初頭の掘立柱建物跡が1棟検出されている。



第7図 調査地区付近における微地形の分布

埋没旧河道はA1地区の北西部、A2地区の北東部、及びB地区的北東端に分布し、いずれも矢野川の流路跡に該当する。これらのうちA2地区北東部の埋没旧河道は、古墳時代初頭に形成された流路跡で、A2地区とA1地区の北側をおおむね西へ延びると推定される。また、A1地区的埋没旧河道は、それより古い時期のもので、同地区的北西部を北東から南西へ横切る。この埋没旧河道上では、南東側の埋没旧中州上から連続する中世以降の水田跡が検出されている。

3. 調査地区における堆積物の特徴

(1) 遺構検出面以深の堆積物について

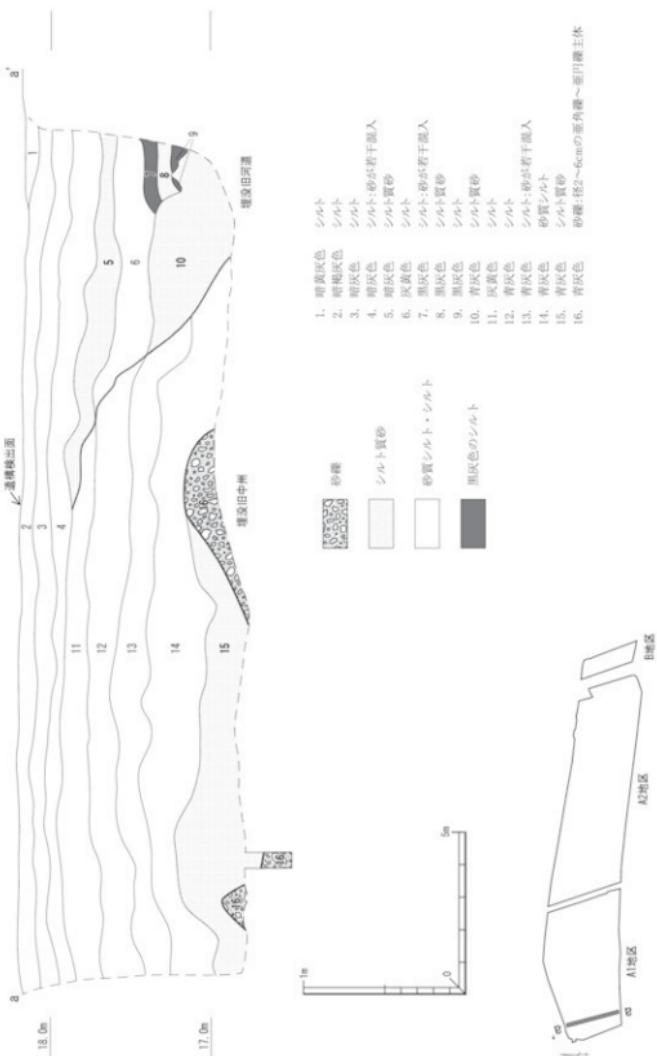
遺構検出面から掘削したA1地区的トレンチ断面では、調査地区に分布する埋没旧中州と古い時期に形成された埋没旧河道の堆積物が観察される（第8図・第9図）。埋没旧中州の分布域では、基本的に9つの堆積物が認められる。これらは、下位から青灰色～灰色の砂礫（第8図の堆積物16、第9図の堆積物10）、青灰色～灰色のシルト質砂（第8図の堆積物15、第9図の堆積物9）、青灰色～灰色の砂質シルト（第8図の堆積物14、第9図の堆積物7・8）、青灰色のシルト（第8図の堆積物13、第9図の堆積物6）、青灰色～黄灰色のシルト（第8図の堆積物12、第9図の堆積物5）、灰黄色のシルト（第8図の堆積物11、第9図の堆積物4）、暗灰色～灰色のシルト（第8図の堆積物4、第9図の堆積物3）、暗灰色～灰色のシルト（第8図の堆積物3、第9図の堆積物2）、及び暗褐色～灰色のシルト（第8図の堆積物2、第9図の堆積物1）である。

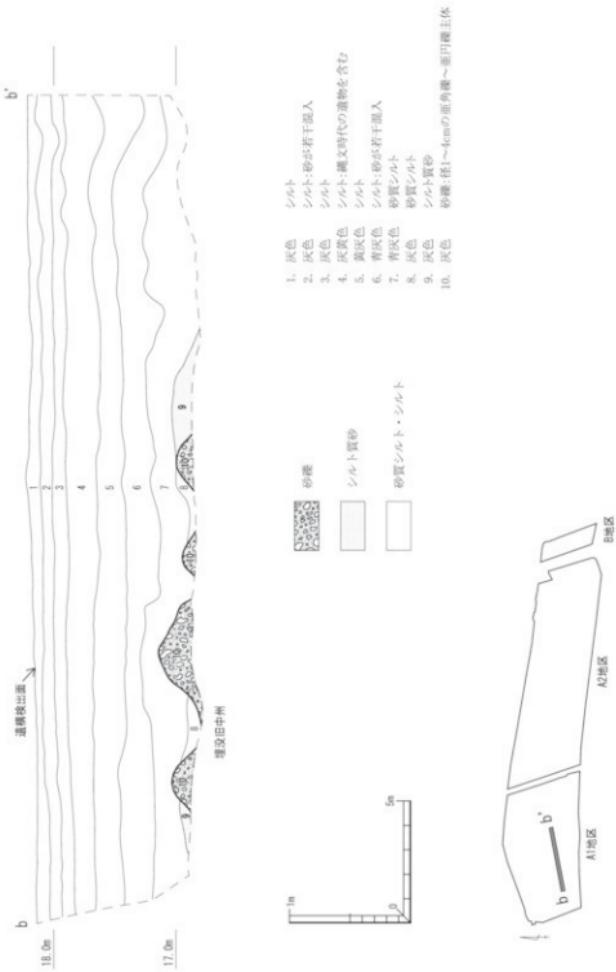
最下位にみられる青灰色～灰色の砂礫（第8図の堆積物16、第9図の堆積物10）は旧中州堆積物に相当する。砂礫に含まれる礫は径1～6cmの亜角礫～亜円礫を主体とし、最大で径10cmの礫がみられる。砂礫の上面は、トレンチ底の深さ前後に認められ、数十cmの起伏をもつ。これは比較的深く埋もれており、現地表下1.7m以深に堆積している。砂礫の上位に位置する青灰色～灰色のシルト質砂（第8図の堆積物15、第9図の堆積物9）は、下位の砂礫上面が低い箇所に断続的に分布する。堆積物中の砂は主に細砂で、厚さが50cm以上に及ぶ箇所もみられる。

その上位にみられる7つの砂質シルトとシルトは、1.0～1.4mの厚さで認められる。砂質シルトは最も下位に存在し、上位に位置する6つのシルトにはところどころで砂が若干混入する。各堆積物は10～40cmの厚さをもち、ほぼ水平に連続してみられる。これらのうち、灰黄色のシルト（第8図の堆積物11、第9図の堆積物4）には縄文時代の遺物がわずかに含まれる。調査地区的約100m南方では、縄文時代後期初頭の遺物と同時期の土坑2基がこのシルトとほぼ同じ層位から検出されており¹¹⁾、灰黄色のシルトに混入する遺物はこれと同じ時期のものである可能性が高い。

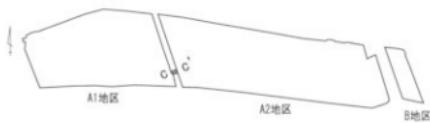
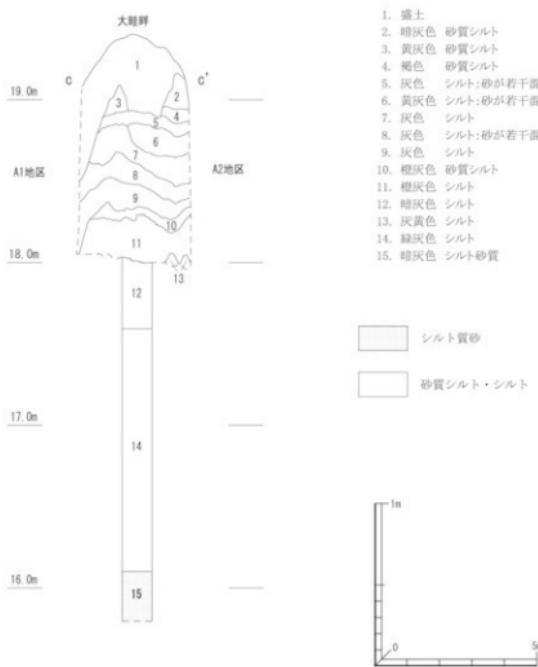
A1地区的北西部に分布する埋没旧河道は、このような灰黄色のシルトを切るもので、A1地区的南北トレンチ断面（第8図）ではその南半部が幅およそ12mにわたって観察される。旧河道の深さは1m以上に及び、その堆積物は下位から青灰色のシルト質砂（第8図の堆積物10）、黒灰色のシルト（第8図の堆積物9）、黒灰色のシルト質砂（第8図の堆積物8）、黒灰色のシルト（第8図の堆積物7）、灰黄色のシルト（第8図の堆積物6）、ならびに暗灰色のシルト質砂（第8図の堆積物5）である。これらのうち、黒灰色を呈するシルト（第8図の堆積物7・9）とシルト質砂（第8図の堆積物8）は下位の青灰色シルト質砂の上面が低い箇所に局所的にみられる。とくに黒灰色のシルトは、流路の埋積過程でできた低湿な凹地で生成された土壤にあたる。

A1地区とA2地区の境界における地質断面では、条里型土地割の大畦畔堆積物とそれより下位の堆





第9図 A1地区におけるトレンチ断面図（東西方向）



第10図 A 1 地区と A 2 地区間の大畦畔たちわり断面図

植物が観察される（第10図）。大畦畔下にみられる堆積物は、下位から暗灰色のシルト質砂（第10図の堆積物15）、緑灰色のシルト（第10図の堆積物14）、灰黄色のシルト（第10図の堆積物13）、ならびに暗灰色のシルト（第10図の堆積物12）である。これらのうち、灰黄色のシルト（第10図の堆積物13）上面は遺構検出面に相当し、その上位に位置する暗灰色のシルト（第10図の堆積物12）はA2地区の南西端をほぼ東西に延びる小規模な流路の堆積物にあたる。この地点では、遺構検出面から約2.2mの深さまで砂礫がみられず、砂礫の上面はA1地区と比べて1m以上深い。これは深く埋没している旧河道の存在を示唆するものの、詳細は明らかでない。

大畦畔の堆積物は灰色や黄灰色、橙灰色などを呈する砂質シルトとシルト（第10図の堆積物1~11）である。これらは基本的に盛土に該当する。中でも、下部にみられる橙灰色のシルト（第10図の堆積物11）と砂質シルト（第10図の堆積物10）の上面は幅約4mにわたって20~30cm盛り上がっており、これは条里型土地割の施行期における大畦畔の可能性が高い。

（2）遺構検出面より上位の堆積物について

遺構検出面より上位には、主にシルトからなる堆積物が認められる。A1地区では、基本的に下位から褐灰色のシルト、灰黄色のシルト、灰色のシルト（近年の耕土）、及び耕土がみられる。またA2地区での基本層序は、下位から暗灰色のシルト、灰色のシルト、黄灰色のシルト、褐灰色のシルト、ならびに耕土である。これらのうち、それぞれ最下位にみられる褐灰色と暗灰色のシルト下面が遺構検出面に相当し、A2地区ではこの層位で古墳時代初頭と後期の堅穴住居跡や古墳時代後期の祭祀遺構などが検出されている。

A2地区の北東部に分布する埋没旧河道も、この層位で検出され、遺構検出面下の堆積物を切って存在する。この旧河道堆積物は主に灰色の砂質シルトとその上位に位置する灰色や暗褐灰色のシルトである。これらの堆積物には、植物遺体が混入し、また古墳時代初頭、前期、及び後期を中心とする遺物が含まれる。こうした旧河道堆積物は埋没旧中州上から連続する遺構検出面以浅の堆積物に覆われる。

4. 調査地区付近における地形環境の変遷

調査地区付近の地形環境は、これまで述べてきた事柄から次のように考察される。

〔ステージ1〕 調査地区付近では、縄文時代後期初頭以前に矢野川によって砂礫が堆積した。それに伴って、扇状地が発達し、調査地区付近には中州が形成された。

〔ステージ2〕 旧中州は矢野川の洪水がもたらした細粒堆積物によって埋没した。まず旧中州上面の低い箇所にシルト質砂が堆積し、ついで砂質シルトがそれを覆った。さらに数度の洪水によってシルトが次々と堆積し、旧中州は次第に深く埋もれていった。

〔ステージ3〕 旧中州がある程度埋没した後、A1地区の北西部を南西に向かって矢野川が流下した。この流路はその後シルト質砂やシルトに埋積され、その過程で局所的にできた低湿な凹地では黒灰色のシルトが生成された。A1地区の埋没旧中州上では、こうした流路の形成前後（おそらく縄文時代後期初頭ころ）に人間活動がみられた。

〔ステージ4〕 埋没旧中州上とA1地区北西部の旧河道上には、再びシルトが数度の洪水に伴って堆積した。そのため埋没旧中州は1.2m以上の深さに埋もれた。

〔ステージ5〕 古墳時代初頭になると、矢野川がA2地区の北東部をかすめておむね西へ流れた。同じころ埋没旧中州上では、A2地区で堅穴住居、B地区で掘立柱建物が建てられた。

〔ステージ6〕 古墳時代初頭以降、A 2 地区北東部に形成された流路には砂質シルトやシルトが堆積した。その結果、この流路は古墳時代後期には埋積された。A 2 地区の埋没旧中州上では、その過程で水田稲作が営まれ、また古墳時代後期には堅穴住居が建てられるとともに祭祀遺構がつくられた。

〔ステージ7〕 古墳時代の終了後、主として中世ころに A 1 地区や A 2 地区では水田がつくられ、そこは生産域となった。その後、調査地区のほぼ全域では洪水に伴うシルトの堆積がみられた。

〔ステージ8〕 矢野川下流部の沖積低地は河川の下方段食によって段丘化した。こうしてできた完新世段丘の崖下には河川に沿って現氾濫原が形成され、洪水は主にそこで発生するようになった。

5. おわりに

本遺跡の調査地区は、千種川の支流である矢野川下流部の完新世段丘に位置する。この段丘は埋没した扇状地が段丘化したもので、段丘化の時期は古墳時代後期以降おそらく中世ころであったと考えられる。調査地区の大半は埋没旧中州上に位置する。これは、縄文時代後期初頭以前の扇状地形成期につくられた旧中州がその後現地表下1.7m以深に埋没したものである。また、A 1 地区の北西部、A 2 地区の北東部、及びB地区の北東端には埋没旧河道が認められる。A 1 地区の旧河道は縄文時代、A 2 地区とB地区的ものは古墳時代初頭から後期にかけて形成・埋積された流路跡にある。

調査地区付近では、旧中州が比較的深く埋没しているため埋没旧中州上が平坦に近く、排水の便があまりよくなかった。これは典型的な埋没旧中州上の環境と異なる。このような埋没旧中州の北側には古墳時代初頭に流路が形成され、その河床より高い埋没旧中州上では排水機能がやや向上した。これが一因となって、A 2 地区やB地区の埋没旧中州上では古墳時代初頭と後期に堅穴住居や掘立柱建物がわずかながら建てられた。ただし、そこでは元来の環境が影響して古墳時代に水田もつくられた。こうした埋没旧中州上では、北側に存在する流路が古墳時代後期には埋積された後、排水機能が低下した。その結果、古墳時代が終わった後の埋没旧中州上は主に水田稲作が営まれる生産域として利用されるようになった。本遺跡の調査地区では、以上のような地形環境と人間活動の関係が認められるのである。

注

- 1) 兵庫県赤穂市教育委員会『有年原・クルミ遺跡発掘調査報告書－有年土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1－』 2008年

第5章　まとめ

水田について

今回の調査では、A 2 地区から A 1 地区にかけて水田跡を検出している。本遺跡面的に水田遺構を調査したのは初めてであり大きな成果といえる。A 1 地区で検出した遺構は單一方向を示すのみであったが、A 2 区で検出した水田は、少なくとも 2 方向を示す。この方向の違いは時期差を示すものと考え、少なくとも 2 時期の水田を同一遺構面で検出したものと判断する。それぞれの水田について述べる。

1期

N75°E を示し現畦畔とほぼ同方向である。この方向は、A 1・B 地区検出の耕作痕（スキ溝）にも見られ、溝、畦畔ともに直線的にのびる。完存する水田はないが、遺構の形態などから東西方向に長い短冊状を呈すると考える。残存する畦畔の状況から南北の長さは 20~25m を測る。水田は断面観察から少なくとも A 2 地区 S D06 埋没以降に開発されたと考えられ、古くみると古代、新しくみると、中世以降に開発されたと考える。A 2 地区では水田に伴う遺物が出土していないが、A 1 区からは中近世の遺物が出土する。A 2 地区では S D01・14・16・17・20 がこの時期の水田に伴う溝と考える。

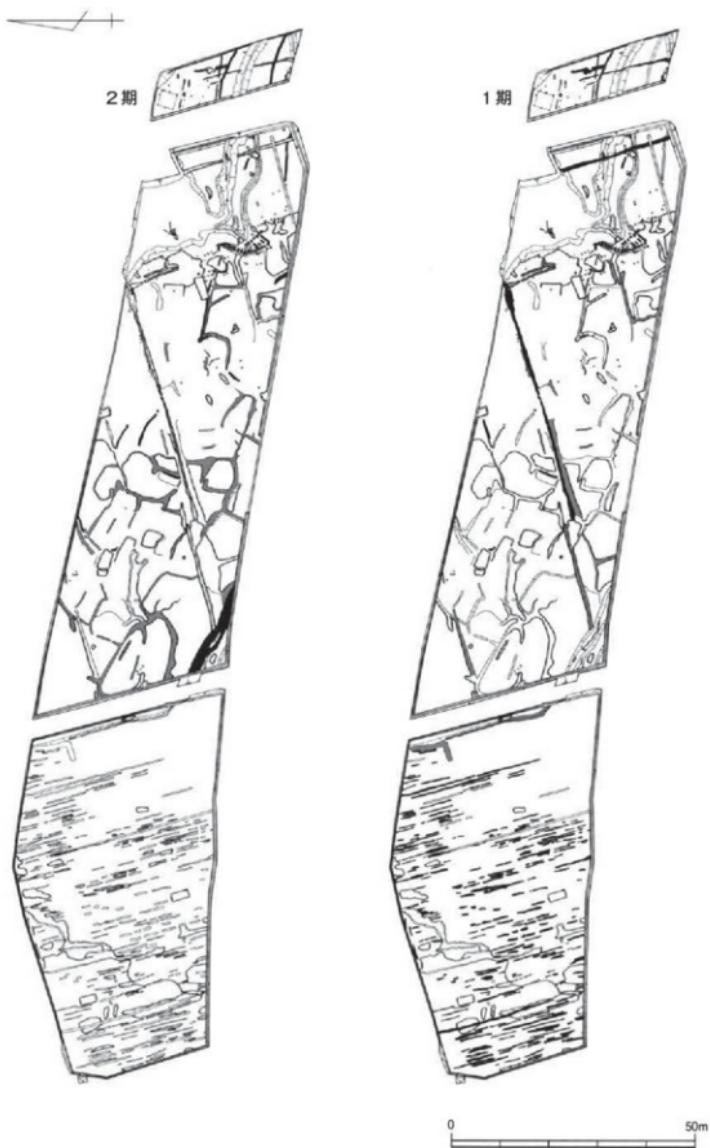
2期

1 期の遺構よりも東側に偏り N100~110°E を示す。完存する水田はないが、南東-北西に主軸をもつ不整長方形を呈すると考える。良好に残存した畦畔の高さは約 20cm あり、A 2 地区東半部では水田土壤層が残る。また西端付近では当該時期の水田が 2 面検出できた。水田土壤層はいずれも浅黄を呈するシルト質極細砂であるが、畦畔は下層から上層まで存続するものと、洪水により埋没後に再度構築されたものがある。2 期の水田の時期は、水田と同方向の溝から出土した遺物が古墳時代初頭以降であることから古墳時代に属すると考える。A 2 地区 S D02・03・12・13・15・18・19・21 がこの時期の水田に伴う溝と考える。

A 1 区は本報告や隣接地での調査成果から、水田化以前は大部分が旧河道にあたると推定される。遺構検出面から出土した土器は中近世に属するもののみである。一帯が旧河道埋没後に安定し、生産域として土地開発が進み、本格的に利用されたのは中世以降であろう。東端で検出した大畦畔は、基盤層が高位で検出できるほぼ西端に位置することから、A 2 地区以東で検出した 1 期の水田の西を限るものであろう。したがって A 1 地区と A 2 地区は水田の地割こそ同じであるものの、時期差をもつ可能性があり、旧河道の埋没に合わせて段階的に西へ開発が進んでいった可能性がある。

生活域について

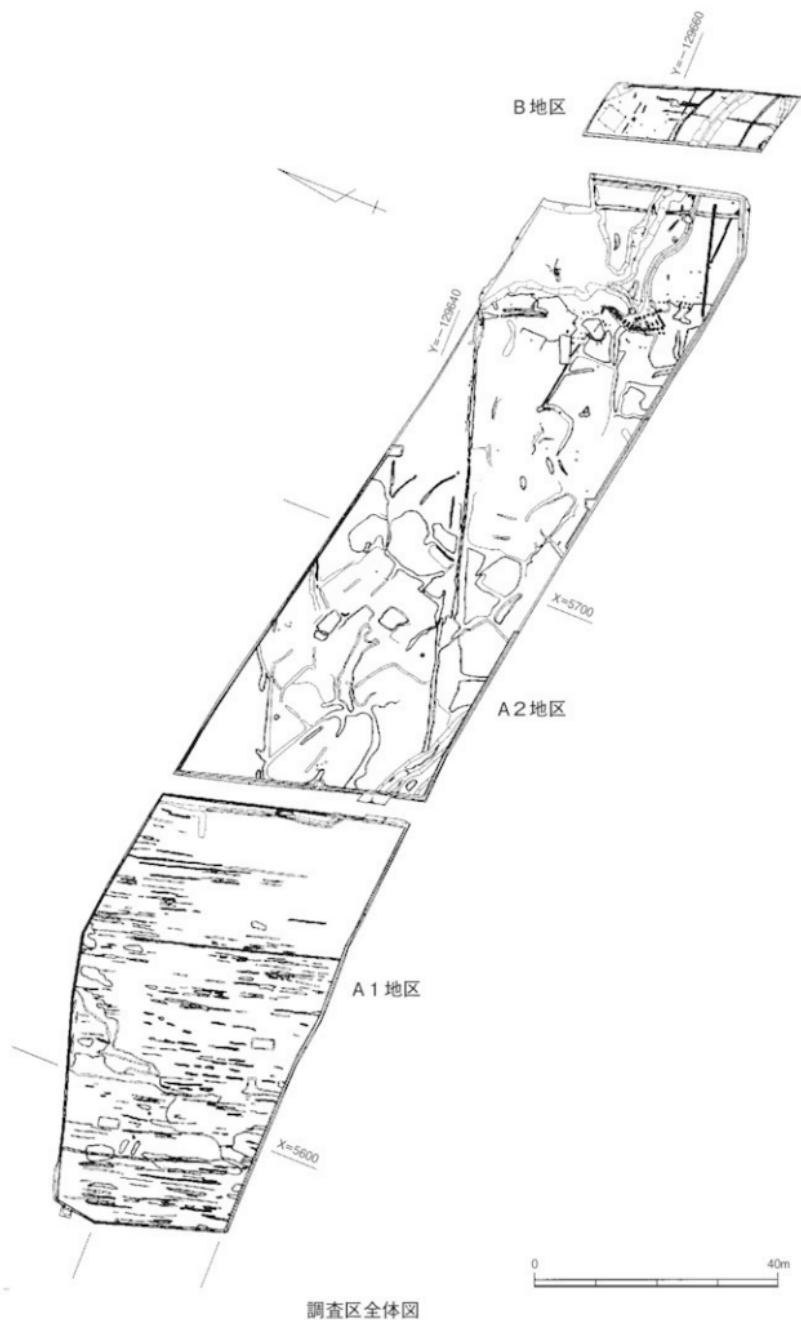
A 2 地区東半部から B 地区では安定した基盤層が認められ、その上面で堅穴住居跡、掘立柱建物跡などの遺構を検出した。この範囲は生活域として利用され、今回の調査ではその一端を検出したものと考える。周辺の調査結果や微地形復元などによると、本調査区南側に東西に細長い微高地が所在し、生活域の主体はそこにあると考える。微高地上にあたる箇所では、縄文時代以降の遺構が検出される。A 2 地区南東部および B 地区はその西端付近にあたるのであろう。今回調査では古墳時代後期の生活域の一端も検出し、住居跡の他に川岸付近で水際の祭祀が行われていた。この時期も集落の中心は本調査区南側にあることが考えられ、有年原・クルミ遺跡の中では継続的な生活域として利用されていたものと推定される。

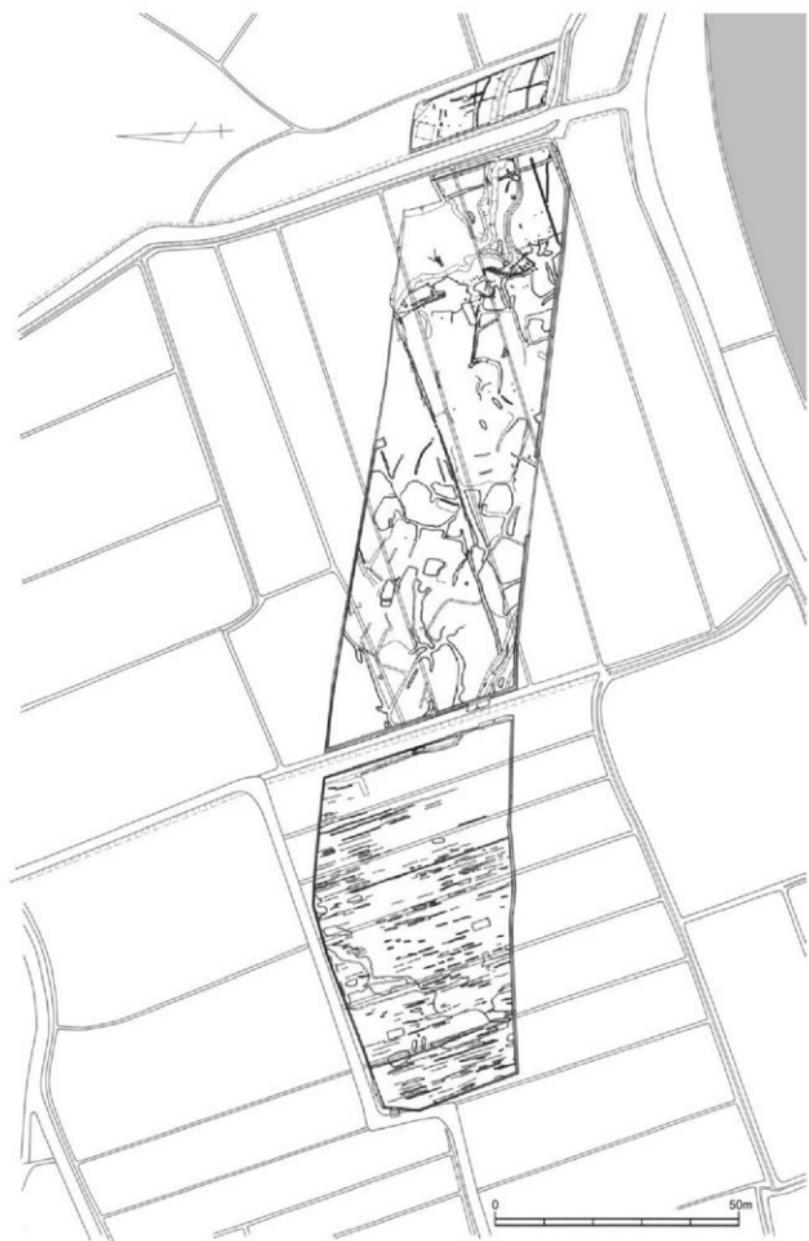


第11図 溝・畦畔の方向

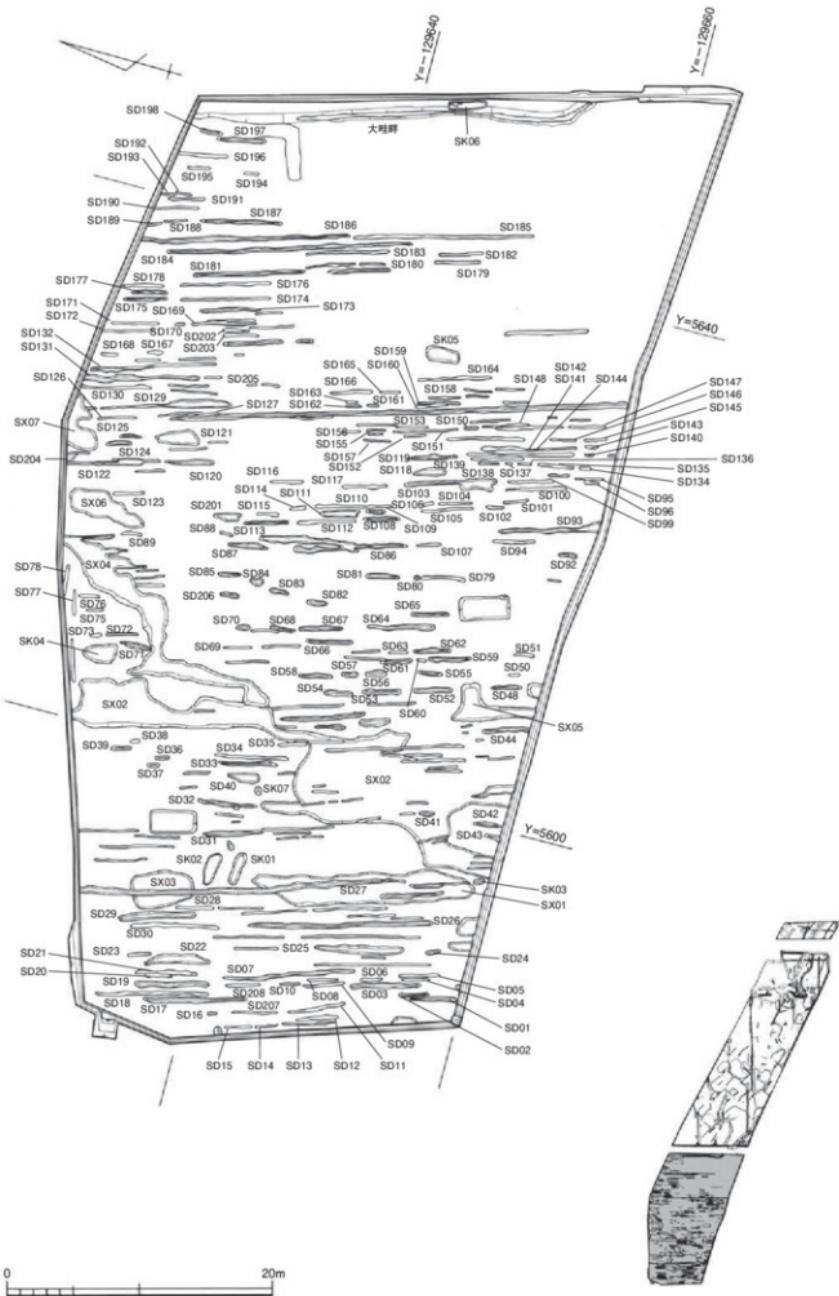
報告書抄録

ふりがな	うねはら・くるみいせき						
書名	有年原・クルミ遺跡						
副書名	一般国道2号相生有年道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第457冊						
編著者名	長濱 誠司・渡辺 昇・青木 哲哉						
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部						
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内） TEL 079-437-5561						
発行機関	兵庫県教育委員会						
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel078-362-3784						
発行年月日	平成26(2014)年2月28日						
資料保管機関	兵庫県立考古博物館						
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (m ²)	発掘原因
うねはら 有年原・ク ルミ遺跡	市町村 赤穂市有年原	遺跡番号 28212	130318	34°49'52"	134°23'42" 20090624 ~20091014 (2009147)	6,816m ²	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
有年原・ク ルミ遺跡	集落跡	弥生時代		弥生土器・石器			
		古墳時代	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・祭祀遺構・溝・水田	須恵器・土師器	井戸を中心とした水際祭祀が行われる		
		中世	水田	土師器・陶磁器・金属器			
要約	<p>有年原・クルミ遺跡は千種川支流の矢野川南岸に位置する。遺構は東半部で古墳時代初頭の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝、古墳時代後期の井戸を中心とした祭祀遺構などを検出したが、生活域の中心は調査区南側にあるものと考える。西半部では水田とそれに伴う溝などを検出した。水田は少なくとも新旧2時期のものが重複している。出土遺物から古い段階の水田は古墳時代初頭以降、新しい段階の水田は古代以降と考えている。古い段階の水田は同じ方向を示す畦畔が重複しており、洪水の被害を受けながらも継続的に生産が行われていたと推定する。遺跡周辺には条里地割が残存するが、新しい段階の水田は条里形地割と同じ方向を示す。西端付近で検出した水田については、出土遺物から矢野川旧河道が埋没した中世以降に形成されたものと思われる。</p>						

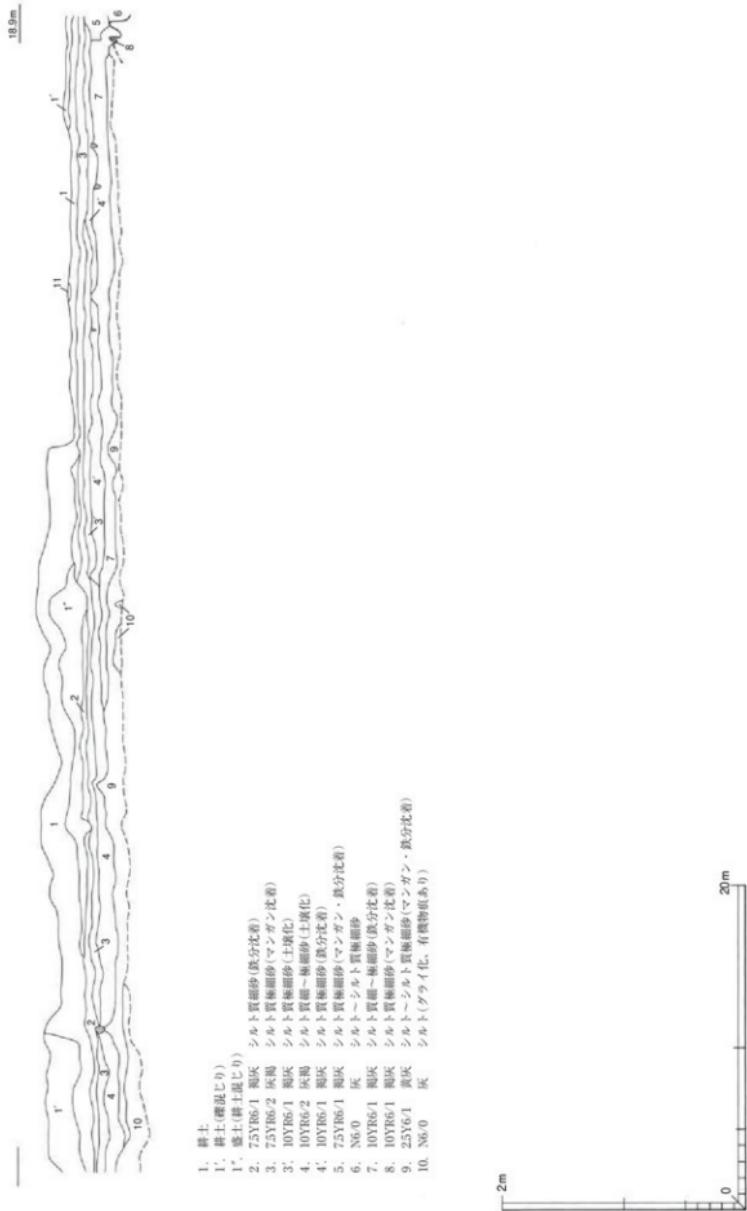




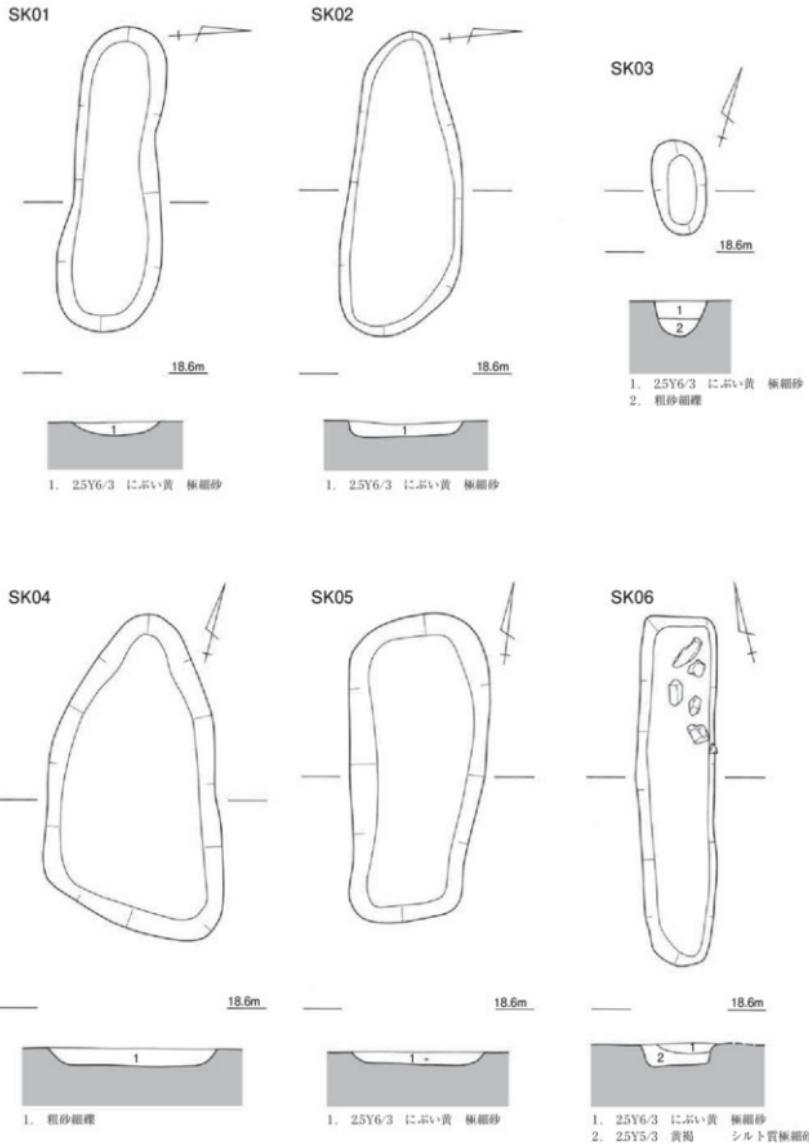
検出遺構と周辺地割



A1 地区 全体図

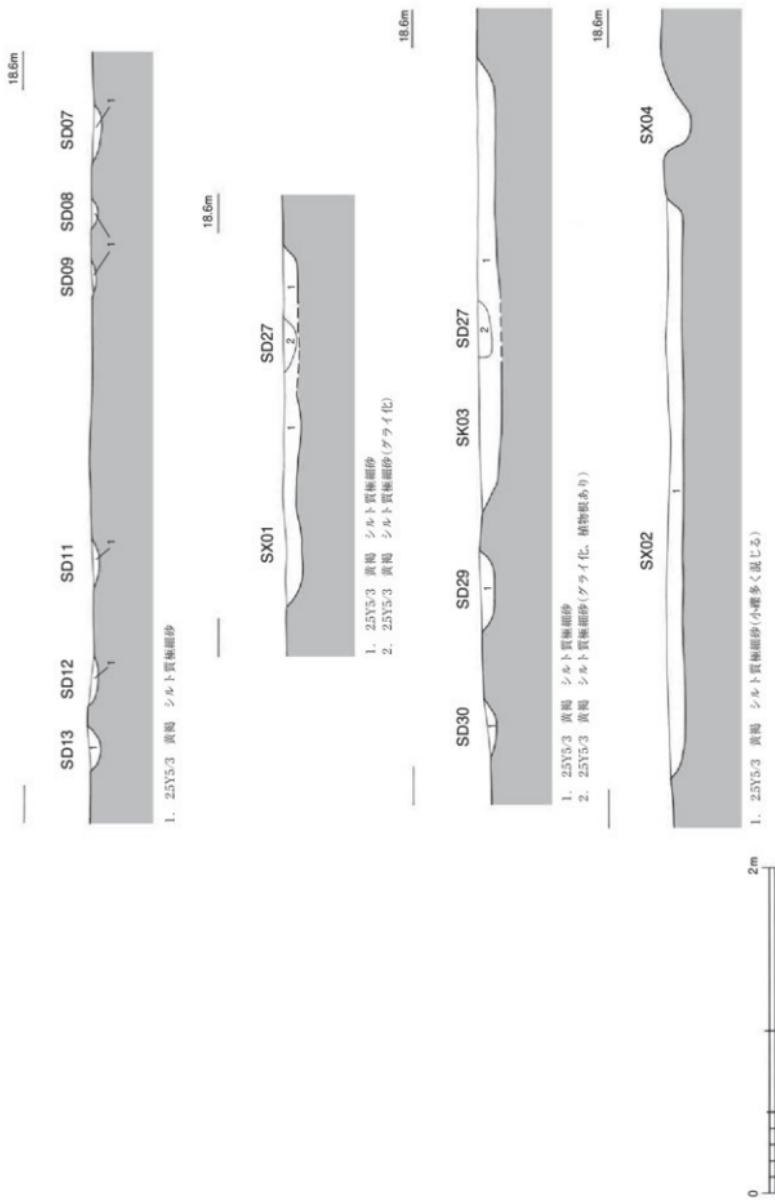


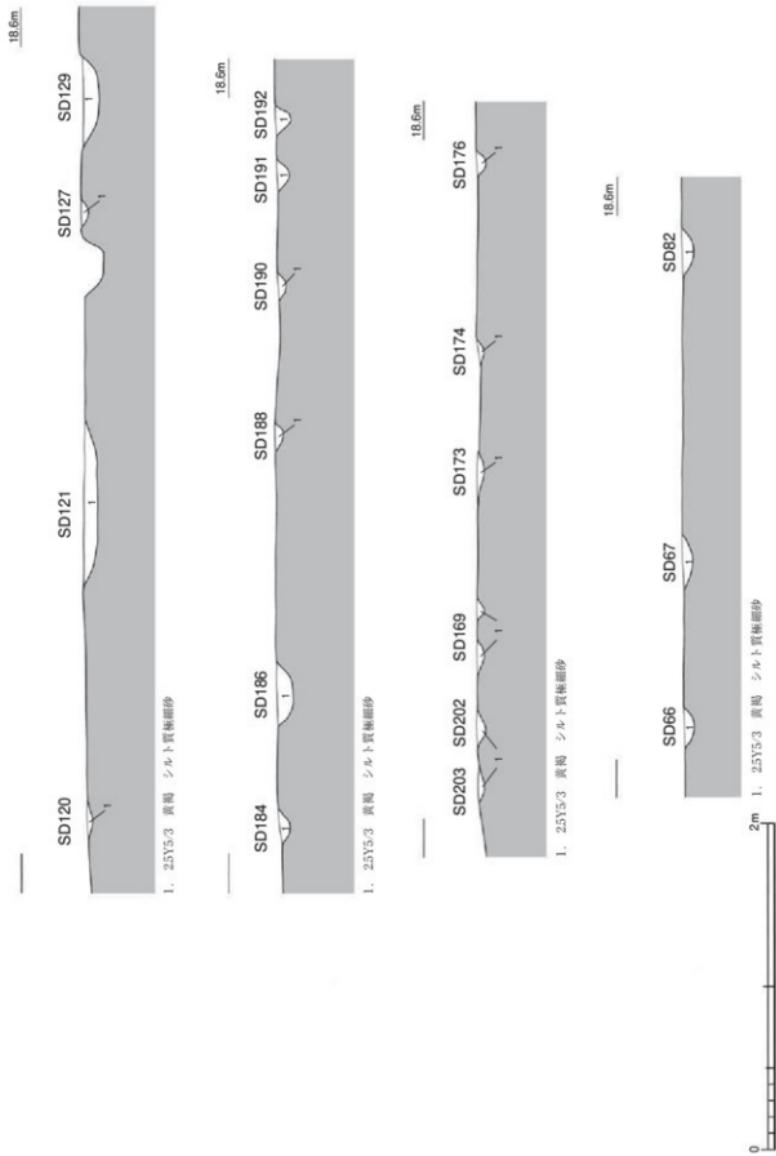
A1 地区 北壁断面図



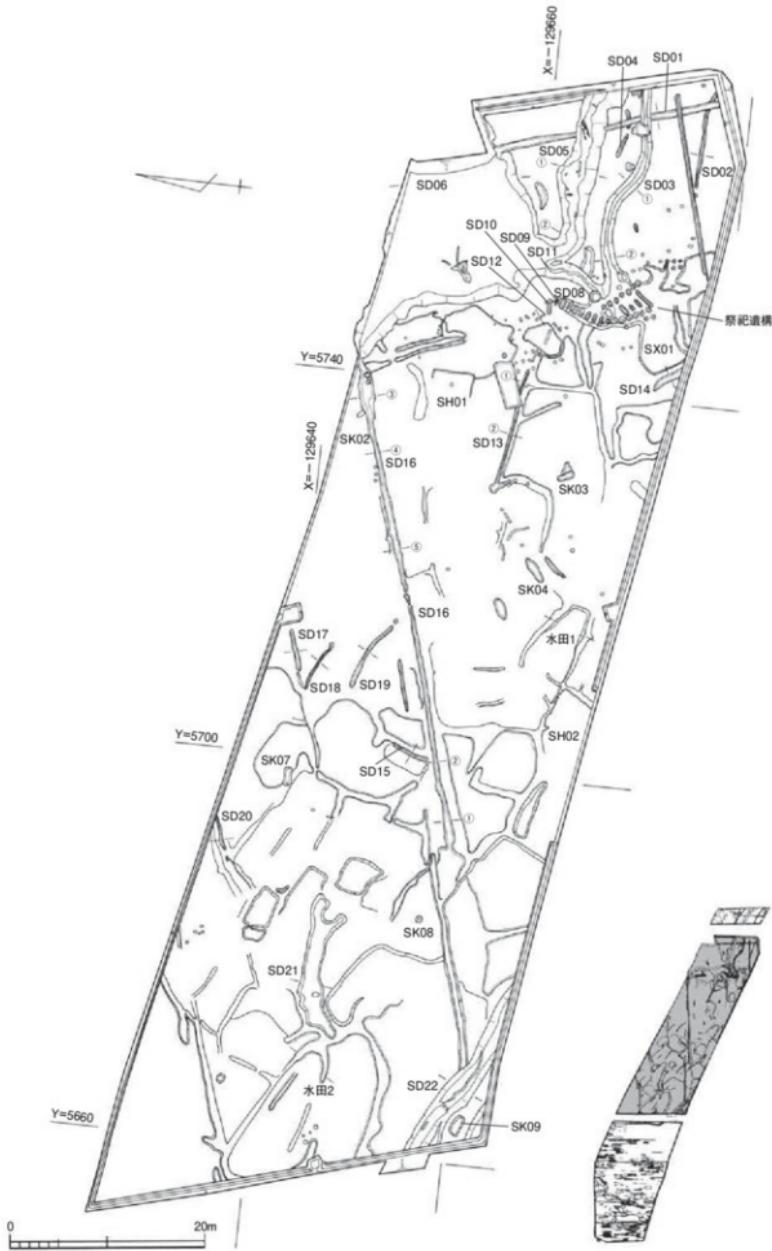
A 1 地区 土坑



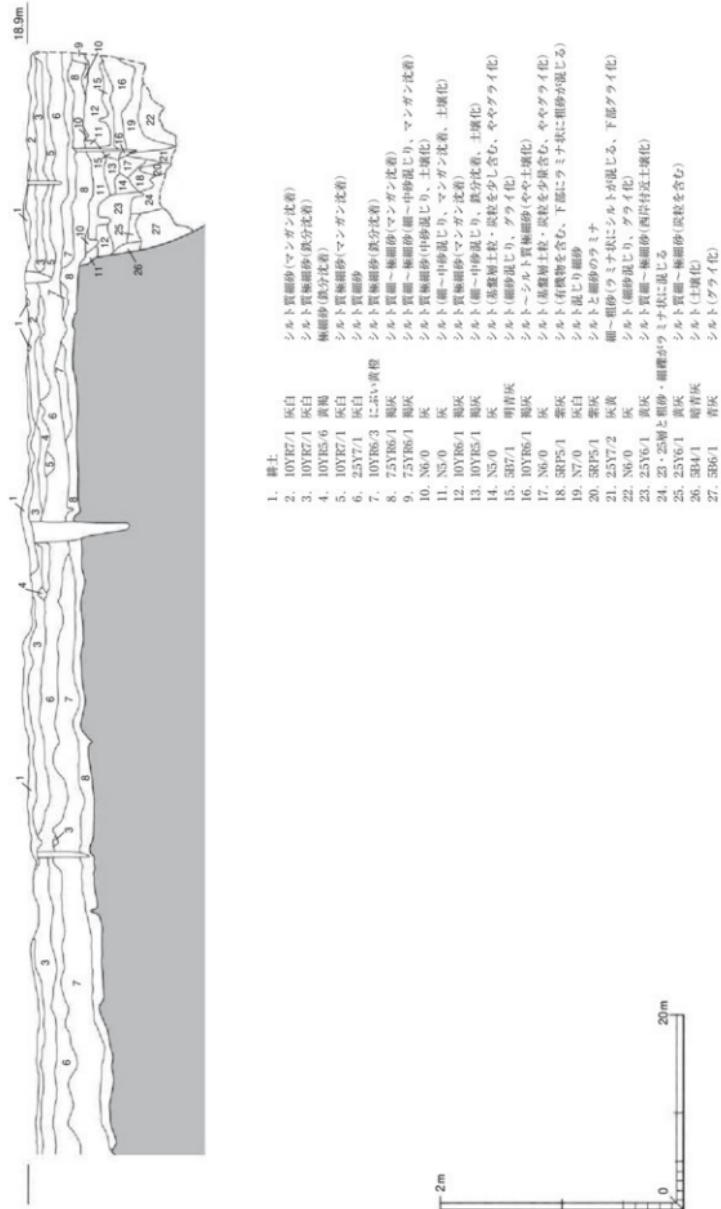




A 1 地区 溝(2)

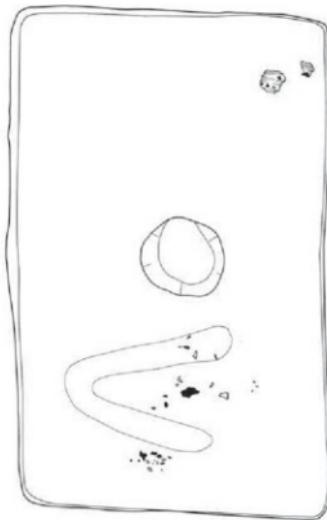


A2 地区 全体図

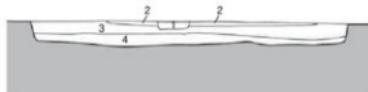


A2地区 北壁断面図

SH01



19.0m



1. 25Y7/3 淡黄 シルト質極細砂
2. 25Y6/2 灰黄 シルト質極細砂
3. 10Y6/3-4 暗褐 極細砂(焼土・炭が混じる)
4. 5YR3/4 暗褐 極細砂

SH02



2m



2m

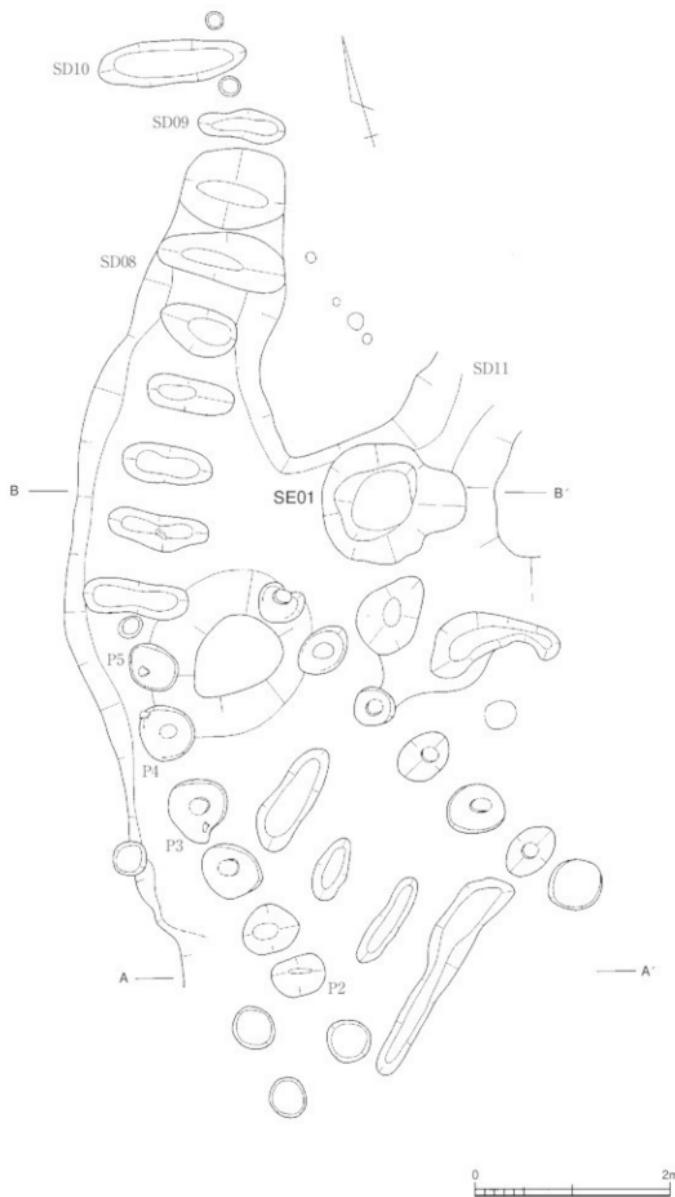


燒土

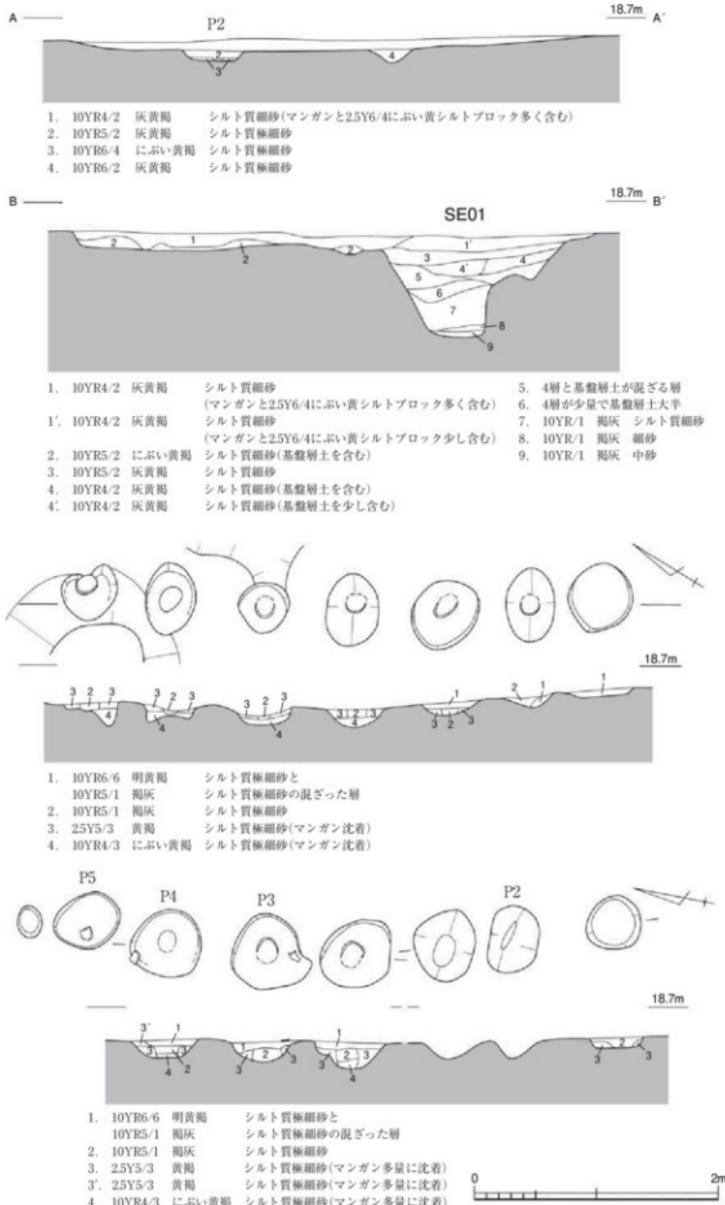


炭

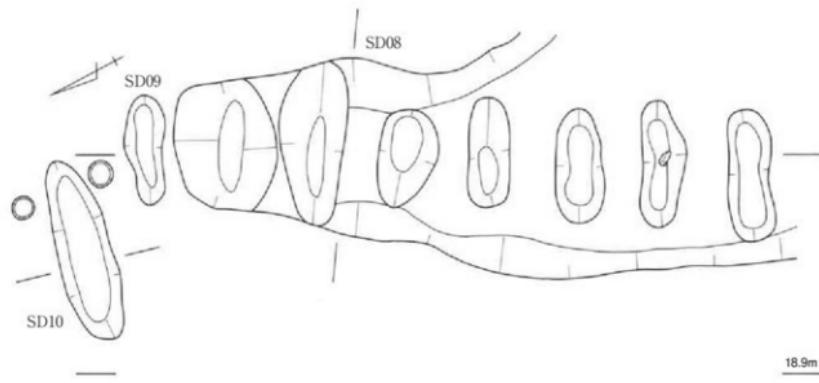
A2地区 壇穴住居跡



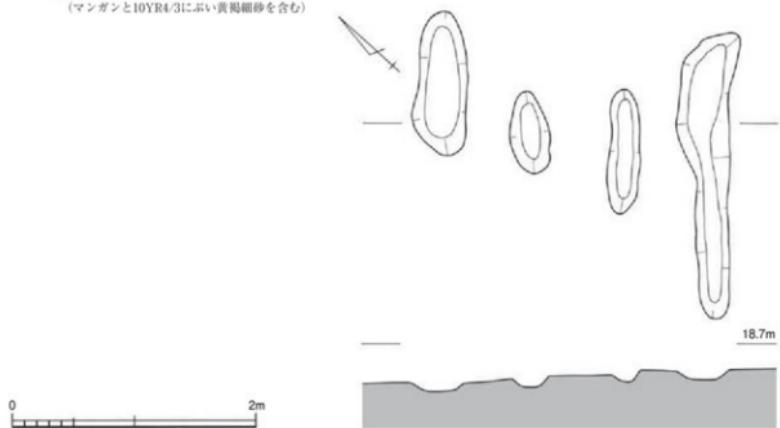
A2地区 祭祀遺構



A2地区 祭祀遺構断面図(1)



1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘細砂
(マンガンと10YR4/3にぶい黄褐細砂を含む)



SD10

18.7m



1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘細砂
(マンガンと10YR4/3にぶい黄褐細砂を含む)

SD08

18.7m

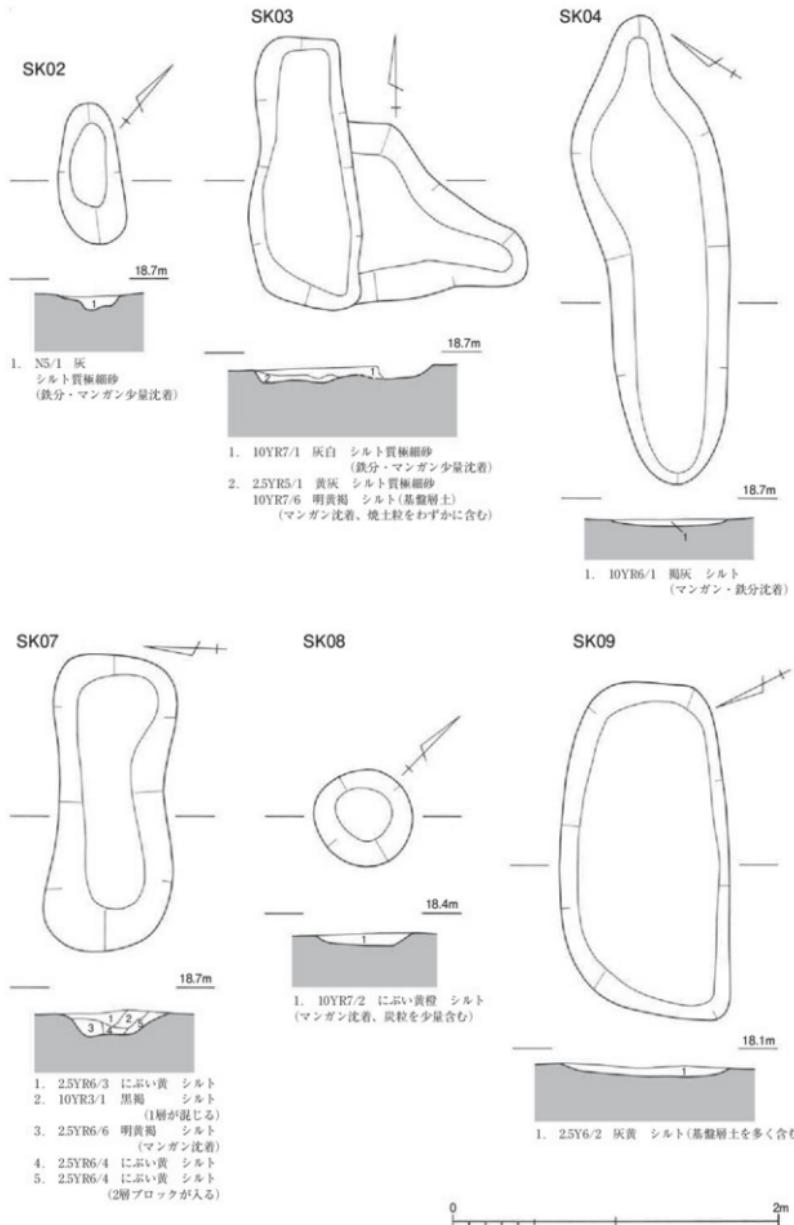


1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘細砂 (マンガンと10YR4/3にぶい黄褐細砂を含む)

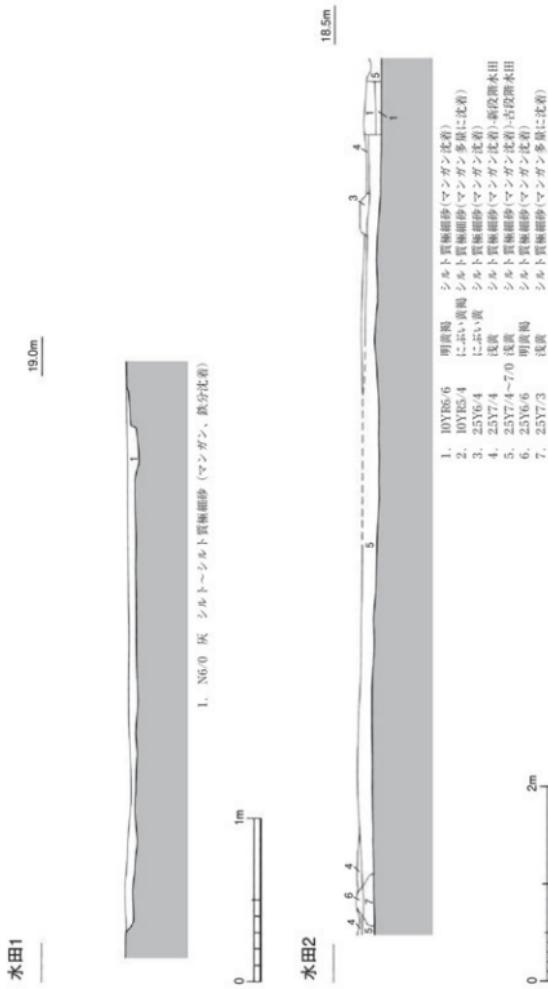


A2地区 祭祀遺構断面図(2)

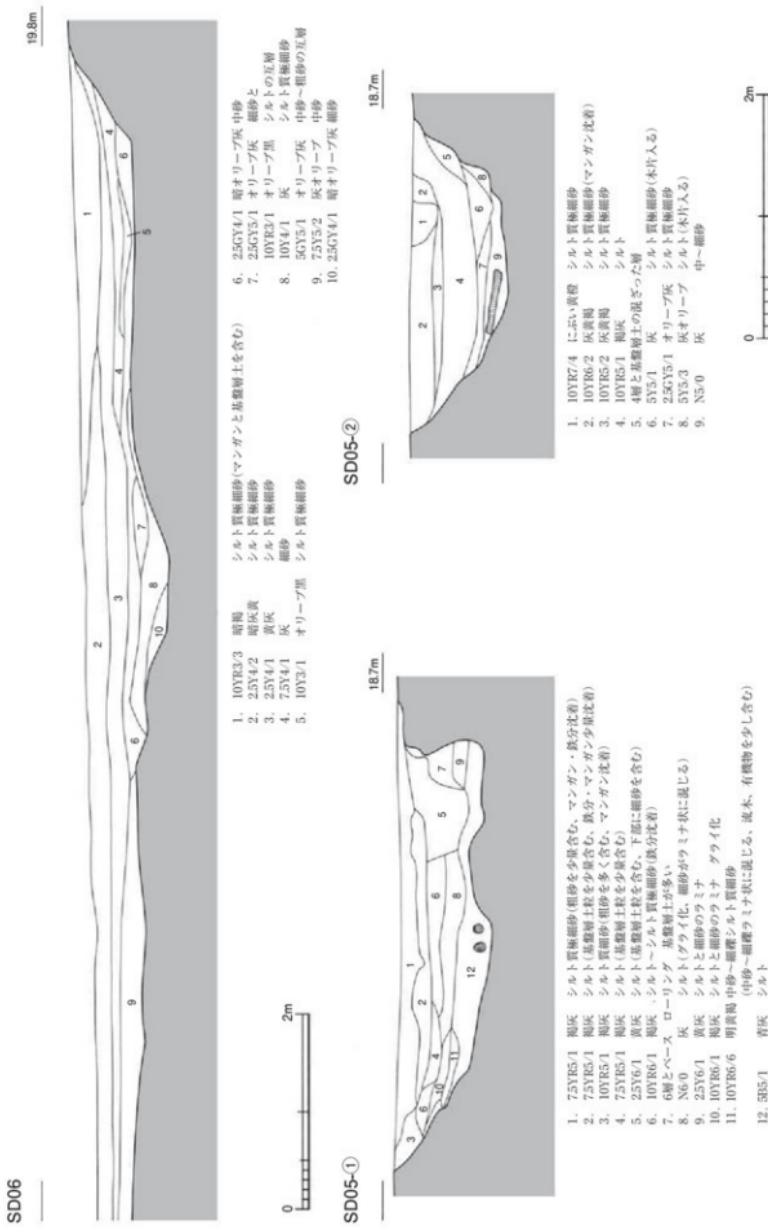
図版14



A2地区 土坑



A2地区 水田・畦畔



SD01

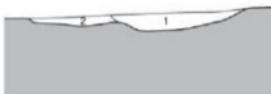
18.8m



1. 7.5YR6/1 開灰 シルト質極細砂(基盤層土とローリング)

SD16-①

18.7m



1. 10YR6/1 開灰 シルト質細砂(マンガン少量沈着)
2. 10YR6/1 開灰 シルト(マンガン沈着)

SD16-②

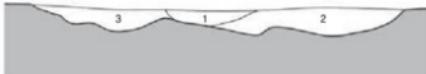
18.7m



1. 10YR6/1 開灰 極細砂
(基盤層土ブロック混じる、マンガン沈着)
2. 10YR7/1 灰白 シルト質極細砂
(鉄分・マンガン少量沈着)

SD16-③

18.6m



1. 10YR6/1 開灰 シルト質細砂(鉄分・マンガン沈着)
2. 10YR6/1 開灰 シルト質細砂(中～粗砂を含む)
(1層より鉄分・マンガン多量に沈着、基盤層土ブロック
少量混じる)
3. 10YR6/1 開灰 シルト質細砂
(鉄分・マンガン沈着、基盤層土ブロック少量混じる)

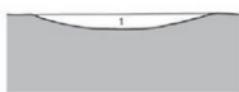
SD16-④

18.5m



SD16-⑤

18.5m



1. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
(マンガン多量に沈着)

SD14

18.7m



1. 25YR7/2 灰黄 シルト(基盤層土)
10YR6/1 開灰 シルト質極細砂
(マンガン・鉄分沈着)

SD17

18.6m



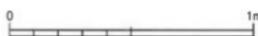
1. 10YR7/6 明黄褐 シルト(基盤層土)
10YR7/1 灰白 シルトブロック

SD20

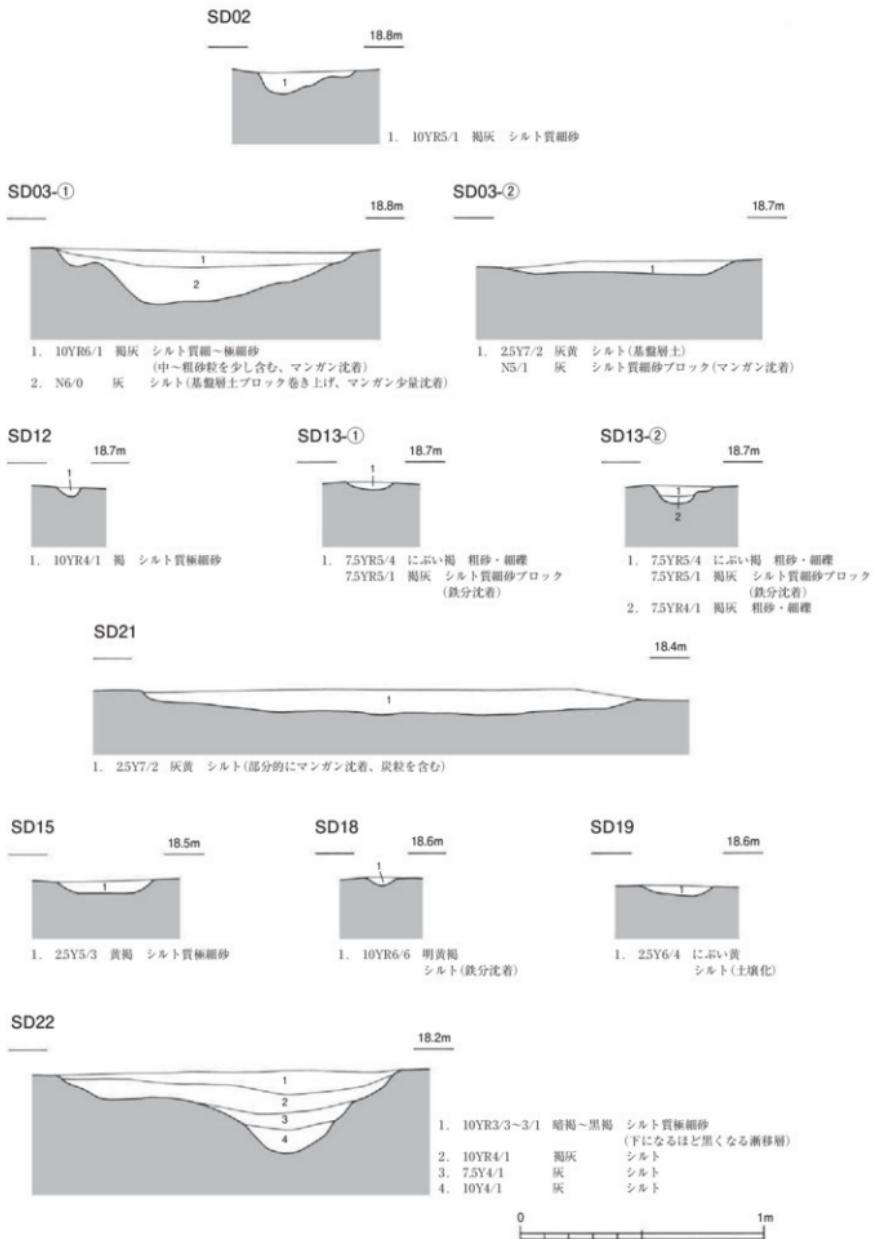
18.5m



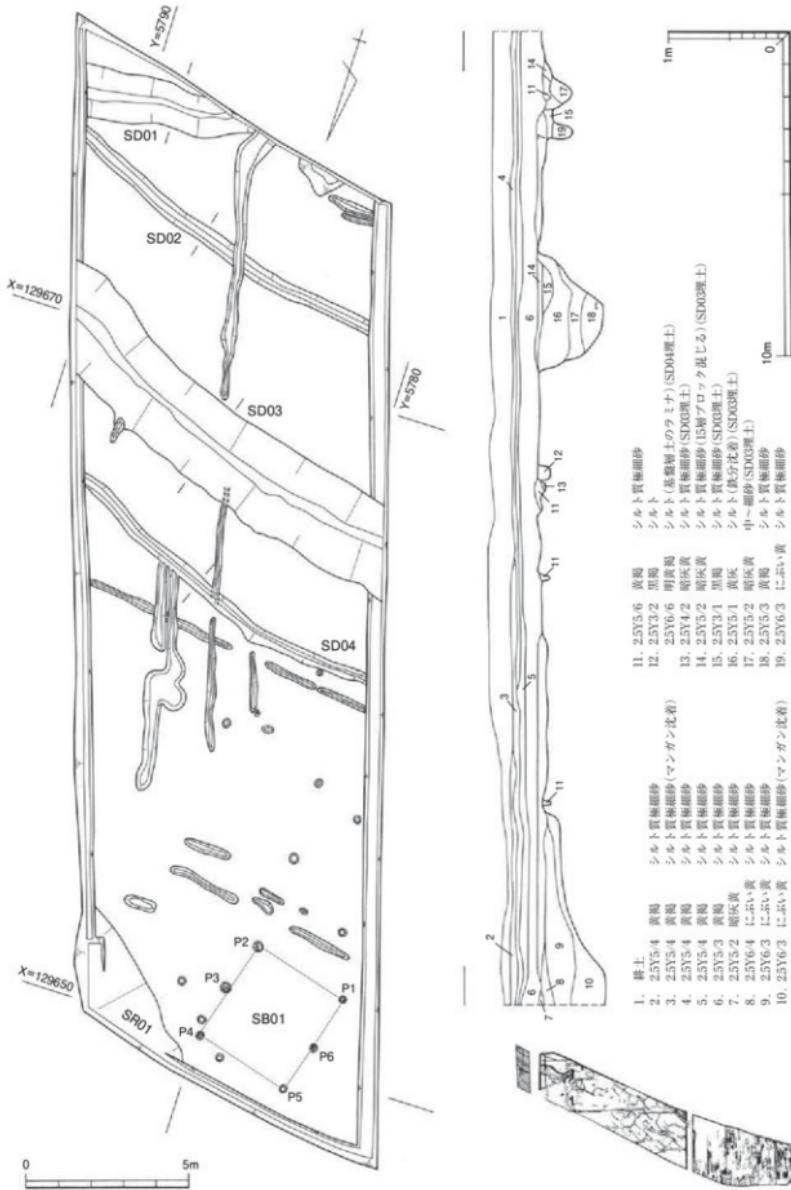
1. 10YR7/6 明黄褐 シルト
(基盤層土)(マンガン沈着)
2.5Y6/1 黄灰
シルト質極細砂ブロック



A2地区 溝(2)

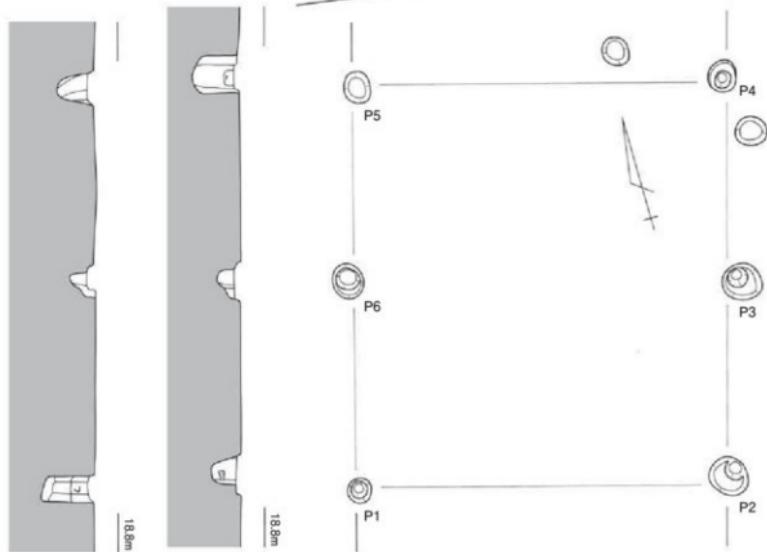


A2地区 溝(3)



B地区 全体図・東壁断面図

SB01



SD01

19.0m



1. 10YR8/6 黄橙 シルト(基盤層土)
- 10YR6/1 褐灰 シルト質極細砂のブロック
2. 10YR6/1 褐灰 シルト質やや極細砂(上面にマンガン沈着)
3. 10YR5/1 褐灰 シルト
4. 25Y7/1 白灰 細砂～粗砂(中に鉄分沈着)

SD02

19.0m



1. 25Y6/1 黄灰 シルト質極細砂(粗砂を含む、上面にマンガン沈着)
2. 25Y5/1 黄灰 シルト

SD04

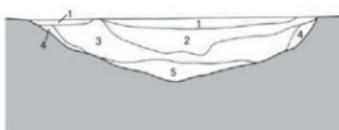
19.0m



1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂(マンガン沈着)
2. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂
- 25Y8/3 淡黄 シルト ローリング

SD03

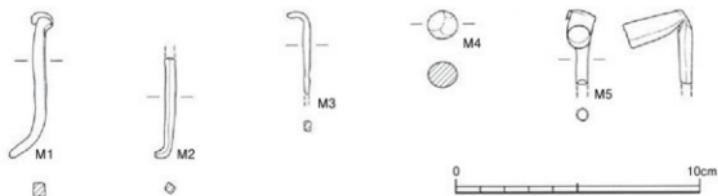
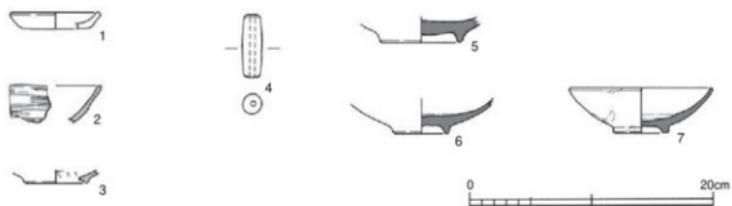
19.0m



1. 10YR6/1 褐灰 シルト質極細砂(マンガン・鉄分沈着、凹みに上層が堆積したもの)
2. 7.5YR5/1 褐灰 シルト(粗砂を少し含む)
3. 7.5YR6/1 褐灰 シルト
4. 7.5YR6/1 褐灰 シルト(粗砂・砂礫を含む)
5. 7.5YR6/1 褐灰 シルト
- SG6/1 細灰 細～中砂のラミナ



A 1 地区



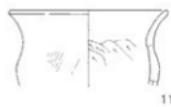
出土遺物(1)

A2地区

SH01



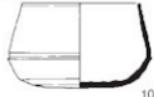
SD05



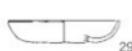
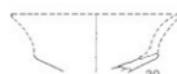
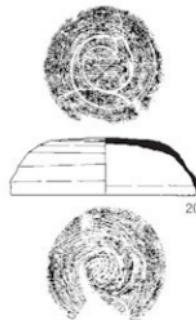
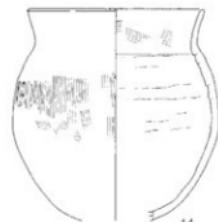
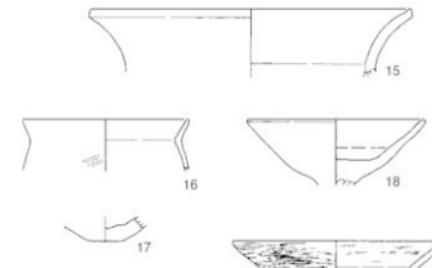
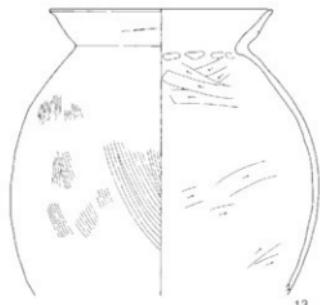
SH02



SX01



SD06

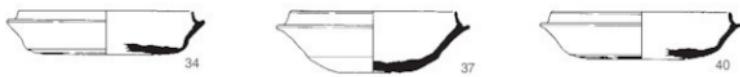
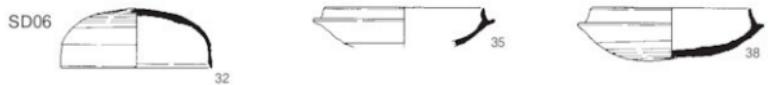


0

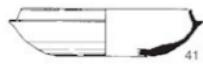
20cm

出土遗物(2)

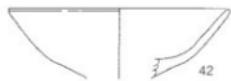
A2地区



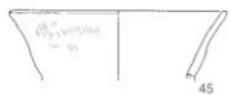
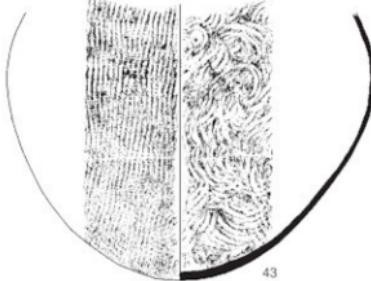
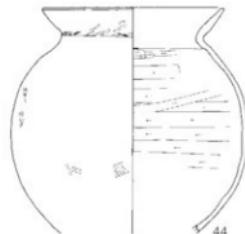
SD08



SD11



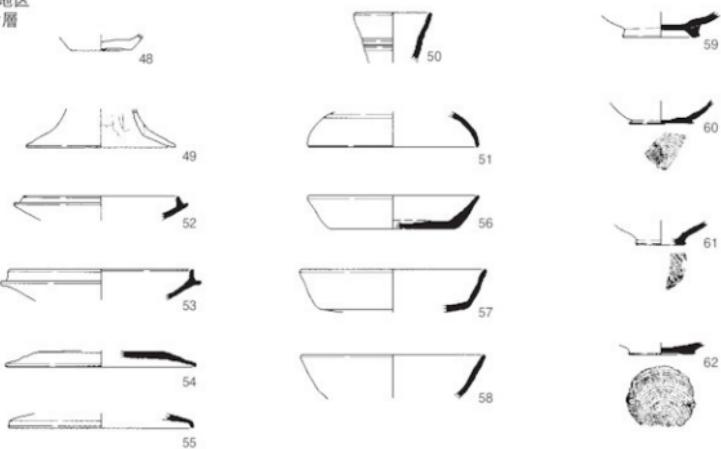
SD22



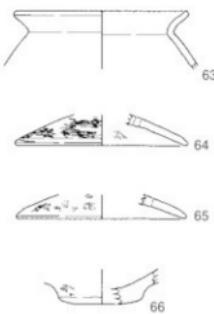
0 20cm

出土遺物(3)

A2地区
包含層



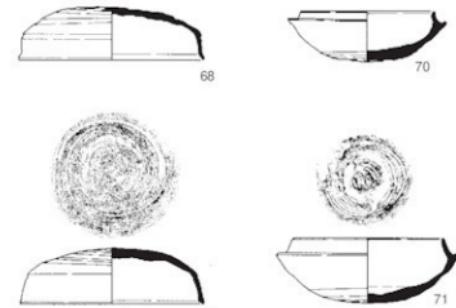
B地区
SB01



SD01



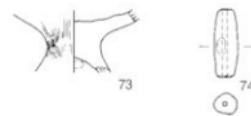
SD03

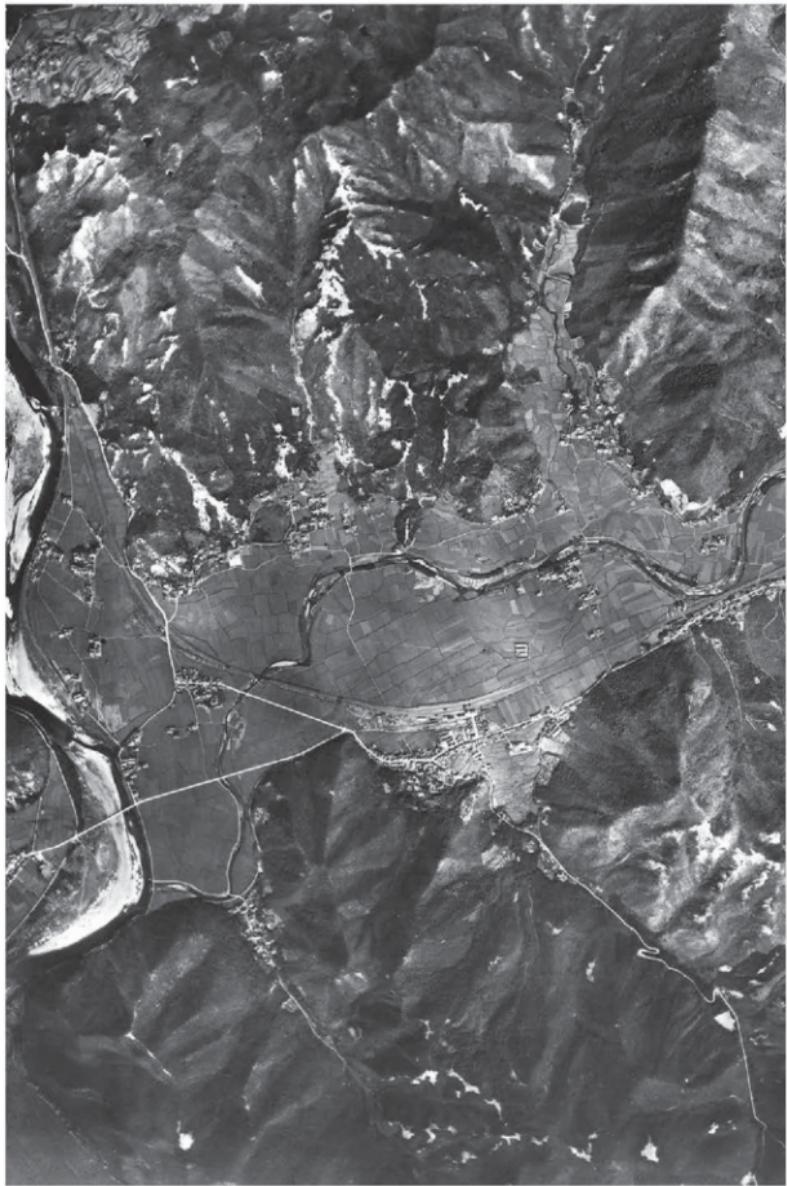


北落ち込み



包含層





遺跡周辺空中写真（1947年　米軍撮影）

写真図版 2



A 1 地区
SK05断面 (南から)



A 1 地区
左) SK06 (北から)
右) SK06断面 (南から)



A 1 地区
SX02断面 (南から)

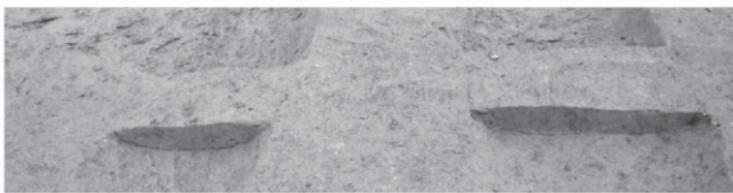


A 1 地区
溝と現況畦畔 (南から)



写真図版 4





写真図版 6



A 1 地区
S D 121断面（南から）



A 1 地区
S D 129断面（南から）



A 1 地区
S D 174・176断面（南から）



A 1 地区
S D 184・186断面（南から）



A 1 地区
西壁断面



写真図版 8



A 1 地区
南北断割
トレンチ (南東から)



A 1 地区
南北断割
トレンチ断面① (東から)



A 1 地区
南北断割
トレンチ断面② (東から)



A 2地区 全景①(西から)



A 2地区 全景②(東から)

写真図版10



A2地区
西半部①(西から)



A2地区
西半部②(東から)



A2地区
東半部(南西から)



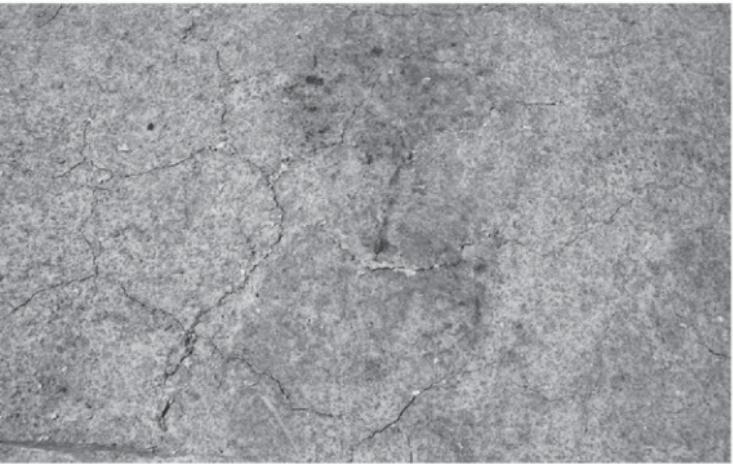
A 2地区
S H01検出状況（東から）



A 2地区
S H01断面（南から）



A 2地区
S H01完掘状況（南から）



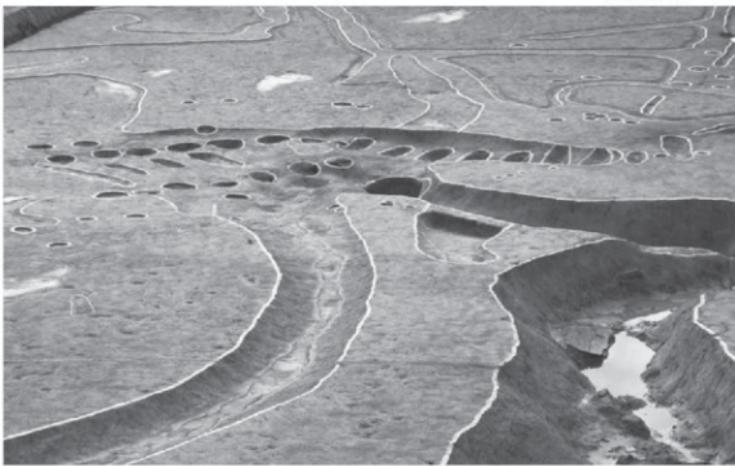
A 2 地区
S H01炭化物検出状況（東から）



A 2 地区
S H01炉（南から）



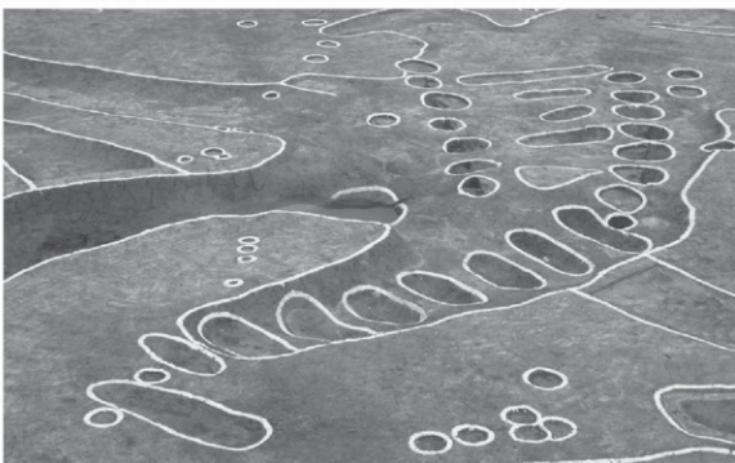
A 2 地区
左) S H02
炭化物検出状況（東から）
右) S H02
断面（南から）



A 2地区
祭祀遺構遠景（東から）



A 2地区
祭祀遺構①（西から）



A 2地区
祭祀遺構②（北から）



A2地区
祭祀遺構③（南西から）



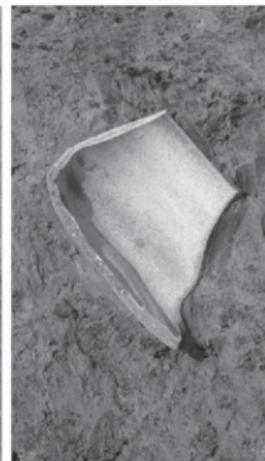
A2地区
祭祀遺構検出状況（西から）



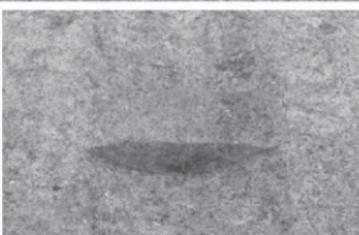
A2地区
祭祀遺構断面①（南から）



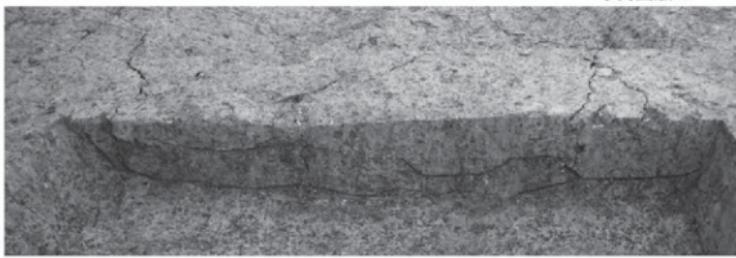
A2地区
祭祀遺構断面②（南から）



A 2地区
祭祀遺構P 2断面（南から）



A 2 地区
左) S D09断面
右) S D10断面



A 2地区
SK03断面 (南から)



A 2地区
SK04断面 (南西から)



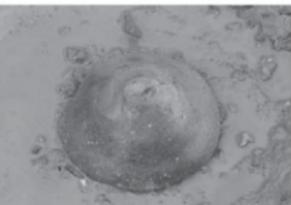
A 2地区
SK07断面 (西から)



A 2地区
SK08断面 (北西から)



A 2地区
SK09断面 (東から)





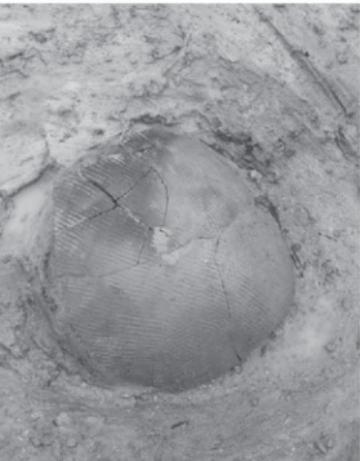
A 2地区
S D06 (南東から)



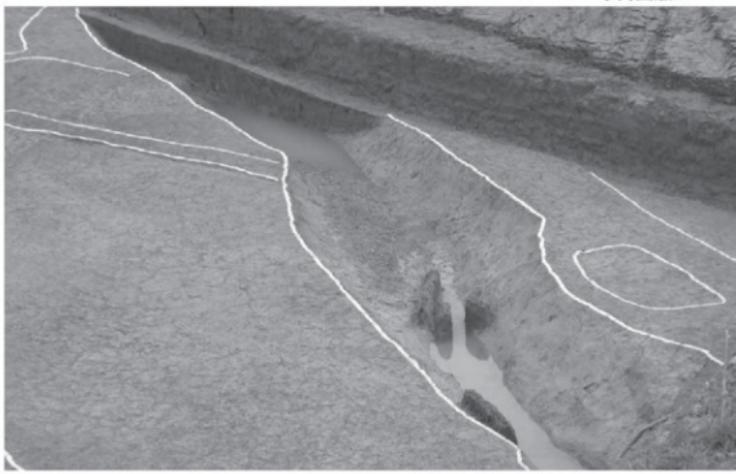
A 2地区
S D06東西断面 (南東から)



A 2地区
S D06南北断面 (南西から)



A 2 地区
S D 06 遺物出土状況



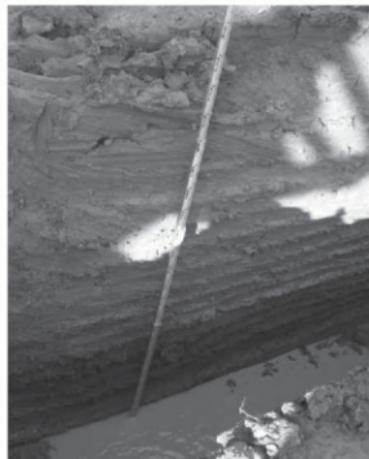
A 2地区
S D22 (北西から)



A 2地区
S D22断面 (西から)

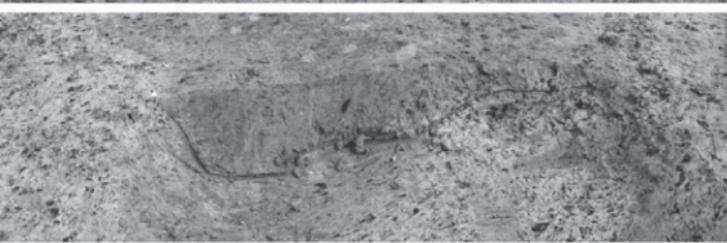


A 2地区
左) S D22遺物出土状況
右) S D22断割面 (東から)





A 2 地区
S D01断面 (南から)



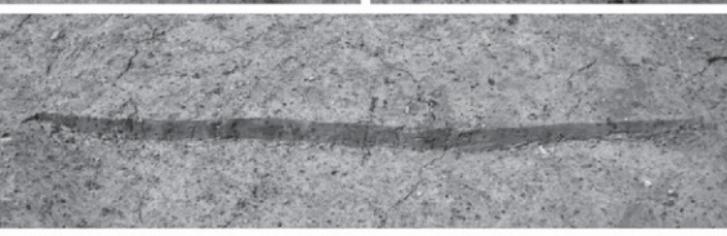
A 2 地区
S D02断面 (西から)



A 2 地区
S D03断面① (東から)



A 2 地区
左) S D13断面① (西から)
右) S D13断面② (西から)



A 2 地区
S D14断面 (南から)



A 2 地区
S D15断面 (南から)

A 2地区
S D16断面① (西から)



A 2地区
S D16断面② (西から)



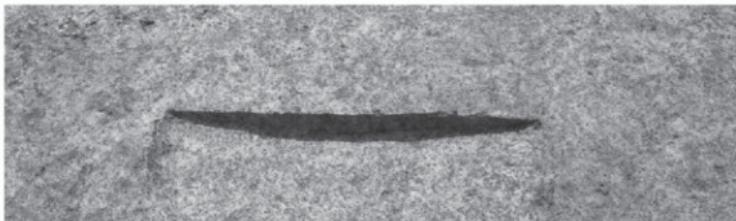
A 2地区
S D16断面③ (西から)



A 2地区
S D16断面④ (西から)

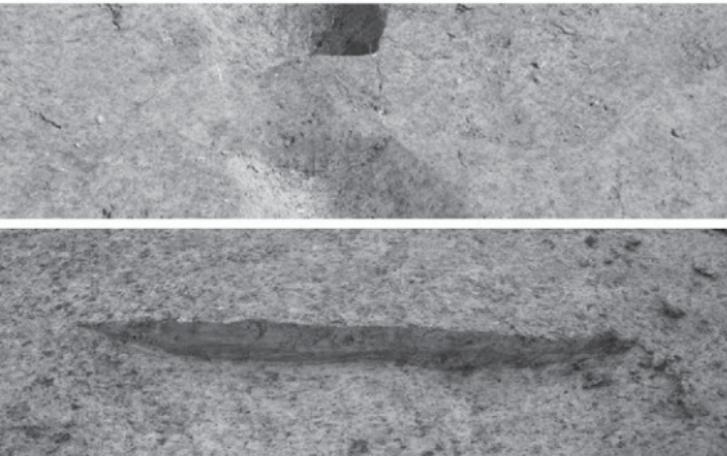


A 2地区
S D16断面⑤ (西から)



A 2地区
S D17断面 (南西から)





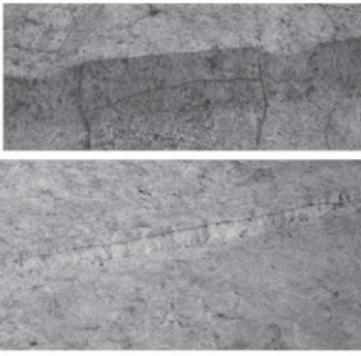
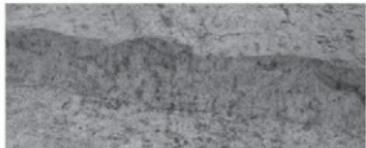
A 2地区
S D18断面 (西から)

A 2地区
S D20断面 (西から)

A 2地区
水田① (北西から)

A 2地区
水田② (南西から)

A 2 地区
水田畦畔
断割断面（西から）



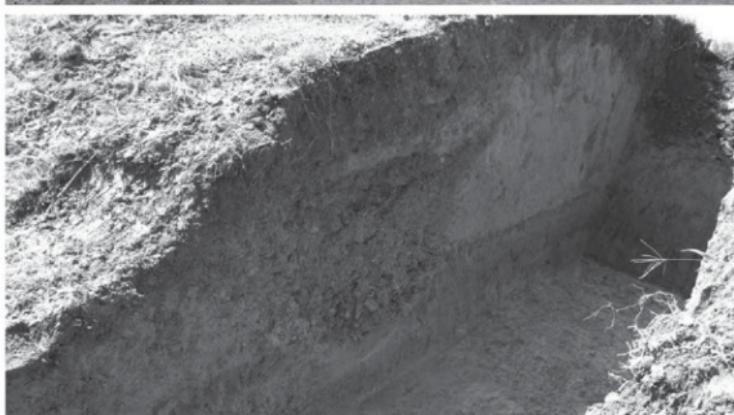
A 2 地区
水田断面（西から）



A 1・A 2 地区間
畦畔断割断面①（北から）



A 1・A 2 地区間
畦畔断割断面②（南から）



A 2・B 地区間
畦畔断割断面（北東から）



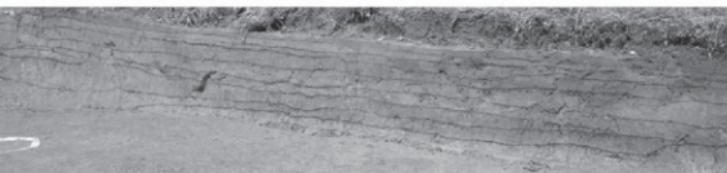
B地区
全景① (北から)



B地区
全景② (南西から)



B地区
東壁断面① (南西から)

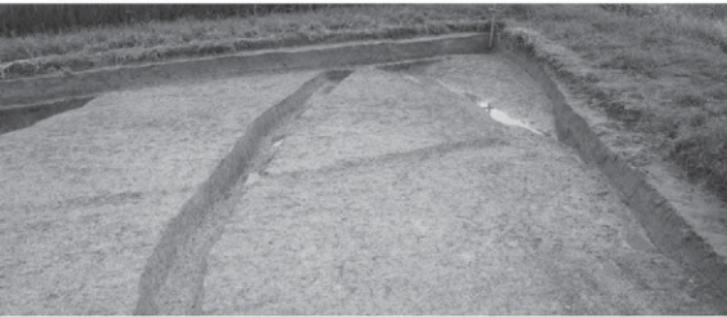


B地区
東壁断面② (南西から)



B地区
左) S B01 P3
断割断面 (西から)
右) S B01 P4
断割断面 (西から)

B地区
左) S B01 P5
断割断面 (西から)
右) S B01 P6
断割断面 (西から)



B地区
S D01・02 (西から)



B地区
S D01
断面
遺物出土状況 (西から)



B地区
S D02断面 (西から)



B地区
S D04断面 (西から)



B地区
S D03・04 (西から)



B地区
S D03 (西から)

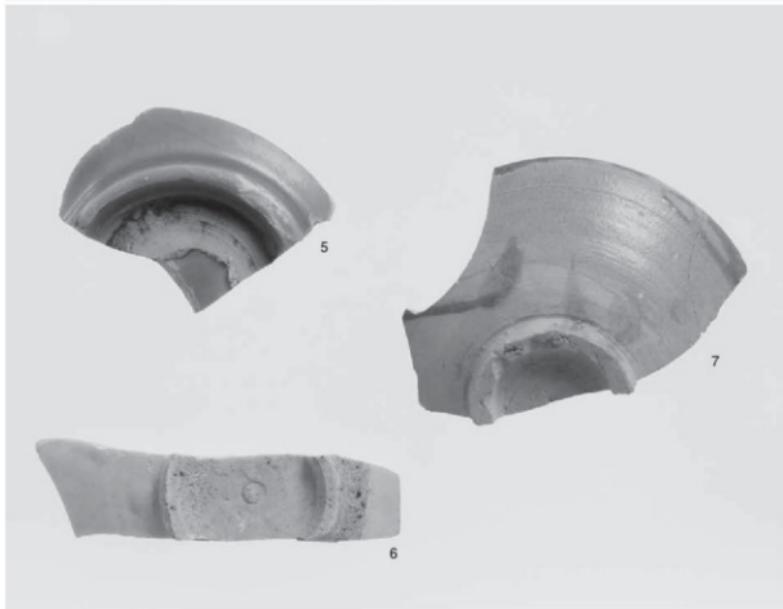
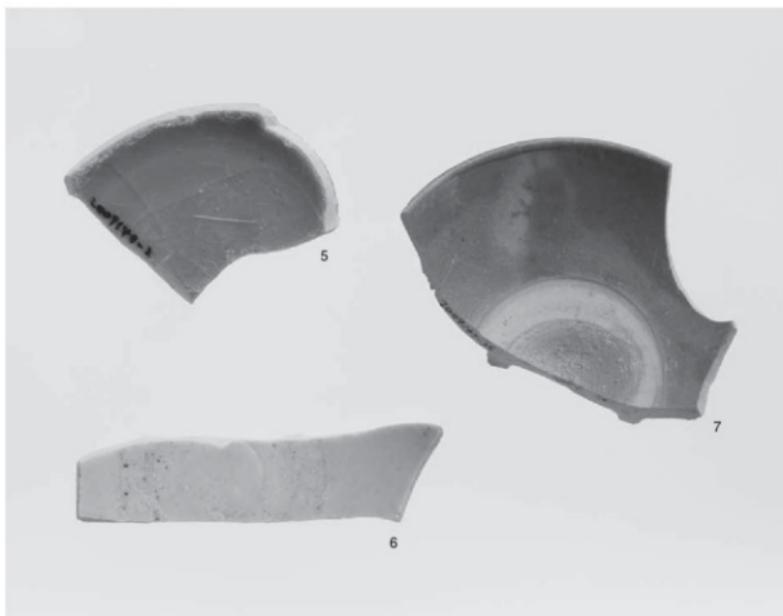


B地区
S D03断面 (西から)

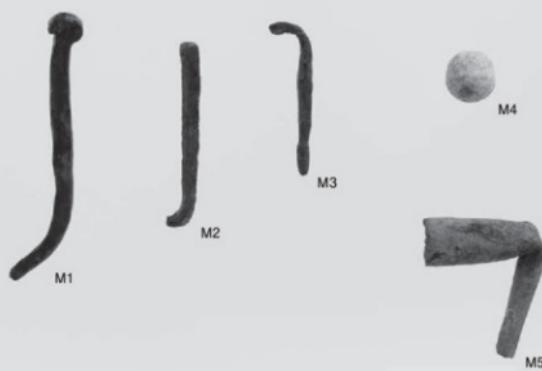


B地区
S D03遺物出土状況





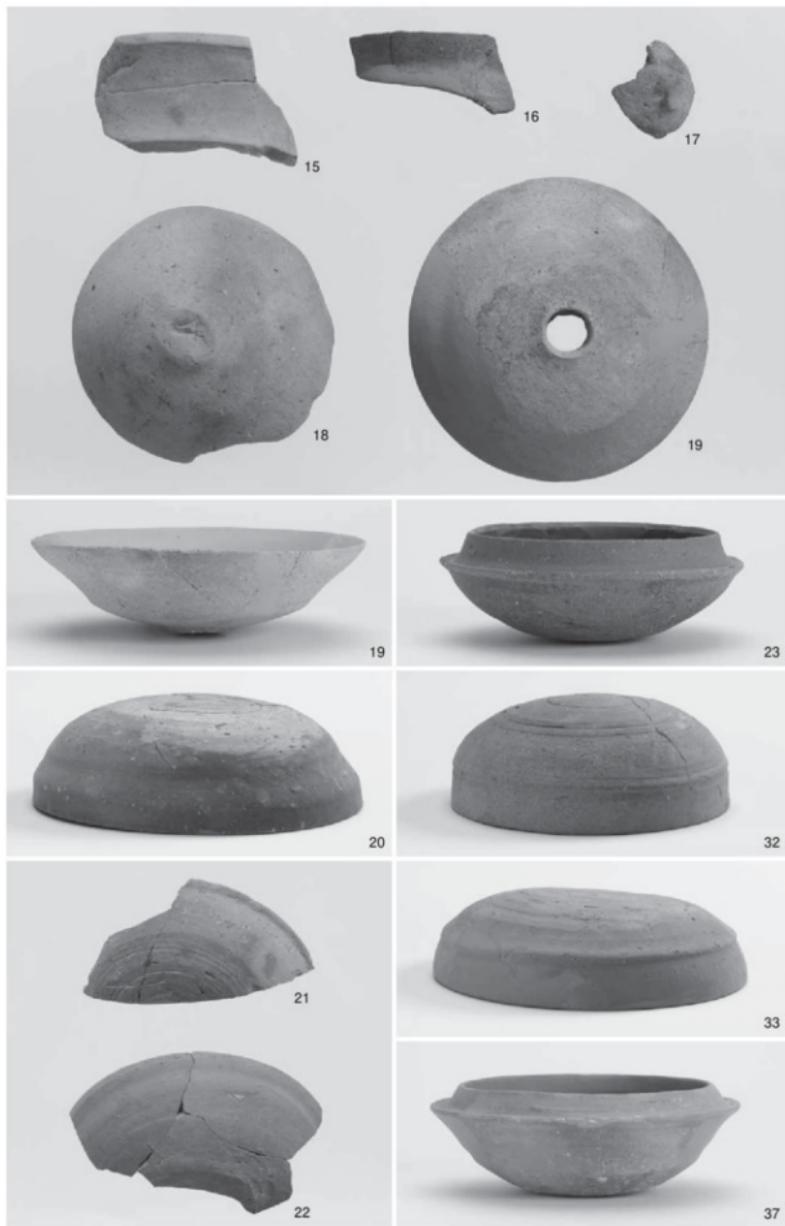
A 1 地区 出土遺物 (1)



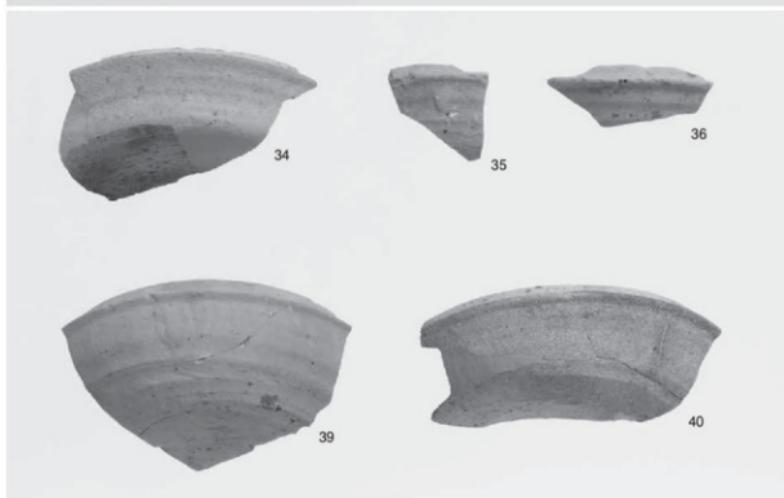
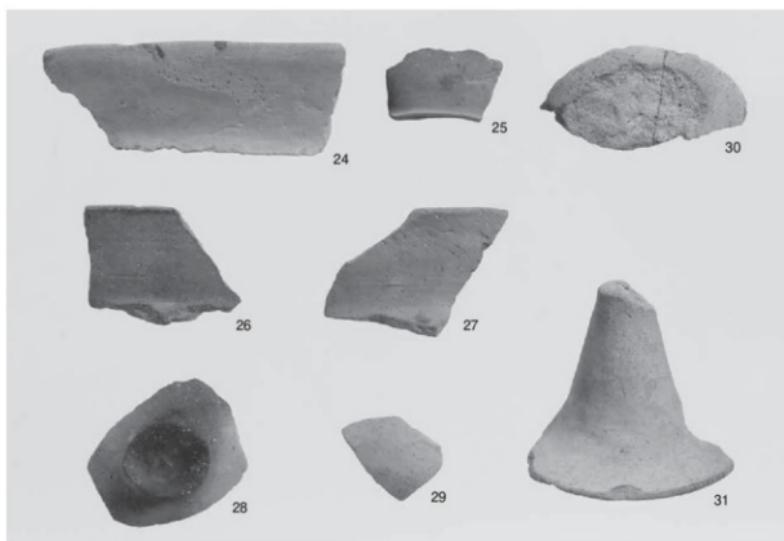
A 1 地区 出土遺物 (2)



A 2地区 出土遺物 (1)

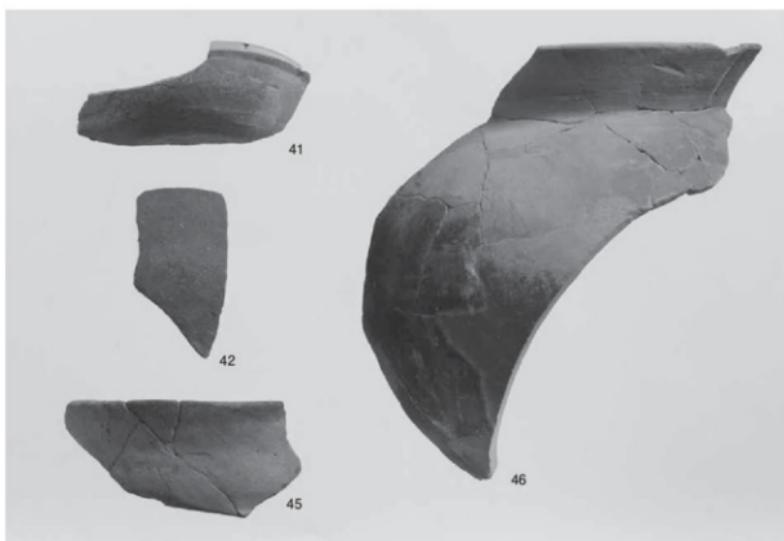


A 2 地区 出土遺物 (2)

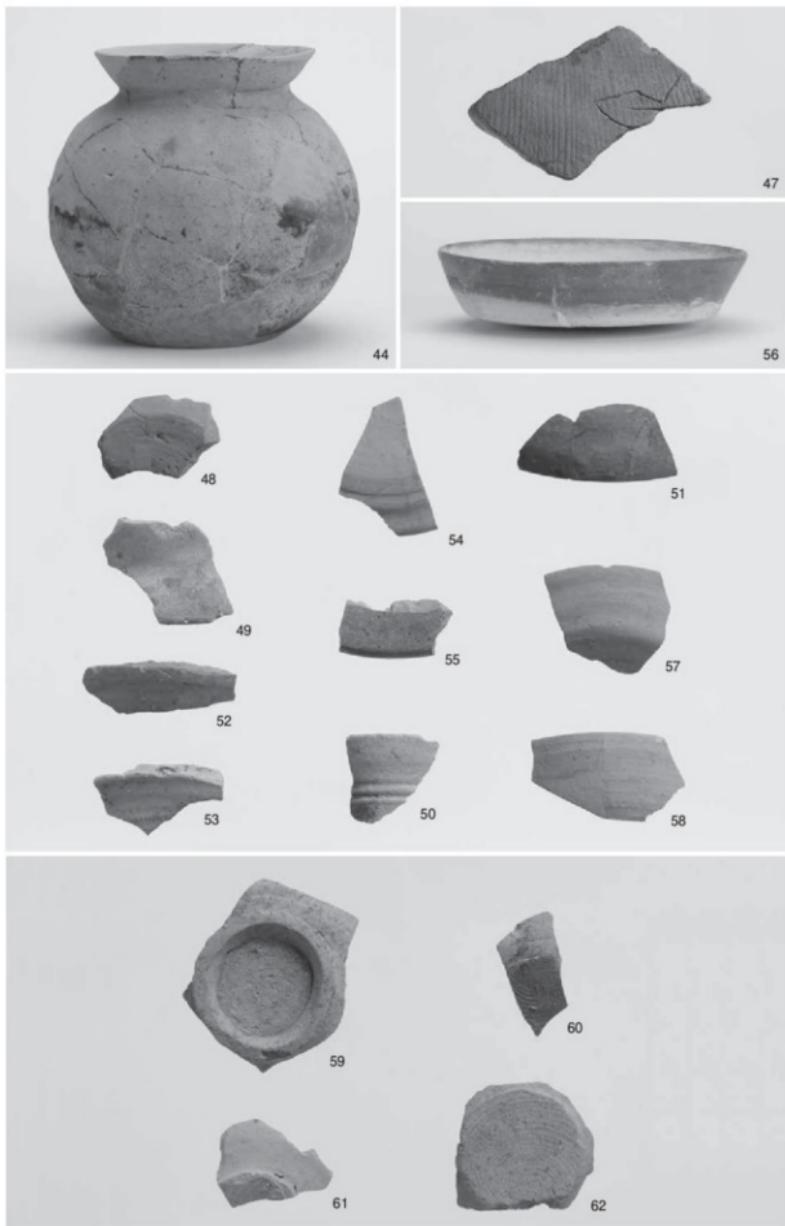


38

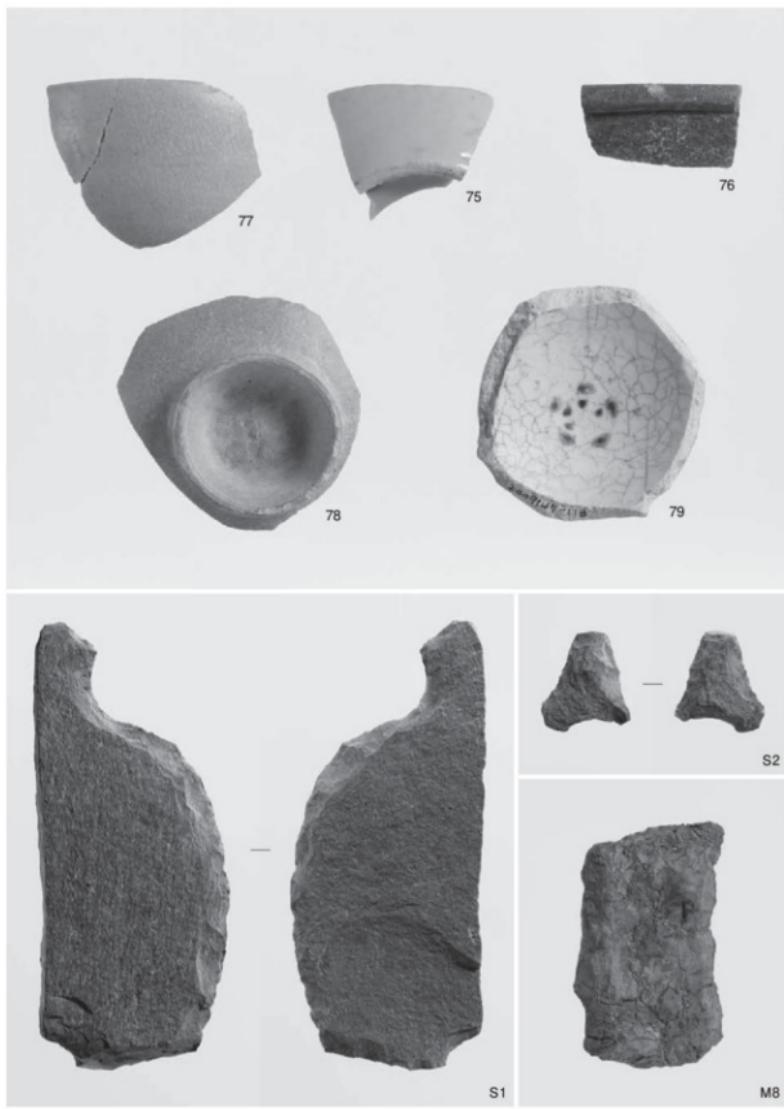
A 2 地区 出土遺物 (3)



A2地区 出土遺物 (4)



A 2 地区 出土遺物 (5)



A2地区 出土遺物 (6)



B地区 出土遺物

兵庫県文化財調査報告 第457冊

赤穂市

有年原・クルミ遺跡

－一般国道2号相生有年道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成26（2014）年2月26日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社 神戸新聞総合印刷

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-5-7
